

小神明遺跡群IV

—団体営小神明土地改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

湯 気 遺 跡

九 料 遺 跡

1 9 8 6

前橋市教育委員会

小神明遺跡群 IV

遺物観察表

前橋市教育委員会

| 番号 | 器 形 | 寸 法 | 器 形 の 特 徴 | 整 形 | 調 整 | ○内色調2外色調3胎土4焼成 ⑤模様⑥出位置のその他 |
|------------|-----------------|---------------------|---|--|--|---|
| H-14 4 | 土器器 杯 | 134 56 | 丸底、球形に近い体形。 口縁は急角度で外反、 内面も腰をなして、外へ傾く。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ 内面、放射状にヘラミ ガキ | ①10R%赤褐色②10R%赤褐色 ③1mmの黒色石粒を含む④ 良好⑤%⑥底直⑦二次焼成 あり、スス付着あり、和泉 に近い。 |
| H-22 25 | 土器器 高 瓶 | - (95) | 直線的にやや開いて立 ち上がる。器は急速に 広がり端部は、ほぼ水 平になっている。 | 横み上げた後、外向は ヘラケズリ。内面はニ グリこんでいる。外向 は上下方向、瓶部は放 射状から横方向。 | ヘラミガキの後ナデを 外向と瓶部内面にはど こす。 | ①7.5YR%浅黄褐色②75YR %浅黄褐色③1mmの黒色石粒 を含む④良好⑤%⑥底直⑦ 赤色施彩の跡あり、脚部上 半分に二次焼成の跡。和泉 湖高杯、和泉 |
| H-22 50 | 土器器 壺 | 203 | 有段口縁、折り返した 後、ヘラミガキが内外 面、上下方向にかかる。 | ヘラケズリ | 口縁は、ヨコナデ。後 ヘラミガキ。内向ナデ、 外向ヘラミガキ。 | ①10YR%黄褐色②10YR% 浅黄褐色③長石を含む④良好 ⑤%⑥底直⑦和泉 |
| H-23 3 | 土器器 壺 | (134) 残 高 305 | 浅く、平たい形。口縁 は、ほぼ垂直に立ち上 がる。 | 横方向のヘラケズリ | 内外共にナデ | ①75YR%にぶい種②75 YR%浅黄褐色③1.2mmの黒色 石粒を含む④良好⑤%⑥底直 ⑦部分的に、地山中の鉄 分によって、赤褐色に変色 している。盤状の杯。真間 |
| H-25 4 | 土器器 杯 | 120 37 | 浅く、平らな形。口縁 は、体部から急角度で まがり、垂直に立ち上 がる。 | 底部外向ヘラケズリ。 指でおさえて薄く造っ ている。 | 全面ナデ。口縁ヨコナ デ。内面は、ていねい にナデを施している。 | ①5YR%橙②75YR%橙 ③1mmの黒色石粒を含む④ 良好⑤%⑥底直⑦内面赤色 施彩。真間 |
| H-25 13 | 土器器 杯 | 145 345 | 浅く、平たい形。口縁 は、ほぼ垂直に立ち上 がり。口唇部では内面 | 底部ヘラケズリ。指で 押して薄くしている。 | 全面にナデ。口縁部ヨ コナデ。 | ①5YR%にぶい種②5YR %にぶい種③1~2mmの黒 色石粒を含む④良好⑤%⑥ 底直⑦地山中の鉄分により、 赤褐色に変色している。 真間 |
| H-26 1 | 土器器 甕 | 183 326 | 最大径やや上。底面半 球を造り付けている。 口縁は、ゆるやかに広 がる。 | 口縁部、輪積みハケ目 整形。体部、輪積みハ ケ目整形。 | ヨコナデ調整 | ①75YR%浅黄褐色②10R% 赤褐色③1mmの大黒色石を含 む④良好⑤%ほぼ完形だが、 体部に剝離あり⑥底直⑦和泉 |
| H-26 12 | 土器器 杯 | 112 64 | 平底、体部中央に最大 径。口縁は外反、内面 も腰をもって外反。底 部は厚い。 | 外向ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ。内面、 ナデの後、ヘラミガキ | ①にぶい黄褐色②10YR%に ぶい黄褐色③堅石、麻弦鐵、 石炭、紫蘇輝石④良好⑤完 形⑥底直⑦二次焼成あり、 和泉 |
| H-26 13 | 土器器 甕 口 縁 | (271) - | 体泡は、ほぼまっすぐ で、あまりふくらみを 持たない。口縁は、や や内側に丸く凹く。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ、後ナデ | ①5YR%淡橙②1~2mm の石英、長石を含む③3~4 mmの石粒を含む。④良好⑤ %⑥底直⑦二次焼成⑧5YR %灰褐色。全体に焼成を受け ザザラである。和泉 |

| 番号 | 器 形 | 寸 法 | 器 形 の 特 徴 | 整 形 | 調 整 | ①内色調②外色再上輪付④焼成⑤布存⑥出土位置⑦その他 |
|-------------|-------------------|---------------------------|--|-----------------------------------|---------------------------|--|
| H-26 15 | 土器器 高 环 坏 部 | 180 残 高 52 | 环底部に外縁を持ち、直線的に広がる。口唇部は、わずかに内側に向くなる。 | 环底部と体部をつけ、ハケ目がかかる。 | 全面ヨコナデ。内面には、ヘラミガキ | ①75YR ₄ 赤 ₂ 淡黄 ₃ ②1mmの黑色石程を含む④良好⑤环部のみ⑥床底⑦BR ₉ にぶい様、赤色塗彩の一端のところ、二次焼成を受ける。和泉型、Ⅰ期 |
| H-26 16 | 土器器 坏 | 154 80 | 体部や下で急角度でまがる。底部平底、接合痕がのこる。 | 内外面、輪留みハケ目 | 口縁部ヨコナデ | ①10R ₄ 赤 ₂ 10R ₄ 赤 ₃ 輕石、紫蘇輝石、酸化鉄④良好⑤ ₂ ⑥床底⑦全面赤色塗彩。二次焼成あり。東北系。 |
| H-26 17 | 土器器 小 壺 | 1420 残 高 1460 | 最大径が体部上に来る。口縁は、ゆるやかに広がる。 | ヘラケズリ 内面に工具痕あり | 口縁ヨコナデ。内面ナデ | ①25YR ₄ 赤 ₂ 25YR ₄ 赤 ₃ 暗赤 ₂ 輕石、石英、紫蘇輝石、酸化鉄④良好⑤ ₂ ⑥床底⑦全面赤色塗彩。鬼島I系。 |
| H-26 83 | 土器器 高 环 脚 部 | 底 部 (116) 残 高 66 | ややふくらみをもって立ち上がる。脚部は、急に曲がり、端部は、そっている。 | ハケ目が上下方向にかかる。ヘラケズリ | ナデ。側はヨコナデ | ①5YR ₄ 淡赤 ₂ 5YR ₄ にぶい様③輕石、長石、石英④良好⑤脚部 ₂ ⑥床底⑦わづかに二次焼成。鬼島I |
| H-26 116 | 土器器 小 壺 | 122 96 | 最大径が体部上にくる。わずかに平らな底部を持つ。口縁はわずかに開く。球形に近い体部を持つ。 | ヘラケズリ 工具痕残る | 口縁ヨコナデ | ①75YR ₄ 淡黄 ₂ 10YR ₄ 灰白 ₃ 1mmの黑色石程を含む④やや良 ₅ ⑤ ₂ 残存⑥和泉、床底⑦二次焼成を受けている。スヌ付着。 |
| H-26 162 | 土器器 壺 | 126 65 | 小さい平底を持つ。やや直線的に立ち上がる短かい口縁が外反、内側も縁を持って外へまとまる。 | ヘラケズリ 内部に整形痕が残る | ナデ 口縁ヨコナデ | ①5YR ₄ にぶい様②5YR ₄ 淡黄 ₃ 紫蘇輝石。輕石、石英、酸化鉄④良好⑤光形⑥和泉、床底⑦二次焼成あり |
| H-26 171 | 須恵器 高 壇 蓋 | 124 残 高 42 | ややふくらみをもった形。外縁はシャープに造られている。 | マキブグ ミズビキ | ナデ | ①10YR ₄ 灰 ₂ 10YR ₄ 灰 ₃ 1mmの褐色石を含む④良好⑤ ₂ ⑥床+10⑦5C ₂ 頃のものか。ロクロ右方向。 |
| H-26 176 | 土器器 壺 | 144 72 | 平底、丸く立ち上がる口縁ゆるく外反、内外も縁を持って外へまとまる。 | 外面クシ目にヘラケズリ、内面クシ目にヘラケズリ、内面に工具痕あり。 | 内外面ナデ 内面ヘラナデ 口縁ヨコナデ | ①10R ₄ 赤 ₂ 10R ₄ 赤 ₃ 石英、輕石、紫蘇輝石、酸化鉄、帶④良好⑤口縁一部欠損のみほぼ完形、全面赤彩⑥鬼島I、床底⑦外面二次焼成あり、赤色塗彩。 |
| H-26 180 | 土器器 壺 | 190 242 | 最大径が体部や上、口縁がやや ₂ 字的に広く、小さい造り出しの平底を持つ。 | 外面ヘラケズリ 上下のハケ目 内面ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ 外面でいねいにナデ | ①75YR ₄ 淡黄 ₂ 75YR ₄ 淡黄 ₃ 石英、長石④良好⑤残存⑥和泉、床底⑦外面下の一部をくし、二次焼成を受け、スヌ付着 |

| 番号 | 器 形 | 寸 法 | 器 形 の 特 徴 | 器 形 | 調 研 | ①内色調②外色調③胎土④焼成⑤残存⑥出土位置⑦その他 |
|-------------|-----------------|--------------|---|-------------------------|---|--|
| H-26 181 | 土器器 高 环 | 182 62 | 和泉型高环、ゆるやか だが、はっきりした外 縁を有する。 | 内面横方向のハケ目 外面放射状のハケ目 | 口縁ヨコナゲ 内外面ナゲ | ①10YR 5/2灰白②10YR 5/ 灰白③1~2mmの白色石粒を 含む④良好⑤杯底のみ口縁の 一部を欠く⑥東南1床直⑦わ ずかに二次焼成のあとあり |
| H-26 185 | 土器器 高 环 | 1875 143 | 和泉型高环、縁部を欠 いている。直線的な造 り、环底口縁はわずか に内湾する。 | ヘラケズリ、内面ハケ 目、瓶部にもハケ目 | 内面ヨコナゲ、後ヘラ ミガキ、外面ヨコナゲ 脚部上下方向のヘラナ ゲ。 | ①75YR 5/2浅黄橙②75YR 5/2浅黄橙③灰石、長石④良 好⑤瓶底を欠ぐが他は残る。 和泉⑥獨立させて支脚として 使用⑦支脚として使用のた め全面に二次焼成。スヌ付 着、赤色胎形がのこる。 |
| H-26 188 | 土器器 环 | 131 59 | 平底体部やや下に接合 模と思われる変化点あ り、口縁内角 | 外面ハケ目 内面ヘラケズリ | ナゲ 口縁ヨコナゲ | ①25YR 5/2褐色②25YR 5/ 褐色③懸石、鐵化鉄、紫雲母石、 石英④良好⑤口縁部⑥欠損 ⑥鬼面⑦休歎⑧二次焼成あり、 赤色胎形 |
| H-27 40 | 土器器 环 | 14.0 3.7 | 体部にふくらみを持つ 口縁はゆるやかに外反 内面もゆるやかに外に 反る、平底で浅い。 | ヘラケズリ | ナゲ、口縁と内面はヨ コナゲ | ①5 YR 5/2褐色②75YR 5/ 後黄橙③長石④良好⑤残存 ⑥床直⑦真肩周の古い方 |
| H-27 63 | 灰陶器 器 环 | 15.6 7.1 | ややふくらみを持って 立ち上がる、高台は造 り付けている。底面内 面は中央が盛り上がる | ロクロ整形マヤアグ ミズビキ | ナゲ ロクロ目 | ①75YR 5/2灰白②10YR 5/ 浅黄橙③長石④良好⑤底部と 体部⑥残存⑦休歎⑧10~ 11C傾流域にみか? |
| Y-28 12 | 弥 生 器 台 | 100 79 | 直線的に開いている。 器台とも台型の台と もとれるが、孔はない てない。側はやや広 がる。 | ヘラケズリ | 外側ナゲの後ヘラナゲ がかかる。内面ナゲ。 | ①10YR 5/2浅黄橙②75YR 5/ 浅黄橙③1 mmの黒色石粒を 含む④良好⑤台部のみ⑥床 直⑦弥生後期、構 5/2頗る、 二次焼成を受けヌヌ付着。 |
| Y-23 23 | 弥 生 亞 口縁部 | 21.75 9.3 | 口縁直線的だが、やや 反っている。口唇部は 折り返されている。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナゲ、後ヘラ ミガキ、頸部から体部 にかけても、ヘラミガ キがかかる。 | ①10YR 5/2にぶい黄橙②10 YR 5/210YR 5/2にぶい黄橙 ③2~3 mmの黒色石粒を含 む④やや良好⑤口縁部のみ残 存⑥床直⑦口縁から強急に かけてのみ現存。 |
| H-28 59 | 弥 生 器の口 縁 | 103 55 | 直線的ほぼ直上に立ち あがる。 | ヘラケズリ | 外側、口縁はナゲ後上 は横にヘラミガキ、下 は上下方向にヘラミガ キ、内面はナゲ後側に ヘラミガキ | ①7.5YR 5/2褐色②10YR 5/ 浅黄橙③1 mmの黒色石粒を 含む④良好⑤口縁の5/2⑥床直 ⑦二次焼成あり、ヌヌ付着 |
| H-28 62 | 弥 生 壺底部 | 7.4 2.45 | 平底が造り出している 内面は丸い。 | ヘラケズリ 外面にクシ目 | ナゲ、外側にヘラミガ キかかる。 | ①25YR 5/2褐色②25YR 5/ 褐色③1 mmの褐色④良好⑤底 部のみ残存⑥床直⑦弥生二 次焼成あり。 |

| 番号 | 器 形 | 寸 法 | 器 形 の 特 徴 | 整 形 | 調 整 | ①内色調2外色調3触4焼成5底面6土台置7その他 |
|-------------|------------------------|-------------|--|----------------------------------|---------------------------------|---|
| H-29 38 | 土器器 甕 | 138 223 | 平底、球形に近い体部 造り付けの平底、口縁 は有段の名残りを示す | 積み上げ後、ヘラケズ リ | 口縁ヨコナダ 内面ヘラミガキ | ①25YR 1/2橙②75YR 1/2浅 黄橙③1 mmの白色石粒を含む ④良好⑤火候存⑥床直の 和泉～鬼高二次焼成、スス付着。 |
| H-29 48 | 土器器 甕 | 123 535 | 底は小さい平底になっ ている。体部丸みをも ち、口縁に行くほど薄 くなる。やや内凹。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナダ 内面ヨコナダ後ヘラミ ガキ。 | ①25YR 1/2橙②25YR 1/2橙 ③石英、紫蘇輝石、酸化鉄、 長石、粗石や粗④良好⑤ 火候存⑥床直⑦鬼高二次燒 成あり。 |
| H-29 128 | 土器器 甕 | 230 245 | 口縁に最大径がくる。 平底、口縁の開きはや やゆるやか、底部との 間に接合痕をのこす。 | 内外面ハケ目にヘラケ ズリ、内面には工具痕 のこる。 | 口縁ヨコナダ ナダ全面 | ①②内外ともにぶい橙③ 紫蘇輝石、粗石、石英、酸 化鉄④良灯⑤火候存⑥床直 ⑦鬼高二次焼成、スス付着。 |
| H-29 236 | 土器器 甕 | 1225 65 | 丸底体部も丸みをもち、 口縁はわざかに内凹。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナダ 内面ナダ | ①10YR 1/2灰白②10YR 1/2浅 黄橙③1 mmの白色石粒を含む ④やや良⑤火候存⑥床直 ⑦鬼高二次焼成、スス付着。 |
| H-29 373 | 土器器 甕 | 50 114 | 小さい平底になってい る。丸い体部短かい口 縁が外反する。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナダ | ①25YR 1/2橙②25YR 1/2橙 ③紫蘇輝石、石英、粗石、雷 ④良好⑤火候⑥床+40℃ 和泉Ⅱ、内外面に二次焼成 スス付着あり。 |
| H-29 431 | 土器器 高 环 基部の み | 180 63 | はっきりした腰をもつ て立ちあがる、直線的 段は高岸と思われる。 | 内面ハケ目 | 内面ヨコナダ 外表面ナダ | ①75YR 1/2にぶい橙②75 YR 1/2後黄橙③1 mmの黒色 石粒を含む④良好⑤杯部の み完形⑥かまと前床-30⑦ 和泉から鬼高、頭部のワレ ロがマキウしており、脚部 が欠けたのちも使用されて いたものらしい。赤色彫影。 |
| H-29 499 | 土器器 甕 | 150 74 | 上げ底気泡の平底あり、 口縁外反、内面も被を 有して外凹、内面ザラ ザラ。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナダ | ①25YR明赤橙②25YR明 赤橙③酸化鉄、石英、紫蘇輝石 粗石、やや粗④良好⑤ほぼ完形 ⑥床直⑦鬼高、二次焼成を 覺えている。 |
| H-29 502 | 土器器 甕 | 200 135 | 鉢形概平底で中央に深 2.5 cmほどの穴がある。 体部はややふくらみを 持つて広がる。 | ヘラケズリ 外面下から上へ | 口縁ヨコナダ内面ナダ 外表面ヨコナダ後ヘラナ ダ。 | ①75YR 1/2浅黄橙②75YR 1/2浅黄橙③1 ~ 2 mmの白萬 色④良好⑤完形⑥かまと右 袖外⑦和泉彫影 |
| H-29 505 | 土器器 甕 | 261 2515 | 最大径は口縁部、体部 やや上にふくらみをも つ、底部の穴は底部全 周にまでは広がってい ない。底部体部頭部と | ヘラケズリ | 口縁ヨコナダ、外表面 ナダ | ①75YR 1/2浅黄橙②75YR 1/2浅黄橙③1 mmの黒色石粒 を含む④良好⑤外表面の一部 にはくりがあるがほぼ完形 ⑥床直⑦鬼高二次焼成スス |

| 番号 | 器 形 | 寸 法 | 器 形 の 特 徴 | 整 形 | 調 整 | ①内色②外色③胎土④焼成⑤底面⑥出土位置⑦その他 |
|-------------|------------|-------------|---|---------------------------|--------------------------|---|
| | | | の間に接合痕あり。 | | | 付着。 |
| H-29 520 | 土器器 甕 | 180 2780 | 球形の体部を持ち、つくり出しの小さな平底を持つ。敷大径は体部中央に来る。 | 外面ハラケズリ、内面ヘラケズリ、内面に工具のこる。 | 口縁ヨコナデ ナデ | ①5YR 5/2灰褐色②5YR 5/2にむい種③軽石、紫蘇輝石、鐵化鉄、石英、密④良好⑤口縁部ノミ痕、底部から体部ノミ痕⑥床直⑦二次焼成スス付着鬼高 |
| H-29 529 | 須恵器 縦口縁 | 96 3.0 | 口縁と腹部との間に筋をもつ。口縁外表面は丸くふくらんで外反、内面は丸くへこんで外にひらく、波状紋が縫の下につく。小型深か傳型縫と見られる。 | 内外面ミズビキ皮形 | ナデ | ①5 B ₂ 青灰②5 B ₂ 青灰 ③④⑤⑥床直⑦TK208 1形式の1~2段階。 |
| H-29 542 | 土器器 高 瓶 | 172 153 | 杯部はやや丸みをもち口縁もゆるやかに広がる。脚部は垂直に立ちあがり直線的に閉く。 | ハラケズリ | 端部ヨコナデ ナデ 脚部ヘラナデあり | ①7.5YR 5/2淡黄橙②2.5YR 5/2淡黄③1mmの黒色石粒を含む④良好⑤ほぼ完形⑥支脚⑦倒立させ支撑として使用されていたため二次焼成を強く受けている。外面に赤色墨彩。 |
| H-30 8 | 土器器 高 瓶 | 148 1055 | 体部は、ふくらみを持つ。口縁は、丸く外反、底部との間に接合痕。外縁あり。 | ハラケズリ | 口縁ヨコナデ | ①5 Y ₂ 灰白②2.5Y ₂ 淡黄③1mmの黒色石粒を含む④やや良⑤杯部のみ⑥床+10⑦二次焼成あり、スス付着、鬼高 |
| H-30 67 | 須恵器 瓶 盆 | 118 43 | 上部は、丸みを持つ。口縁は、直線的に造られている。 | マキナデ。ミズビキ。 外面は、当て板か。 | ナデ | ①N ₂ 灰白②10Y ₂ 灰③良好④6床+10⑤7.5 C ₄ ~ %。1型式2段階。ロクロ右方向。 |
| H-30 75 | 土器器 甕 | 142 715 | やや半底的に造られている。底かいに縁が外反、内側も外に傾く。 | 底部外表面ハラケズリ | 口縁と内面ヨコナデ | ①10 R 5/2赤②25YR 5/2橙③1mmの白色石粒を含む④良好⑤6床直⑥内外面赤色墨彩。二次焼成あり、スス付着。和泉。 |
| H-30 212 | 土器器 手提か | 85 78 | 体部上に最大径。浅い高台を造り付けている。口縁内湾 | ハラケズリ | 口縁ヨコナデ。内外面 ナデ | ①25YR 5/2橙②7.5YR 5/2淡黄橙③1mmの白色石粒を含む④やや良好⑤6床直⑥10⑦祭記用の器の系統を引くと思われるが、類例を見つからない。外面赤色墨彩。二次焼成を受け、一部にスス付着。 |

| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 整 形 | 調 整 | ①内色調②外色調③釉土④焼成度⑤底存⑥出土位置⑦その他 |
|------------|----------|---------------|--|--|--|---|
| H-31 1 | 土師器 甕 | 145 195 | 平底。最大径底部に来る。底部との境に接合痕をのこす。口縁は小さく、わずかに高く舞台式の色彩あり。 | 内外面ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ。内外向ナデ。内面一部にヘラミガキ。 | ①25YR 1/2 橙②75YR 1/2 浅黄橙③2 mmの黒色石粒を含む④良好⑤ほぼ完形⑥床+10⑦二次焼成あり、スヌ付着あり。赤色墨が内外面にほどこされている。 |
| H-31 18 | 土師器 甕 | 133 52 | ややとがった丸底。口唇部で内凸、内側も口唇部を意識して造っている。 | ヘラケズリ | 外表面は、口縁ヨコナデ体部ナデの後ヘラミガキ。内面は、ナデの後横方向のヘラミガキ | ①5YR 1/2 にぶい橙②5YR 1/2 にぶい橙③紫蘇輝石、石英、鈷石、酸化鉄④良好⑤完形、口縁の一筋欠く⑥床直⑦二次焼成をほぼ内外の全面に受けている。赤色墨が、外表面にスヌ付着。鬼高。 |
| H-31 61 | 土師器 甕 | 121 56 | 横擦坏。口縁と体部の間に比較的はっきりした縫を有する丸底。 | 外表面は、口縁部ミガキ 体部は、手持ちヘラケズリ後、一部にクシ目あり。 | 外面部ヨコナデ、内面ヨコナデ後ヘラミガキ | ①25YR 1/2 橙②25YR 1/2 橙③酸化鉄、鈷石、石英、紫蘇輝石④良好⑤完形⑥床直⑦赤色墨、外表面にタル状付着物あり。鬼高。 |
| H-31 2 | 土師器 甕 | 130 512 | 丸底。体部も丸みをもって立ち上がる。口縁や内凸。内面もまるく造られている。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ。内面ヨコナデ後ヘラミガキ | ①5YR 1/2 にぶい橙②25YR 1/2 橙③鈷石、紫蘇輝石、石英、小石、長石、密④良好⑤口縁部一部欠損のみ、ほぼ完形⑥床+20重なって出土⑦外表面に二次焼成あり、内面にスヌ付着。鬼高。 |
| H-31 3 | 土師器 甕 | - 底 105 | 球形に近い側を持つ。小さい平底を持ってい るようである。 | ヘラケズリ。内面に上 出痕がのこる。 | ナデ | ①25YR 1/2 灰赤②25YR 灰赤③石英、石英、石英、酸化鉄、粗④良好⑤20⑥床直⑦非常に強い二次焼成を受けているため、表面の剥離が著しい。鬼高。 |
| H-31 4 | 土師器 甕 | 175 315 | 最大径が、体部の中心に来る。平底。口縁はハの字型に開く。 | 内外面ヘラケズリ。ハ ケ目 | ナデがついでいいにほどこされている。口縁部ヨコナデ。 | ①75YR 1/2 にぶい橙②75 YR 1/2 にぶい橙③1 mmの焦、白色粒を含む④良好⑤20⑥床+20⑦二次焼成あり、スヌ、タル付着。鬼高1式。 |
| H-31 5 | 土師器 甕 | 187 368 | 球形に近い側を持つ。最大径側部中心。口縁や丸みをもって外反。平底造り出し。 | 内外面ヘラケズリ。内 面に横方向の工具痕、 へこみ。 | ナデ。口縁部ヨコナデ。 | ①5 YR 1/2 明褐色②75YR 1/2 にぶい橙③1 mmの黒色石粒を含む④やや良⑤完形⑥床直⑦二次焼成あり、スヌ、タルの付着あり。鬼高。 |
| H-31 18 | 土師器 甕 | 116 20.15 | 最大径は、体部ほほ中央にあるが、底部との境に接合痕をのこす。 | 外面ハケ目。内面ヘラケズリ。上部にハケ目。 | ヨコナデ後ハケ目。口 縁ヨコナデ。 | ①25YR 1/2 橙②75YR 1/2 浅黄橙③1 mmの黒色石粒を含む④良好⑤完形⑥床+10⑦ |

| 番号 | 器 形 | 寸 法 | 器 形 の 特 徴 | 他 形 | 調 整 | ①内色調②外色調③船付④鉛成⑤表面⑥出土位置⑦その他 |
|------------|---------|-------------|--|-----------------|---------------------------------|--|
| | | | 外縁をなしている。楕円舞台式か。平底造り出し。 | | | 二次焼成あり、スヌ、タール状のもの付着。鬼高併行。 |
| H-31 14 | 土器 壺 | 158 184 | 平底。最大径が体部上にくる。底部との間に板合痕があり、わずかに縫を作っている。口縁は、短かく、ほぼ垂直に立つ。内側は、外に開く。 | ヘラケズリ。内面と外にハケ目。 | 口縁部ヨコナデ。 | ①75YR 1/2 横②5YR 1/2 灰白 ③1~2mmの黒色石粒を含む④良好⑤ほぼ完形⑥床直 ⑦二次焼成あり、スヌ付着。鬼高。 |
| H-31 15 | 土器 杯 | 134 59 | 丸底。口縁内湾。沈線で体部と区別を意識している。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ。内外面ナデ。 | ①25YR 1/2 横②25YR 1/2 横 ③紫蘇輝石、石英、鈣石、酸化鉄、密④良好⑤完形⑥床直⑦外面に赤色彫影。二次焼成痕あり、口縁から内面にスヌ付着。鬼高。 |
| H-31 16 | 土器 壺 | 132 53 | 丸底。底は、やや平らである。口縁内湾。 | ヘラケズリ | 外面上にヘラミガキが、わずかにかかる。口縁ヨコナデ、内面ナデ。 | ①25YR 1/2 横②25YR 1/2 横 ③紫蘇輝石、石英、鈣石、酸化鉄、密④良好⑤口縁部やや欠損のみ、ほぼ完形⑥床直⑦二次焼成あり、スヌ付着。鬼高。 |
| H-31 17 | 土器 杯 | 138 53 | 丸底。やや直線的に立つ。口縁部は、体部と縫をなしてやや内側に傾く。内面は、丸く造られているが、口縁は垂直に立ち上がる。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ。内面ヨコナデ後上下方向へのラミガキ | ①25YR 1/2 横②25YR 1/2 横 ③石英、長石、酸化鉄、鈣石、紫蘇輝石、やや粗④やや不良⑤口縁部一部欠損のみ、ほぼ完形⑥床直⑦二次焼成あり、内外面スヌ付着。底部と体部の接合痕あり。鬼高。 |
| H-31 20 | 土器 壺 | 144 60 | 丸底。口縁が、わずかに外反。内面も、わずかな波を有して外にそる。 | ヘラケズリ | ナデ。口縁ヨコナデ。 | ①25YR 1/2 明赤褐色②25YR 1/2 明赤褐色③紫蘇輝石、石英、鈣石、密④良好⑤口縁一部欠損のみ、ほぼ完形⑥床直⑦赤色彫影あり。二次焼成痕あり、内外面にスヌ付着。鬼高！式。 |
| H-31 23 | 土器 杯 | 134 57 | 丸底。口縁部は、わずかに縫をもって内へ傾く。内側もわずかに変化。 | 外圓体部ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ。内面ナデ後ヘラミガキ。 | ①10R 1/2 深②10R 1/2 赤③石英、長石、鈣石、酸化鉄、密④良好⑤完形⑥床直⑦内外面に二次焼成あり、スヌ付着が多い。鬼高。 |
| H-31 25 | 土器 壺 | 143 1025 | 口縁外反。体部は、ふくらしている。 | ハケ目。ヘラケズリ。 | 口縁部ヨコナデ。 | ①10R 1/2 灰白②75YR 1/2 深 黄褐色③1mmの黒色石粒を含む④良好⑤口縁は丸⑥床直⑦タール状のものが付着。 |

| 番号 | 器 形 | 寸 法 | 器 形 の 特 徴 | 整 形 | 調 整 | ①内色②外色③焼土④焼成⑤底面⑥出土位置⑦その他 |
|------------|----------|----------------------|---|-------------------|------------------------------------|---|
| | | | | | | 鬼高 |
| H-31 26 | 土師器 甕 | 13.9 残 高 140.5 | 体部中央に最大径が来るようである。口縁は直線的にハの字に開く。 | ヘラケズリ。外面ハケ 目 | 口縁ヨコナデ。外面ナ デ。 | ①7.5YR 1/2浅黄橙②10YR 1/2灰白③2 mmの黒色石粒を 含む④良好⑤1/2床+10⑦ 二次焼成あり、スス、タ ール付着。鬼高。 |
| H-31 28 | 土師器 甕 | 142 8.5 | 平底。体部は、丸く立ち上がる。山線は、ハの字に開く。内面も縁をもって外にそる。 | 一部にクシ月。ヘラケ メリ。 | 口縁ヨコナデ。内面ナ デ後、放射状にヘラミ ガキ。 | ①10R 1/2青②10R 1/2赤③ 石英、長石、燧石、紫蘇輝 石、やや粗④良好⑤1/2床直 ⑦ススが、全面に付着。 内面は、内底より25 cmよ り上に付着。内容物があっ たためか。口縁と外面にタ ール状のものが付着。鬼高。 |
| H-31 63 | 土師器 甕 | 143 6.3 | 丸底。口縁は、ゆるく開く。内面も縁を有して開く。 | ヘラケズリ。ややで こぼこ。 | 内外面ナデ。口縁ヨコ ナデ。内面ヨコナデ後 ヘラミガキ。 | ①5YR 1/2淡橙②75R 1/2赤 ③1 mmの黒色石粒を含む④ 良好⑤口縁の一部欠損のみ ほぼ完形⑥床直⑦二次焼成 を受け、ススが多量に付着 鬼高。 |
| H-31 69 | 土師器 甕 | 185.0 37.80 | 平底。最大径が、体部中央に来る。口縁は、丸みをもって開く。 | 内外面ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ。ナデを ほどこす。 | ①7.5YR 1/2浅黄橙②7.5YR 1/2浅黄橙③1 mmの黒色石 粒、石英を含む④良好⑤光 滑⑥床+20かまと内出土⑦ 二次焼成受ける。ススが多 量に付着。鬼高。 |
| H-31 25 | 土師器 甕 | 143 5.8 | 丸底で平たい形。口縁は、急角度で外反。内面も外に丸くそりながら外へ突く。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ。内面は 放射状にヘラミガキ。 | ①25YR 1/2暗②25YR 1/2暗 ③酸化鉄、燧石、石英、密 ④良好⑤口縁一部欠損の み、ほぼ完形⑥床直かまと 内⑦二次焼成あり、内外面 にスス、タール状のもの付 着。鬼高。 |
| H-31 77 | 土師器 甕 | 125 5.4 | 丸底。口唇部に行くにつれ内面になり内凹。 | ヘラケズリ | ナデ。口縁部ヨコナデ | ①7.5YR 1/2浅黄橙②7.5YR 1/2浅黄橙③紫蘇輝石、軽石、 石英、密④良好⑤口縁一部 欠損のみ、ほぼ完形⑥床直か まと内⑦二次焼成あり。赤色 の跡あり。二次焼成あり。 鬼高I式。 |
| H-31 78 | 土師器 杯 | 142 6.2 | 丸底だが、わずかに平らな底面を持つ。口縁は、内凹。 | ヘラケズリ | ナデ後、内面は放射状 にヘラミガキ。口縁は ヨコナデ。 | ①25YR 1/2明赤褐②25YR 1/2明赤褐③紫蘇輝石、石英 軽石、密④良好⑤1/2床+10⑥か まと内+10⑦内外に赤色 の跡あり。内面器皿やや焼れ ている。鬼高I。 |

| 番号 | 器 形 | 寸 法 | 器 形 の 特 徴 | 整 形 | 調 整 | ①内色調②外色調③粒子④焼成⑤焼成出し上位調のその他 |
|-------------|----------|-------------|--|---------------------|--------------------|---|
| H-31 80 | 土器器 杯 | 1445 555 | 平底。体部は、わずかにふくらみを持つが直線的に立ち上がる。口縁内側は、わずかに腹をもって外にそる。見高式にない器形。東北兩小泉式に向形あり。 | ヘラケメリ。内面に工具痕あり。 | 口縁ヨコナダ。内面ヘタミガヤあり。 | ①25YR 1/4明赤褐色②25YR 1/4明赤褐色③酸化鉄、石英、紫蘇麻石、軽石、長石、密④良好⑤10%⑥底+20cmほど内側二次焼成あり、鉄付着か。スス付着あり。 |
| H-36 129 | 土器器 杯 | 123 34 | 底部は、上に反ってい。口縁は、ややふくらんで立ち上がる。口縁部外へふくらむ。 | ヘラケメリ | 内外面ヨコナダ | ①75YR 1/4明赤褐色②75YR 1/4火白③長石、酸化鉄④やや不良⑤10%⑥底+20cmほど状の杯。底部回転舟切り。二次焼成を受けている。内外面に剥離あり。真簡期。 |
| H-38 209 | 土器器 杯 | 122 29 | 平底で丸く薄くなっている部分がある。口縁は、ゆるやかに立ち上がる。 | 底部ヘラケメリ | 口縁と内面ヨコナダ。 | ①75YR 1/4根②75YR 1/4根③軽石、石英、紫蘇麻石、石英④良好⑤10%底+20cmほど。平川南氏によると「皿にまちがいなし」。真簡期 |
| H-37 102 | 須恵器 環 | (144) 24 | 端部に返りがある。高さがある。 | ろくろ | ろくろ目 | ①25YR 1/4黄灰②10YR 1/4灰白色③長石④良好⑤1/4中央舟なし⑥底直⑦ロクロ左方向。N型式1~2、S-C 1/4~1/2 |
| H-37 106 | 土器器 鉢 | 146 56 | 丸底だが、ヘラケメリのためにこぼこ。口縁部が、わずかに内湾。 | 内外面にヘラケメリ。内面に工具痕のこ。 | ヨコナダ | ①10YR 1/4浅黄褐色②10YR 1/4後黄褐色常紫蘇麻石、石英、軽石、酸化鉄、密④良好⑤10%⑥底直⑦外面上に赤色坐彩があったようである。二次焼成あり、スス付着あり。内側に粘土粒がのこる。真簡期。 |
| H-37 138 | 土器器 杯 | 135 35 | 壺った形。平底で体部もまっすぐに立ち上がる。盤状。 | ヘラケメリ | ヨコナダ | ①25YR 1/4根②25YR 1/4根③酸化鉄、軽石④良好⑤10%⑥底直⑦底部回転舟へ削り調整。二次焼成を受ける。スス付着。真簡期。 |
| H-37 299 | 須恵器 環 | 16.4 255 | 直線的な構成。水平に近い天井型、頃で大きく乙状にカーブを描き下方へ曲がり、段を作れる。 | マキアゲ | 天井部に細かい回転ヘタケメリ。ナダ。 | ①5 PB 1/4青灰②5 B 1/4明青灰③1 mmの焦褐色石粒を含む④良好⑤10%⑥底直⑦ロクロ左方向。TK 4.8、7.4型式3段階。 |
| H-37 323 | 土器器 杯 | 124 29 | 浅い耳。口縁は、ゆるく開いて立ち上がる。平底。盤状。 | 底部ヘラケメリ。指でおさえている。 | 口縁ヨコナダ。内面ナダ。 | ①5YR 1/4にぶい檻②7.5YR 1/4灰褐色③紫蘇麻石、石英、軽石、密④良好⑤10%⑥底直⑦内面上に赤色坐彩の痕跡。真簡期。 |

| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 整 形 | 調 整 | ①内色調②外色調③胎土④焼成⑤底面⑥出土位置⑦その他 |
|-------------|------------|-------------|--|-----------------------------|---------------------------------|---|
| H-37 363 | 須恵器 杯 盖 | 11.0 475 | 体部は、ややくらみをもって立ち上がる。高台を造り付けている。 | ロクロ。マキアゲ。ミズビキ | ロクロ目。回転ナデ。 | ①25Y%灰白②25Y%灰白④良好⑤床直⑦ロクロ右方向。静止糸切り。Ⅲ型式1段階、8%~%。 |
| H-37 420 | 須恵器 杯 盖 | 115 38 | 盤状。口縁が、逆ハの字形に外反。 | マキアゲ。ミズビキ整形。底部回転ヘラ削り。 | ナデ。 | ①10Y%灰白②10Y%灰白③2~3mmの黒色石粒を含む④良好⑤口縁の一部を欠損のみ。ほぼ完形⑥床直⑦ロクロ右方向。Ⅲ型式3段階、7%。 |
| H-34 1 | 土器 高 杯 | 185 161 | 直線的な構成。耳部、柄部とともにハの字形に開く。 | ヘラケメリ。裾部杯内側には、ハケ目。脚部はエグリコミ。 | ロコナデ。ていねいにナデをほどこす。 | ①25Y%灰白②75Y%後黄橙③1mmの黒色石粒、石英を含む④良好⑤端を一部欠くが、ほぼ完形⑥床直⑦内外赤色塗彩。和泉~鬼高。 |
| H-34 2 | 土器 壺 | 149 34 | 小さい平底。体部は、直線的に開いて立ち上がる。口唇部は、わずかに内凹する。 | ヘラケズリ | ロコナデ。内面は、ナデ。 | ①25Y%後黄橙②5Y%後黄橙③1mmの黒色石粒、石英を含む④良好⑤端を一部欠くが、ほぼ完形⑥床直⑦内外赤色塗彩。和泉~鬼高。 |
| H-42 10 | 土器 鉢 | (128) 52 | 平底。体部は、直線的に立ち上がり、口縁は、内側に折れ上がる。内面は、大きく流れているが、口縁は、内側に傾く。 | ヘラケズリ | 口縁ロコナデ。内面ロコナデ後、上下方向のヘラミガキ | ①75Y%後黄橙②75Y%後黄橙③紫蘇鉛石、石英、長石、碧石、酸化鉄、やや粗④やや不良⑤%⑥床直⑦内外に二次焼成痕とスス付着あり。赤色塗彩の跡あり。和泉。 |
| H-45 150 | 土器 壺 | 132 44 | やや平たい形。口縁は丸みをもって外反。内側も外へ傾く。 | ヘラケズリ | 内面、黒色塗彩後ヘラミガキ。口縁ロコナデ。 | ①N%黒②10R%赤③碧石、石英、紫蘇鉛石、小石、密④良好⑤%⑥貯藏穴出土⑦内面黒色塗彩。鬼高I式。 |
| H-47 44 | 土器 壺 | (144) 54 | 丸底だが、やや平たい形をしている。口縁はやや大きく外反、内面も傾をなして、外に傾く。 | ヘラケズリ、内面に工具痕。 | 内面に放射状のヘラミガキ、外面、口縁にロコナデ後、ヘラミガキ。 | ①25Y%後②25Y%後③紫蘇鉛石、龍石、石英が密④良好⑤%⑥床直⑦鬼高。 |
| H-48 9 | 土器 杯 | (60) 35 | 体部丸い、口縁内凹 | ヘラケメリ | ロコナデ、内面ヘラミガキ | ①25Y%後②25Y%後③1mmの褐色石粒を含む④やや良⑤%⑥床+39%二次焼成、スス付着あり。鬼高。 |
| H-48 83 | 土器 小 壺 | 102 75 | 最大径は、体部上方、口縁は、ほぼ直面に立ち上がり、端部でわずかに外反。 | ヘラケズリ、内面に工具痕が残る。 | ロコナデ、ナデ | ①5Y%後淡橙②25Y%後赤橙③1mmの褐色石粒を含む④良⑤%⑥底部を欠く⑥床直⑦二次焼成、スス付着。鬼高。 |

| 番号 | 器 形 | 寸 法 | 器 形 の 特 徴 | 整 形 | 調 整 | ①内色調②外色調③粘土④焼成⑤残存⑥土位調⑦その他 |
|-------------|------------|-------------------------|--|--------------------------|--|---|
| H-48 117 | 土器器 瓶 | 190 残 高 196 | やや長脚化した瓶。最 大径が、体部中央にく る。口縁は、ゆるやか に外反、頸部に接合痕 あり。 | 下から上へのヘラケズ リ。内面工具痕あり。 | 口縁ヨコナデ、内面ナ デ | ①10YR 5/6浅黄橙②10YR 5/ 6橙③1 mmの白色の石粒を含む④良好⑤1/6底部を欠く⑥床+20⑦鬼高 |
| H-48 179 | 土器器 高 瓶 | 底 径 100 残 高 48 | 短かい脚部、縁は急角 度で広がり、先端は反 り上がってている。 | ヘラケズリ | 内外面ナデ | ①75YR 5/6浅黄橙②25YR 5/6橙③1 mmの褐色の石粒を含む④良好⑤脚部の1/6床+ 20⑦二次焼成、スス付着。 外面赤彩。鬼高。 |
| H-48 201 | 土器器 高 瓶 | (125) 残 高 55 | 球形の体部をもつ、口 縁は、わずかに内湾 | ヘラケズリ | 放射状にヘラミガキ、 口縁ヨコナデ | ①25YR 5/6橙②25YR 5/6橙 ③2 mmの褐色の石粒を含む④良 好⑤1/6床+40⑦鬼高。 |
| H-48 377 | 土器器 瓶 | 246 292 | ややずん刷で、底部が ややしまる。比較的大 きい穴になっている。 口縁は、ゆるやかに外 反、輪転みのあとが残 る。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ | ①10YR 5/6に赤い黄橙②10 YR 5/6浅黄橙③1 mmの褐色、 白色石粒混入④良好⑤完形 ⑥未直⑦二次焼成、スス付着。 鬼高。 |
| H-48 451 | 土器器 壺 | 138 49 | やや平たい形、平底的 に造られている。口縁 は急角度で外反、内面 も外へ傾く。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ、内面放 射状にヘラミガキ。 | ①5YR 5/6橙②5YR 5/6橙③1 ~2 mmの赤褐色の石粒を含む④良 好⑤完形⑥床直⑦石の混入多く、内面は、デコ ボコになっている。鬼高。 |
| H-48 452 | 土器器 高 瓶 | 140 97 | 壺部は丸みをもち、口 縁外反。脚部は窪かく への字に開く。先端は 急角度で開く。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ、杯部 内面放射状にヘラミガ キ、外面ナデ、脚部外 面に上下方向のヘラミ ガキ、内面はナデ。 | ①10R 5/6赤橙②10R 5/6赤 橙③1 mmの赤褐色の石粒を含む④良 好⑤ほぼ完形⑥床+10⑦二 次焼成、スス付着あり。鬼高1。 |
| H-48 475 | 土器器 杯 | 88 残 高 44 | 小型の壺、体部丸く、 口縁内湾 | ヘラケズリ | 内面にヘラミガキ、ナ デが内外面にていねい にほどこされている。 | ①25YR 5/6橙②25YR 5/6橙 ③1 mmの赤褐色の石粒を含む④良 好⑤1/6残存⑥床+10 ⑦鬼高1。 |
| H-48 507 | 土器器 壺 | (120) 残 高 515 | 丸い体部、口縁は、内 湾 | ヘラケズリ | 口縁は、ヨコナデ、内 面は、ヨコナデ後ヘラ ミガキ。 | ①25YR 5/6橙②25YR 5/6橙 ③1 mmの赤褐色の石粒を含む④良 好⑤1/6残存⑥床+10⑦二 次焼成あり。鬼高1。 |
| H-48 634 | 土器器 壺 | (124) 残 高 455 | 平たい壺、口縁と体部 の間に、わずかに縫を 造っている。口縁は、 内湾。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ、内面ヨ コナデ後ヘラミガキ | ①25YR 5/6橙②25YR 5/6橙 ③2 mmの白色石粒を含む④良 好⑤1/6残存⑥床+10⑦体 部外表面全体に、スス付着 させている。 |

| 番号 | 器形 | 寸法 | 器形の特徴 | 整 形 | 調 置 | ①内色調②外色調③粘土④焼成⑤残存⑥出土位置⑦その他 |
|--------------|-----------------|--------------------------------|--|----------------------------------|-----------------------------------|--|
| H-48 733 | 土器器 小 夷 | (116) 残 高 89 | 最大幅が、体部の上に くる。やや荷重である。 | 外面ヘラケズリ、内面 ハケ目。 | 口縁ヨコナデ | ①5YR 5/6 検②25YR 5/6 検③ 1 mm の褐色の石粒を含む④良 好⑤残存⑥底面を欠く⑦床 + 10 ⑧二次焼成、スス付 着あり。鬼高。 |
| H-48 749 | 土器器 高 环 | 底 径 109 脚 部 残 高 53 | 短かい脚部、わずかに 外後を持って聞く。先 端は急角度で斜く。頸 部はほぼ水平。 | ヘラケズリ | 内外面ナデ、先端ヨコ ナデ。 | ①75YR 5/6 浅黄橙②75YR 5/6 浅黄橙③1 mm の白色の石粒 を含む④良好⑤脚部のみ残 存⑥床直⑦杯部内面赤色 彩。鬼高。 |
| H-48 816 | 土器器 环 | 63 残 高 49 | 丸い体感、球形に近い。 先端に行くにつれ高く なり内湾。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ、内面放 射状にヘラミガキ。 | ①25YR 5/6 検②25YR 5/6 検 ③1 mm の褐色の石粒を含む ④良好⑤残存⑥床 + 10 ⑦二次焼成。スス付着あり。先 高。 |
| H-48 837 | 土器器 高 环 | 148 (91) | 环部は直線的に造られ ている。外後あり。脚 部はやや丸みを持って 聞く。 | 环部ヘラケズリ、脚部 内面に折による整形の 痕あり。 | 口縁、脚先端ヨコナデ。 脚外沿、环内部にヘラ ミガキ。 | ①5YR 5/6 検②5YR 5/6 検③2 mm の赤褐色の石粒を含む④ 良好⑤ほぼ完形脚部の先端 を欠く。⑥残存⑦床 + 10 ⑧ 鬼高。 |
| H-48 892 | 須恵器 腰口縁 | (117) 残 高 52 | 比較的細い脚部から、 外へそって聞く。口縁 は屈曲させ板を作り出 し、底部は丸く造られ ている。 | マキアゲ、ミズビキ。 ナデ | | ①SPB 5/6 検②10YR 5/ 灰白③ - ④良好⑤口縁部 の⑥残存⑥床 + 200 ⑦波状紋 はダレている。ロクロ左回 転！底式！段階ころか、5 世紀。傳型とも小型とも 思われる。 |
| H-48 987 | 土器器 夷 口縁部 | 187 残 高 84 | 口縁は、ややコの字に 近いが、ゆるやかに外 反。体部は、球形に近 いようす。 | ヘラケズリ、外面向い ないにヘラナデ。 | 口縁ヨコナデ | ①10YR 5/6 灰白②75YR 5/ 浅黄橙③2 mm の赤褐色の石 粒を含む④良好⑤残存口 縁部のみ⑥床直⑦二次焼成 あり。鬼高。 |
| H-48 1604 | 土器器 环 | 125 45 | 横断縫、口縁は、わざ かに外に向く。体部や や浅め、とがっている。 外後は、ややゆるやか。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ、内面ナ デ | ①25YR 5/6 検②25YR 5/6 検 ③1 mm の褐色の石粒を含む ④良好⑤残存⑥床直⑦鬼 高。 |
| H-48 1621 | 土器器 环 | (134) 残 高 42 | 横断縫、口縁はやや内 にそって外反。口唇部 は内凹。体部は浅い。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ、内面ナ デ。 | ①25YR 5/6 検②25YR 5/6 検 ③1 mm の褐色の石粒を含む④ 良好⑤残存⑥床直⑦内外 面赤色彫刻。鬼高。 |
| H-48 1643 | 土器器 高 环 | (182) 残 高 57 | 丸味を持った体部。口 縁は外へ丸みをもって 傾く。内面も腰を作っ て傾く。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ、内外面 ナデ、内面ヘラミガキ | ①25YR 5/6 検②75YR 5/6 検 ③1 mm の赤褐色の石粒を含む④ 良好⑤杯部の⑥残存⑦床直 + 38 ⑧わざかに二次焼成。 鬼高。 |

| 番号 | 器 形 | 寸 法 | 器形の特徴 | 整 形 | 調 整 | (1)内色調(2)外色調(3)船土(4)底 底(5)残存(6)出上位(7)その他 |
|--------------|----------|----------------------|---|-------------------|------------------------|--|
| H-48 1695 | 土器器 壺 | 158 残 高 5.1 | 浅い。底部は、平底的。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ、内面ヘ ラミガキ。 | ①25YR 1/4 横②25YR 1/4 横 ③2~3 mmの黒色石粒を含む④良好⑤1/4 残存⑥底直⑦ 鬼高。 |
| H-48 1740 | 土器器 壺 | (138) 残 高 4.4 | 体部は丸みを持ち、口 縁は急角度で外反、内 部にもしっかりした棱 を有する。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ、内面放 射状ヘラミガキ。 | ①25YR 1/4 横②25YR 1/4 横 ③1 mmの赤褐色の石粒を含む④良好⑤1/4 残存底部欠く ⑥床+10⑦二次焼成、スヌ 付着多い。鬼高。 |
| H-48 1782 | 土器器 杯 | (112) 残 高 5.3 | 模倣壺、外壁はややな めらかになっている。 口縁はほぼ垂直に立ち 上がる。底部はややと がる。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ、内面ナ デ。 | ①5YR 1/4 横②5YR 1/4 横③ 2~3 mmの赤褐色の石粒を含む④良好⑤1/4 残存⑥床+10⑦ 二次焼成あり。鬼高。 |
| H-48 1831 | 土器器 壺 | (144) 残 高 4.45 | 体部は丸みを持つ。口 縁は外反、内面も外へ 傾く。 | ヘラケズリ | 内面ナグ後ヘラミガキ。 口縁ヨコナデ。 | ①25YR 1/4 横②25YR 1/4 横 ③2 mmの褐色の石粒を含む ④良好⑤1/4 残存⑥床+10⑦ 二次焼成、スヌ付着あり。 鬼高。 |
| H-48 2067 | 土器器 杯 | (142) 残 高 6.6 | 模倣壺、口縁は内へ反 りながら開く。外壁は しゃかりしている。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ、内面ナ デ。 | ①5YR 1/4 横②5YR 1/4 横③ 1 mmの赤褐色の石粒を含む ④良好⑤1/4 残存⑥床+20⑦ 鬼高。 |
| H-48 2138 | 土器器 壺 | 12.6 5.15 | 模倣壺、口縁は直線的 にわずかに開く。体部 は浅い。 | ヘラケズリ、内面にハ ケ目。 | 口縁ヨコナデ、内面ナ デ。 | ①25YR 1/4 横②25YR 1/4 横 ③2 mmの赤褐色の石粒を含 む④良好⑤1/4 残存⑥床+20 ⑦内面赤色鑑影。鬼高。 |
| H-49 3 | 土器器 壺 | (127) (5.0) | 模倣壺、丸く浅い体部 口縁はやや開く。外壁 はやや丸くなっている。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ、内面ナ デ。 | ①5YR 1/4 横②5YR 1/4 横 ③輕石、石英、紫蘇舞石、 精良④良好⑤1/4 残存⑥床直 ⑦内外面黑色鑑影。鬼高。 |
| H-49 4 | 土器器 壺 | 140 5.3 | 丸みを持ち、底部はや や平たい。口縁はわず かに外反、内側も外に 傾く。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ、内面ナ デ後ヘラミガキ。 | ①25YR 1/4 横②25YR 1/4 横 ③紫蘇舞石、石英、輕石、 酸化鉄を含む④良好⑤1/4 残存⑥床直⑦鬼高。 |
| H-52 12 | 土器器 壺 | 2855 3.00 | 直線的で鋸型に近い燒 成、底部の穴は大きい。 口縁はゆるやかに開く。 | ヘラケズリが上から下 へ。 | 口縁ヨコナデ、内面ナ デ後ヘラミガキ。 | ①10YR 1/2 深黄橙②25YR 1/4 淡黄③1 mmの褐色、赤褐色 白色の石粒含む④良好⑤ほ ぼ完形⑥床直⑦二次焼成、 スヌ付着あり。鬼高。 |
| H-52 214 | 土器器 壺 | 185 残 高 2.15 | 体部やや上に最大径が くる。口縁はゆるやかに 開く。 | 輪積み、ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ | ①10YR 1/2 深黄橙②25YR 1/4 淡黄③1 mmの褐色の石粒を 含む④良好⑤1/4 残存、底 部欠く⑦二次焼成あり。鬼高 |

| 番号 | 器 形 | 寸 法 | 器 形 の 特 徴 | 整 形 | 調 整 | ①内色調②外色調③胎土④焼成5段階⑤出土位置⑥その他 |
|-------------|-------------------|---------------------|---|-----------------------|-----------------------------|--|
| H-53 1 | 土師器 壺 | 245 275 | 体部は直線的に造られ底盤近くで、しまっていいる。口縁はゆるやかに外反。輪組み。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナダ、内面ナデ後ヘラミガキ。 | ①75YR浅黄褐色②75YR浅黄褐色③1mmの白黒褐色、石粒混入④良好⑤完形⑥床底⑦二次焼成、スス付着。鬼高 |
| H-53 3 | 土師器 壺 | 935 1785 | 大型の壺、球形に近い体感。 | 横方向のヘラケズリ 内部に工具痕あり | 外曲ナデ | ①10YR _{1/2} 灰白②25YR _{1/2} 橙③1mmの褐色粒を含む④良好⑤口縁を火いている⑥床底⑦外面に赤色塗彩、口縁のわかれ口に磨滅のあと、口縁が欠けた後再使用か。鬼高 |
| H-54 92 | 土師器 壺 | (305) 144 | 平底から丸みを持って広がり、口縁は急外度に丸く外反している。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナダ、内面ナデ。 | ①5BG _{1/2} 暗青灰②75YR _{1/2} 後黄褐色③1mmの石粒混入④良好⑤⑥+10YR _{1/2} 内面黑色、塗彩暗青灰。鬼高。 |
| H-54 131 | 土師器 壺 口 縁 | 1205 残 99 | | 無構み底のこる。 ヘラケズリ | 口縁ヨコナダ。外曲ナデ、後、上下方向のヘラミガキ。 | ①25YR _{1/2} 橙②25YR _{1/2} 橙③1mmの黒色の石粒混入④良好⑤口縁部のみ⑥床底⑦二次焼成、スス、タール付着。鬼高。 |
| H-56 22 | 土師器 壺 | 124 52 | 複数窓。口縁やや内側にそって開く。底部やや浅い。 | 底部ヘラケズリ。 | 口縁ヨコナダ。 内面ナデ。 | ①25YR _{1/2} 赤褐色②25YR _{1/2} 明赤褐色③1mmの黒色石粒を含む④良好⑤完形⑥+40%二次焼成。スス付着。鬼高 I。 |
| H-56 219 | 土師器 高 环 独 部 | — 残 高 37 | 短かく、やや丸味を持った底盤。口縁は内凹。 | ヘラケズリ。 ヘラナダ。 | ナダが内外面に入る。 | ①25YR _{1/2} 橙②25YR _{1/2} 橙③1mmの褐色石粒を含む④良好⑤頭部のみ残存⑥+50%⑦杯内面に黑色塗彩。二次焼成。スス付着。鬼高。 |
| H-56 297 | 土師器 壺 | (125) 残 高 465 | 丸味をもち、ややとがった底盤。口縁は内凹。 | ヘラケズリ。 | 口縁ヨコナダ。 内面ナデ後、ヘラミガキ。 | ①5YR _{1/2} 橙②25YR _{1/2} 橙③1~2mmの赤褐色石粒を含む④良好⑤⑥+20%二次焼成。スス付着。鬼高。 |
| H-56 502 | 土師器 壺 | 132 44 | やや浅めの环。丸味を持ち、口縁内凹。 | ヘラケズリ。 | 口縁ヨコナダ。 内面ナデ後、放射状にヘラミガキ。 | ①75YR _{1/2} 橙②75YR _{1/2} 橙③1mmの赤褐色石粒を含む④良好⑤⑥床底⑦二次焼成。 |
| H-56 601 | 土師器 壺 | 123 49 | 複数环。外縁はしっかり造られている。口縁開き、口縁部でわずかに内凹。底部浅い。 | ヘラケズリ。 | 口縁ヨコナダ 内面ナデ | ①10YR _{1/2} 褐灰②25YR _{1/2} 橙③1mmの褐色石粒を含む④良好⑤⑥床底⑦内面黑色塗彩。二次焼成。スス付着。鬼高。 |

| 番号 | 器 形 | 寸 法 | 器 形 の 特 徴 | 整 形 | 調 整 | (1)内色調(2)外色調(3)船形(4)旗形(5)旗形(6)出土位置その他 |
|--------------|-------------------|-------------------------|--|-------|-------------------------------|--|
| H-56 880 | 土師器 壺 | (146) 残 高 58 | やや丸みのある体部。 口縁はわずかに外反。 内面も腹を作って外に 傾く。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ 内面ナデ後、放射状に ヘラミガキ | ①25YR 1/2 橙②25YR 1/2 橙 1~2mmの赤褐色石粒を含む④良好⑤X⑥+20⑦鬼高 |
| H-56 885 | 土師器 高 筈 頭 部 | 一 残 高 52 | 頭部のみ、脚部先端を 欠く、直線的で、短かい。 | ヘラケズリ | 丁寧にナデが施されて いる。 | ①25YR 1/2 橙②25YR 1/2 橙 ③1mmの赤褐色石粒を含む ④良好⑤頭部のみ⑥+10 ⑦タール付着。鬼高I。 |
| H-56 958 | 土師器 壺 | (122) 53 | 模倣杯。外縁はややゆ るやかになっている。 口縁は内側にそって囲 く。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ | ①SYR 1/2 橙②SYR 1/2 橙 1~2mmの赤褐色石粒を含 む④良好⑤X⑥+10⑦被片 になってから、内外赤色 塗彩。鬼高。 |
| H-56 1017 | 土師器 杯 | (136) 残 高 495 | 外縁はしっかり造られ る口縁は直線的に開く、 底部浅い。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ 内面ナデ | ①25YR 1/2 橙②25YR 1/2 橙 ③1~2mmの赤褐色石粒を含 む④良好⑤X⑥+30⑦内外 赤色塗彩。鬼高。 |
| H-56 1179 | 土師器 高 筈 | 一 残 高 42 | 頭部のみ、わずかにふ くらみを持つ、短かい | ヘラケズリ | ヨコナデ ナデ | ①25YR 1/2 橙②25YR 1/2 橙 ③1mmの赤褐色石粒を含む ④良好⑤頭部のみ⑥床貯⑦ 鬼高。 |
| H-56 1344 | 土師器 竿 | 128 47 | 模倣竿、外縁はしき り出ている。底盤やや 平たい、口縁は開く。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ 内面ナデ | ①5YR 1/4 淡橙②5YR 1/4 淡 橙③1mmの赤褐色石粒を含む ④良好⑤X⑥床貯⑦二次 焼成。底面にスス大量に付 着。鬼高。 |
| H-56 1346 | 土師器 壺 | (136) 残 高 48 | 丸味のある体部、口縁 は外反、内側も腹を造 って外へ傾く。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ 内面ナデ後、放射状に ヘラミガキ | ①25YR 1/2 橙②25YR 1/2 橙 ③1~2mmの赤褐色石粒を含 む④良好⑤X⑥+20 ⑦鬼高 |
| H-56 1447 | 土師器 环 | (160) 残 高 62 | やや大きめな模倣杯。 外縁小さい。口縁は、 ほぼ垂直に立ち上がる。 底盤やや浅い。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ 内面ナデ | ①25YR 1/2 橙②25YR 1/2 橙 ③1mmの赤褐色石粒を含む④ 良好⑤X⑥+20⑦二次焼成、 スス付着。鬼高。 |
| H-56 1453 | 土師器 高 筈 脚 部 | 延 長 9.7 残 高 50 | 短かいがハの字に開き、 先端は水平にまでなっ ている。 | ヘラケズリ | ヨコナデ 外面ナデ後、ヘラミガ キ | ①10R 1/2 赤橙②10R 1/2 赤 橙③1mmの赤褐色石粒を含む④ 良好⑤脚部のみ⑥+30⑦ 二次焼成、スス付着、内 面赤色塗彩。鬼高。 |
| H-56 1476 | 土師器 壺 | 1555 55 | やや丸みをもつ。口縁 外反、内面も腹を造っ て外反。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ 内面ナデ、後放射状に ヘラミガキ | ①75YR 1/2 黒褐②25YR 1/2 橙③1~2mmの赤褐色石粒 を含む④良好⑤完形⑥床貯 ⑦二次焼成、スス付着、内 面黒色塗彩、鬼高。 |

| 番号 | 器 形 | 寸 法 | 器 形 の 特 徴 | 整 形 | 調 整 | ①内色調②外色調③紺土④焼成⑤所部⑥出土位置⑦その他の記述 |
|--------------|-------------------|---------------------|---|-----------------|-------------------------------|---|
| H-56 1711 | 土器器 壺 | (149) 残 高 485 | やや平たい形。口縁は ゆるやかに外反。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ 内面ナデ、後放射状に ヘラミガキ | ① 25YR 1/2 横② 25YR 1/2 横 ③ 2 mmの赤褐色石粒を含む ④ 良好⑤ ⑥ -10⑦ 鬼高。 |
| H-56 1755 | 土器器 壺 | 144 525 | やや平たい底を持つ。 口縁ややゆるやかに外 反、内面もわずかに横 を造って外反。 | ヘラケズリ | 内面ナデ | ① 25YR 1/2 横② 25YR 1/2 横 ③ 1 ~ 2 mmの黒色、赤褐色 石粒を含む④ 良好⑤ 完形⑥ 床直⑦ 内面ザラザラ、外面 もややギザギザ。鬼高 I。 |
| H-56 2236 | 土器器 壺 脚 部 | - 残 高 52 | ゆるやかに開き、端部 は水平 | ヘラケズリ 内面に工具痕 | ヨコナデ、ナデが丁寧 に施されている。 | ① 25YR 1/2 横② 25YR 1/2 横 ③ 1 mmの褐色石粒を含む④ 良好⑤ 脚部⑥ +30⑦ 内外 面赤色彫影。鬼高。 |
| H-56 2481 | 土器器 壺 | (139) 残 高 485 | やや平たい底を持つ。 口縁は僅かく外反。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ 内面ナデ、後ヘラミガ キ | ① 5YR 1/2 横② 5YR 1/2 横③ 1 mmの赤褐色石粒を含む④ 良好⑤ ⑥ 床直⑦ 二次焼成 スス付着あり。鬼高。 |
| H-56 3017 | 土器器 壺 | 146 67 | 横窓耳。外縁はしっかり 造られている。口縁 は、反りながらもほぼ 垂直に立ち上がる。 | ヘラケメリ | 口縁ヨコナデ 内面ナデ | ① 5YR 1/2 横② 5YR 1/2 横③ 1 ~ 2 mmの褐色石粒を含む ④ 良好⑤ ⑥ +20⑦ 二次焼成 あり。鬼高。 |
| H-56 3044 | 土器器 壺 | 127 50 | 外縁をしっかりと造り、 口縁は内にふくらみな がら外反、底部丸底。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ 内面ナデ | ① 25YR 1/2 横② 25YR 1/2 横 ③ 1 ~ 2 mmの赤褐色石粒を 含む④ 良好⑤ ⑥ +40⑦ 鬼高 |
| H-56 3050 | 土器器 壺 | 126 - | 外縁をしっかりと造り いる。底部浅く、口縁 外反。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ 内面ナデ | ① 25YR 1/2 横② 25YR 1/2 横 ③ 1 mmの褐色石粒を含む④ 良好⑤ ⑥ -40⑦ 二次焼成 スス付着。内外面赤色彫影 鬼高 I。 |
| H-56 3075 | 土器器 高 杯 脚 部 | 114 残 高 685 | 脚はややふくらみをも って開き、端部は、木 平まで広がる。 | ヘラケズリ | ヨコナデ 丁寧にナデ | ① 10YR 1/2 灰白② 10YR 1/2 灰白③ 1 mmの赤褐色石粒を 含む④ 良好⑤ 脚部⑥ -20 ⑦ 二次焼成、内外面赤色彫影 鬼高。 |
| H-56 3066 | 土器器 壺 | 135 515 | ふくらみを持った体部 口縁は急角度で外反、 内側も外反。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ 内面ナデ、後放射状に ヘラミガキ | ① 25YR 1/2 横② 25YR 1/2 横 ③ 2 mmの褐色石粒を含む④ 良好⑤ ⑥ +60⑦ 鬼高 I |
| H-56 3352 | 土器器 小 壺 | 104 残 高 63 | 最大径が体部やや上に くる丸味を持った形。 口縁は、ほぼ垂直にな る。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ 内面ナデ | ① 25YR 1/2 横② 25YR 1/2 横 ③ 2 mmの褐色石粒を含む④ 良好⑤ ⑥ 床直 |
| H-58 163 | 土器器 壺 | (119) 残 高 | 丸みを持ち、やや浅い。 口縁内凹。丸底。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ、内面ナ グ後放射状にヘラミガ | ① 25YR 1/2 横② 10R 1/2 赤 横③ 1 mmの褐色の石含む④ 良 |

| 番号 | 器 形 | 寸 法 | 器形の特徴 | 基 形 | 調 整 | ①内色調②外色調③粘土④焼成⑤焼成⑥出土位置⑦その他 |
|-------------|------------|-----------------|--|---------------------|-------------------|---|
| | | 445 | | | キ | 序⑤×⑥床+28⑦鬼高、タール付着。 |
| H-58 295 | 土器器 杯 | (114) 545 | 丸みを持ち、ややふっくらしている。口縁内湾。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナダ、内面ナデ後ヘラミガキ | ①② 25YR 1/4 橙③ 1 mm の褐色の石粒含む④良好⑤×⑥床直⑦鬼高 |
| H-58 305 | 土器器 杯 | 122 585 | 丸みを持ち口縁内湾。口縁にくるに従って薄く造られている。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナダ、内面ナデ後ヘラミガキ | ①② 25YR 1/4 橙③紫蘇輝石、石英、長石、密④良好⑤ほぼ完形⑥床+18⑦鬼高、二次焼成、スス付着。 |
| H-58 329 | 土器器 壺 | 148 65 | ふくらみがあるが底部はやや平らである。口縁外反内面も外反。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナダ、内面ナデ | ①② 25YR 1/4 橙③ 1 mm 赤褐色の石粒を含む④良好⑤×⑥床+19⑦鬼高 1 強く二次焼成を受け内面は表面がはげ落ちていた。スス付着多い。 |
| H-58 410 | 土器器 小 壺 | 110 123 | 平底、最大径は体部や上半。口縁はへの字に開く。口縁に沈線がまわる。 | ヘラケズリ 内部に工具痕あり | 口縁ヨコナダ | ①N 1/2 灰灰② 75YR 1/4 淡黄褐色③ 2 mm の褐色石粒含む④良好⑤完形⑥床直⑦鬼高二次焼成スス付着あり、内面にも薄くススが付着している。 |
| H-58 411 | 土器器 壺 | 158 265 | やや膨長、体部中央に最大径がくる。口縁はややコの字的に開く。 | ヘラケズリ 内外面と工具痕が強くなる。 | 口縁ヨコナダ | ① 10YR 1/2 淡黄褐色② 25YR 1/4 灰白③ 1 ~ 2 mm の白色の石粒含む④良好⑤完形⑥床直⑦鬼高二次焼成スス付着あり |
| H-58 413 | 土器器 瓶 | 221 287 | やや膨長、口縁はやや直線的に開く。 | 輪積み ヘラケズリ | 口縁ヨコナダ、内面ナデ後ヘラミガキ | ① 75YR 1/4 淡黄褐色② 5YR 1/3 にぶい橙③ 1 ~ 2 % の赤褐色の石粒含む④良好⑤完形⑥床直⑦鬼高二次焼成スス付着。 |
| H-58 450 | 土器器 小 壺 | 97 62 | 平底、球形に近い体部を持つ。口縁はわずかに開く。 | ヘラケズリ 口縁と体部の接合痕がある。 | 口縁ヨコナダ 内外面ナダ | ① 25YR 1/4 橙② 25YR 1/4 淡赤褐色③ 1 % の黒色の石粒含む④良好⑤×⑥床直⑦鬼高二次焼成スス付着 |
| H-58 615 | 土器器 杯 | (153) (7.15) | 横飲杯 外縁はややゆるくなっている。体部はややとがっている。口縁はほぼ垂直に立ち上がる。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナダ 内面ナデ | ①② 25YR 1/4 橙③ 2 % の赤褐色の石粒含む④良好⑤×⑥床+10⑦鬼高 |
| H-58 844 | 土器器 小型壺 | 8.0 13.3 | 球形に近い体部にわずかに平底をつけている。口縁はへ字に開く。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナダ 内外面ナデ | ① 10YR 1/2 灰黄褐色② 5YR 1/3 にぶい橙③ 1 % の褐色の石粒含む④良好⑤ほぼ完形⑥床直⑦鬼高二次焼成を強く |

| 番号 | 器 形 | 寸 法 | 器 形 の 特 徴 | 整 形 | 調 整 | (①内色画②外色画③胎土④焼成度残存⑤出土位置)その他の |
|-------------|----------|---------------|---|--|--------------------------------|--|
| | | | | | | 受けボロボロになっている ススが多量に付着。 |
| H-58 683 | 土器器 甕 | 17.5 30.5 | 最大径が体部中から上 にくる。口縁は直線的 にへの字に開く。平底 を造り付ける。 | 輪搗みのあとへラケズ リ | 口縁ヨコナデ 外面ヘ ラミガキ 内面ナデ | ① 25YR 1/2 横② 75YR 1/2 横 白③ 1% の白色石粒含む④ 良好⑤ ほぼ完形⑥ p i t 5 内⑦ 和泉の特徴あり二次燒 成スス付着。 |
| H-58 684 | 土器器 甕 | 11.4 51.5 | 口縁内凹、体部は口縁 から続いて下ったあと やや角を造って底窓へ。 底部はややとがる。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ 内面ナ デ後放射状ヘラミガキ | ①② 25YR 1/2 横③ 右英鈍石 陶化鉄素輝石密④ 良好⑤ 25YR 1/2 p i t 5 内⑦ 東高二 次燒成外側スス付着。 |
| H-58 687 | 土器器 甕 | (10.1) 6.0 | 最大径が体部上にくる 口縁内凹、平底 | ヘラケズリ 内面に指 窓柱模あり | 口縁ヨコナデ 内面ナ デのあと一部にヘラミ ガキ | ① 5YR 1/2 明赤地② 5YR 1/2 にぶい模③ 陶化鉄素輝石長石 紫輝石粗④ やや不良⑤ ⑥ p i t 5 内⑦ 鬼高二次燒成 |
| H-58 695 | 土器器 甕 | 19.55 14.7 | 鉢型の楕、和泉の系統 をひく。口縁折り返し で指頭圧痕あり底部に は中心からややずれて 径 1.4 cm の小穴があく | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ 内面ナ デ | ①② 5YR 1/2 横③ 1 ~ 2 % 褐色石粒含む④ 良好⑤ 完形 ⑥ p i t 5 内⑦ 和泉の系統を ひく二次燒成スス付着。 |
| H-58 696 | 土器器 甕 | — 31.4 | 球形に近い体部をもつ 最大径はほぼ中央、平 底を造り出す | ハケ目ヘラケズリ内面 に工具痕 | 口縁ヨコナデ 内外面 ナデ | ①② 75YR 1/2 底白③ 1% の石粒④ 良好⑤ 口縁を欠く ⑥ p i t 5 内⑦ 鬼高二次燒 成スス付着外側の一部がは がれています。 |
| H-59 7 | 土器器 甕 | 11.7 7.25 | 平底な反形、最大径が 強部のすぐ下にくる。 口縁は短くわざかに 外反。 | ヘラケズリ | 口縁ヨコナデ 内面ナデ | ① 5 YR 1/2 横② 75YR 1/2 にぶ い模③ 1 mm の白色石粒を含 む④ 良好⑤ 完形⑥ 底直⑦ 鬼高 二次燒成口縁外にも及ぶ。 |
| H-59 169 | 土器器 甕 | 12.7 5.1 | 直線的な形。底はとが っている。口縁はやや 内へ傾く。 | ヘラケズリ 内面タシ目 | 口縁ヨコナデ 内面ナデ | ① 10R 1/2 赤② 25YR 1/2 底直 ③ 鞍石、紫輝石、石英密 ④ 良好⑤ 完形⑥ 底直⑦ 鬼高 赤色彫影。 |
| H-59 170 | 土器器 甕 | 15.6 23.2 | 体部のほぼ中央に最大 径が来る。口縁はへの 字に開く、平底を造り 付ける。ややふくらん でいる。 | 外側ハケ目とヘラケズ リ、内面ヘラケズリと ハケ目 | 口縁ヨコナデ | ① 25YR 1/2 底直② 16YR 1/2 底 白③ 1 mm の黒色石粒を含む ④ 良好⑤ 完形⑥ 底直⑦ 鬼高 外側に黑色彫影。 |
| H-59 440 | 土器器 甕 | 16.0 30.0 | 長脚化の見える甕、体 部中央に最大径、平底 ややへこんでいる。 | ヘラケズリ、外は上下 方向、内は横方向、輪 摺痕、板合痕、工具痕 のこる。 | 口縁ヨコナデ 外側ナデ | ① 75YR 1/2 にぶい模② 75 YR 1/2 にぶい模③ 紫輝石、 石英密石陶化鉄、密④ 良好 ⑤ 完形⑥ 底直⑦ 鬼高二次燒 成、スス付着多い。 |

| 番号 | 器 形 | 寸 法 | 器 形 の 特 徴 | 施 形 | 調 整 | (1)内色調(2)外色調(3)胎土(4)燒成(5)焼成(6)出土位置(7)その他 |
|--------------|------------------|----------------------------------|---------------------------------------|--|-----------------|---|
| H-59 447 | 上部器 甕 | 174 30.1 | 体部や上に最大径あり、口縁はへの字に開く、半底ややへこむ。 | 外ハケ目、ヘラケズリ 内ヘラケズリ、内側ハ ケ目、輪積み接合痕あ り。 | 口縁ヨコナデ 外ナデ | (1)②25Y%淡黄(2)25Y%淡 黄(3)1mm以下の和(4)良好(5) 完形(6)かまど焼成部内(7)鬼 高。 |
| H-60 102 | 土器器 甕 | 168 底 痕 193 | 最大径が体部中央にく るようである。口縁ハ への字に近く外る。 | たてよこのヘラケズリ | 口縁ヨコナデ 外面ナ デ | (1)③75Y%にぶい緑(3)1 %の白、褐色の石粒含む(4) 良好(5)口縁欠く(6)床凹(7) 鬼高二次焼成タール付着あ り。 |
| H-60 136 | 土器器 甕 | (176) 252 | 口縁はへの字に外る。 すん明の体部から底部 は角度をつけて変化 | ヘラケズリ 内部に輪 積み、接合痕がのこる。 | 口縁ヨコナデ 外面ナ デ | (1)(2)75Y%にぶい緑(3)1 %の白色褐色の石粒含む (4)良好(5)口縁欠く(6)p.i.17 内(7)福島舞台式か、二次焼 成スス付着タール付着。 |
| H-3 埋土 | 大 玉 甕 | 長 20 幅125 穴 0.4 | | | | 淡青緑色 よくみがいてあ る。 |
| H-10 173 | 鉢 瓦 | 長 3.3 頭径 0.9 | やや空がっている。 | | | |
| H-48 890 | 鉢 瓦 | 長 3.3 基 | | | | |
| H-56 3225 | 鉢 瓦 | 長2.15 基 | | | | |
| H-56 1227 | | 長 2.3 径 0.7 | | | | (1)(2)10GY%暗緑灰 |
| H-26 84 | 石製模 造品 劍 形 | 長3.57 幅 1.5 厚0.15 穴0.15 | 一部を欠いている。 | | | 粘晶片岩製 |
| H-36 183 | 残 砖 | 長 16.65 幅 2.9 厚 0.55 | もろはの可能性あり。 | | | |
| H-45 埋土 | 瓦 石 | 長 7.1 厚 2.1 穴 0.6 | | | | (1)(2)5 Y%淡黄(7)よく使わ れている。 |
| H-52 98 | 滑石製 筋道車 | 上235 下 3.6 厚 1.6 穴0.65 | 円玉の形をしている。 上面は欠けている。 | ミガキがはいっている。 | | (1)(2)5BG%青黒 |

| 番号 | 器 形 | 寸 法 | 器 形 の 特 徴 | 整 形 | 調 整 | ①内色調②外色調③出土④経 年⑤現存⑥出土位置⑦その他 |
|-------------|------------------|------------------------------|------------------------------|----------------|-----|--------------------------------|
| H-56 | 鉢形板 | 長 36 幅195 厚 04 | 片面の穴の周囲が凹どりしてある。こちら側が表と見られる。 | | | |
| H-57 343 | 石輪模 造品 盾 形 | 長 40 幅 25 厚 07 穴 02 | | | | ⑥深直 |
| H-56 957 | 滑石製 菅 玉 | 長 27 径085 穴 025 | | | | ①② 5 G ③緑黒色 |
| W-3 66 | 滑石製 菅 玉 | 長145 径 07 穴025 | | 内面穿孔、ラセン状工具あり。 | | ①② 10Y ③オリーブ黒色 ⑦全体に磨滅している。 |
| K-3G | 磨鍛石 斤 | 長 43 幅 30 厚 12 | | | | ⑤ |

序

明和57年より開始された小神明地区土地改良事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査も、今年で四年目を終了しようとしています。

その間、繩文時代から江戸時代に到る先人の生活の跡を多く調査し、報告書として発行してきました。これらの内容により、少しでも芳賀の地の歴史を解き明かすことができたのではないかと思います。

いうまでもなく、こうした開発事業に先立つ緊急発掘調査は、事業により遺構が直接破壊を受ける部分について実施するもので、記録の保存、報告書の発行により、失われる遺構の代償とするものです。

従って、この報告書が有效地に使われることで、地元関係者や歴史を学ぶ人々の資料となり、埋蔵文化財に対する理解と関心を高められることがなくてはなりません。

さて、本年度は、年度途中の計画変更により、調査面積の増加、発掘調査期間の変化等の問題で、関係者の方々には、大変なお骨折りをいただき、感謝に耐えません。

おかげさまで、調査も無事終了にこぎつけ、整理に入ることができました。

本遺跡のくわしい調査内容は、報告書本文にゆずりますが、住居址、掘立柱建物跡、井戸、溝土坑、ピット、墓といった遺構が、非常に残りの良い状態で見つかりました。

昭和58年度調査で、東側を発掘した九糸遺跡は、今年西側を調査し、調査区境にあった住居を2年かかりで、完掘するというようなこともありました。

遺物の量もコンテナパットで190箱という量に及び、貴重な資料を、また増加することになりました。

前橋の歴史を解明する資料として使われれば幸いです。

最後に、酷暑から嚴寒までの気候の中で、発掘調査、報告書発行にたずさわった担当者、作業員の方々の御苦労をねぎらうと共に、この調査に御指導、御助言、御協力いただきました地元土地改良区の役員、土地改良連合会、地元の方々に深く感謝するものであります。

昭和61年3月15日

前橋市教育委員会

教育長 岡 本 信 正

例　　言

1. 本書は、昭和60年度団体賞小神明地区土地改良事業に伴う、小神明遺跡群IVの発掘調査報告書である。58年度調査の九料遺跡を含むため、略称は60C-1である。
2. 小神明遺跡群IVは、次の二ヶ所の遺跡からなっている。

湯気遺跡、群馬県前橋市小神明町湯気682 他
九料遺跡、群馬県前橋市勝沢町九料1032-1 他
3. この発掘調査は、土地改良事業により遺構が直接破壊を受ける部分について、前橋市教育委員会が、国、県補助金、市費により、又、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が、小神明土地改良区よりの委託金により実施したものである。
4. 発掘調査は、昭和60年6月6日から12月6日までと、昭和61年1月13日から2月26日まで実施した。整理作業は、昭和61年3月31日まで実施した。
5. 本書は、昭和60年度発掘調査の記載を主とし、これに昭和58年の調査成果を加えた若干の考察を含んでいる。
6. 本報告書中の土色は、「新版標準土色帖」(小山、竹原1970)に基づいている。
7. 担当者は、桑原昭、原田和博、折原洋一、井野修二、である。
8. 本遺跡の資料は、前橋市教育委員会の管理下に保管されている。
9. 本調査については、期間中2度にわたって実施した現地説明会の資料に一部紹介されているが、本書の記載内容が、これに優先するものである。
10. 調査作業員（順不同）

佐藤真寿雄、平林たか、中島つる、五十嵐くま、鈴木孝子、中島幸重郎、平林ふさ、松村ふさ、古松英太郎、佐藤佳子、新保一美、角田もと江、佐藤龍家、大沢はづ、平林チヨ子、松本伯子、柴崎香代子、神野信、稻葉義則、大谷恭子、千明徳至、関哲哉、新保富恵、烏山初子、堀越豊、新保幸永、梅沢八重子、真庭トシ、内藤よし子、神沢アヤ子、新保昌子、新保隆、新保勝太郎、新保松乃、堀越うめ子、真庭卯平、後藤伴作、蜂須賀もとめ、春山繁、佐藤やよい、小川悦子、諸田千春、長尾純子、松本加代子、湯浅ウラノ、深井房子、堅木アヤ子、今井美也、今井妙子、中島キミエ、湯浅道子、渡木秋子、後藤隆、湯浅たま江、加部二生
11. 発掘及び遺物整理においては、次の諸氏から御指導、御助言、御協力をいただいた。心より感謝を表する次第である。

小神明土地改良区、群馬県土地改良連合会、加部二生、竹内敏江、福島裕子、松本保、神野信、白井栄恵、黒沢なつ美、大塚美智子、田村恵子、竹本順子、松田富美子、角田弘子、堀越順子、
12. 執筆分担は以下の通り

桑原昭、22、23、24、25、27、30、36、44、45、46、61、66号住居址、原田和博 26、48、53、54、58、59、60号住居址、井野修二、その他。

目 次

序 文 前橋市教育委員会 教育長 岡木 信正

例 言

目 次

凡 例

| | |
|----------------|---|
| I 発掘調査の経過 | 1 |
| II 遺跡の位置と周辺の遺跡 | 2 |

湯氣遺跡

| | |
|----------------------------------|----|
| 縄文時代 | 3 |
| 弥生時代 28号住居址 | 4 |
| 古墳時代 22・26・29・30・34・31号住居址 | 6 |
| 奈良・平安時代 23・24・25・27・36・37・42号住居址 | 21 |
| 掘立柱建物跡 1・2・3号掘立柱建物跡 | 31 |
| その他の遺構 | 32 |
| まとめ 遺構について 遺物について | 33 |

九料遺跡

| | |
|---|----|
| 縄文時代 61号 66号住居址 | 35 |
| 古墳時代 47・3・45・48・49・52・53・54・58・59・60・56・10・14号住居址 | 37 |
| 奈良・平安時代 44・46号住居址 | 65 |
| 中・近世 墓 | 67 |
| 掘立柱建物跡 4号掘立柱建物跡 | 68 |
| その他の遺構 | 68 |
| まとめ 遺構について 遺物について | 69 |

写真図版 1～30頁

- 付図 1. 湯氣遺跡遺構分布図
2. 九料遺跡遺構分布図（北側部分）
3. 九料遺跡遺構分布図（南側部分）

別冊 遺物観察表

凡　　例

- 各遺構の縮尺は、 $\frac{1}{100}$ を基本としている。かまどについては $\frac{1}{50}$ である。
- 各遺物の実測図は $\frac{1}{100}$ 、拓本は $\frac{1}{100}$ であるが、特殊なものについては、 $\frac{1}{100}$ 、 $\frac{1}{50}$ とし、図面に示した。
- 遺構平面、断面におけるスクリーントーンは、以下のように使用した。他の表示方法についても、前橋市教育委員会発行の他の報告書と同様である。本報告書は、単色であるため、遺物の赤色塗彩についても、スクリーントーンで示してある。

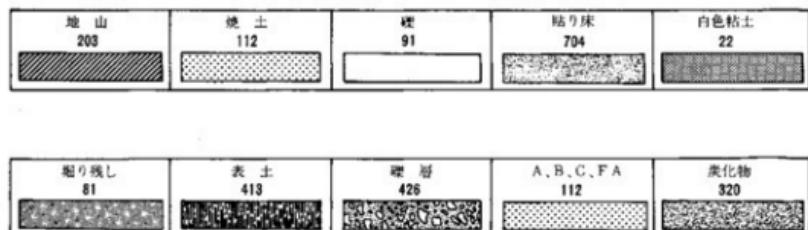


図1 スクリーントーン使用例

- 水糸のレベルは、原則として各遺構ごとに統一した。
- 小神明遺跡群IVは、2つの遺跡に分かれている他、昭和58年度の同一遺跡の調査であるため住居址については、調査時の混乱をきけるため続き番号としている。

なお、調査時の都合で、住居番号が欠番になっているものがあり、住居番号は、住居数を示すものではない。九糸遺跡(南側)については、2月26日調査終了ということで、本報告書には、遺構分布図と写真図版を掲載するにとどめ、くわしい報告は、昭和61年度発行の報告書にゆずるものである。

I 発掘調査の経過

小神明地区では、昭和57年度から土地改良事業が実施されている。それに伴い、埋蔵文化財の発掘調査が実施され、本報告は、その4年目にあたっている。

昭和60年度の調査に到る協議の経過は、以下の通りである。

昭和60年5月14日 土地改良区、土地改良課、社会教育課の三者による協議を行い、調査地区、調査期間等を確認する。

5月31日 土地改良区より、調査依頼等が来る。

6月6日 調査区設定。

11月14日 土地改良事業の工事中に、未調査の住居址4軒を確認。

15日 現地で、関係者が集まり、今後の対応を協議。

その後 同日午後、16日、19日、20日午前と協議を重ねる。

11月20日 土地改良区、土地改良課、社会教育課の三者協議で、調査実施と決定、文化庁、県との打ち合せの中で、教育委員会直営として実施となる。

調査の経過は、以下の通り、

6月6日 調査開始

6月10日 桑畠部分の抜根作業（湯気遺跡）

11日 表土除去作業

8月9日 桑畠部分の抜根作業（九料遺跡）

8月13日 表土除去作業

8月31日 湯気遺跡現地説明会実施

9月28日 湯気遺跡調査終了

11月30日 九料遺跡現地説明会

12月6日 九料遺跡（北側部分）調査終了

61年1月13日九料遺跡（南側部分）調査開始

2月26日九料遺跡（南側部分）調査終了

3月31日報告書刊行

測量基準点については、水準を「小神明土地改良事業平面図」のBM6、140,911m、BM2、130,775m、より係員によって移動、国家座標は、測量会社に委託して設定した。

湯湯気 (0-0) X=46324.85 Y=-65635.44 真北から17°54'56" 東

九料 (B-6) X=463587.40 Y=-654162.02 真北から17°30'08" 東

II 遺跡の位置と環境

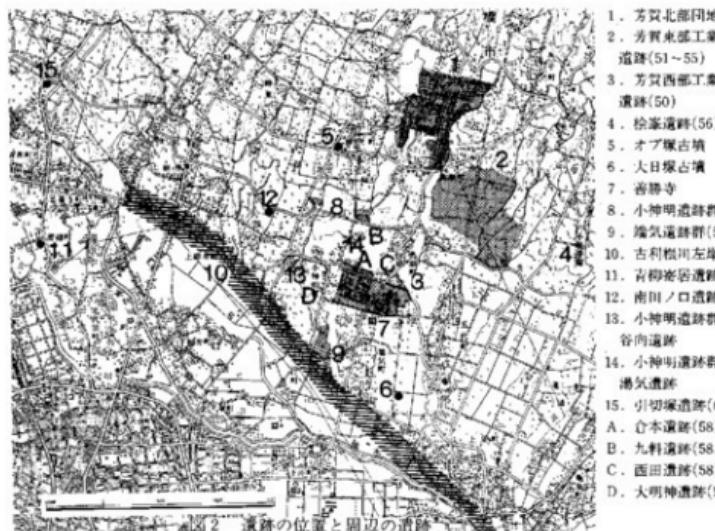


図3 遺跡位置図

市の中心部から赤城山に向かうと、水田が途切れ、崖になっている所にある。これは旧利根川によってつくられた崖である。その上は赤城山の噴出物による台地で、中小の河川により樹枝状に削られている。

本遺跡群は、この崖より北に1kmほどのばった標高120mから140mのところにあり、周囲には、縄文時代から中・近世に至る遺構、遺跡が密集している。

現状は桑畠と水田。

湯気遺跡

| | | |
|-----|--|--|
| I | | |
| II | | |
| III | | |
| IV | | |
| V | | |
| VI | | |
| VII | | |

層序

| | | |
|------|--------------|--------------------------|
| I層 | 55~60cm | 黒褐色土層 2.5Y 3/4 耕作土 |
| II層 | 4~5cm(所々に堆積) | 黒褐色土層 2.5Y 3/4 砂質でしまりが強い |
| III層 | 15~20cm | 黒褐色土層 軽石の混入が多い |
| IV層 | 20~25cm | 黒褐色土層 ソフトロームを20%混入 |
| V層 | 10~15cm | 黒褐色土層 IV層 VI層の混土層 |
| VI層 | 15cm | オリーブ褐色土層 ソフトローム 遺構検出面 |
| VII層 | | 黄褐色土層 ハードローム |

図4 基本層序

縄文時代

この遺跡内で、縄文時代に属する住居址、土坑等は確認されていない。しかし、土地改良事業の道水路予定部分に限った発掘のため、この地域内に存在しているが、検出されなかったものと考えられる。

1つは、遺跡内を北西から南東に通る溝と、平行して存在している土坑から、縄文式土器が検出されている点である。地形を見ると、北西に向かって高くなっている、また南東の谷地に向かっていることを考えあわせると、北西部に、縄文時代の住居址があることが予想される。

土器は、諸磯が確認された。

もう1つは、26号住居址から出土した尖頭器である。これは、床面上30cmの所から検出された。流れ込みの状態が明らかである。

材質は、珪質頁岩で、縄文時代草創期のものである。

遺跡群内で、草創期の遺物が出土したのは始めてであり、注目されるものである。

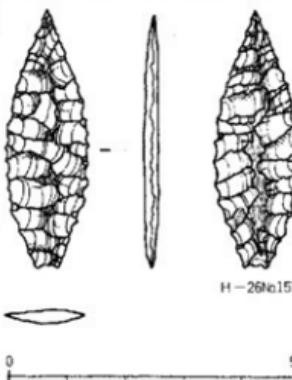
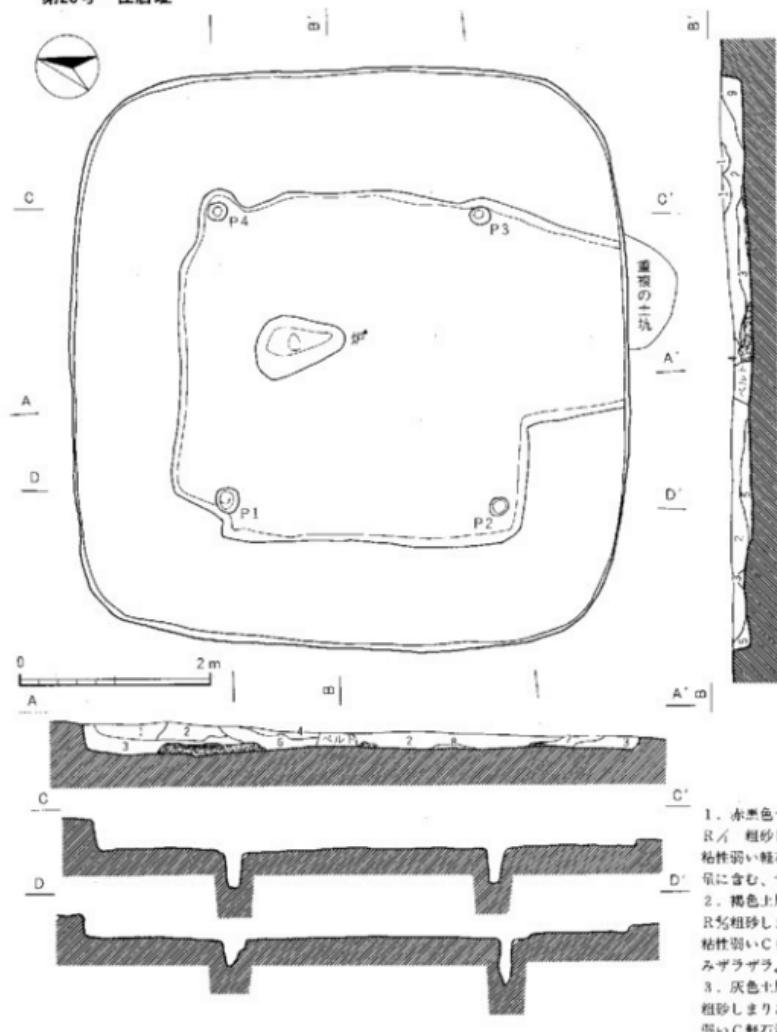


図5 26号住居址出土No157. 尖頭器

弥生時代

第28号 住居址



4. オリーブ黒色土層 5 Y% 粗砂しまりあり粘性弱い軽石混入。 5. 灰色土層 5 Y% 組成は3層と同じ、炭化物が多い。
 6. 褐色土層 7.5Y R% 組成は2層と同じ炭化物灰焼土50%60% 7. 8. 組成は3層と同じ、焼上灰を60~70%含む。
 9. 赤黒色土層 2.5Y R% 粗砂粘性しまりあり、軽石混入、流土混入あり。

図6 28号住居址



図7 28号住居址 炭化物分布図

遺構 遺跡南端55-13グリッドに属する竪穴住居址。標高130mほどの高さにある。耕作による削平が及んでおり、土坑との重複とあわせて、残存はあまり良くない。6.08×5.58mの規模で、33.07m²の面積である。隅丸で、柱穴4本の外側床面が、南側中央部分を除いて内側より5~6m高くなっている。いわゆるベット状遺構になっている。この遺構は、河野眞知郎氏の分類でB型^(注1)に属するものである。主軸方位はN-9°-Wである。周溝、貯蔵穴は検出されなかった。柱穴間寸法は、N3.0m、S3.06m、E2.76m、W2.78mである。覆土は基本的に2層で、C軽石を多量に含んでいる。壁高は30cmを確認したが、耕作による削平があり、元の高さは、もっとあったと思われるが、推定できる資料は得られなかった。平均傾斜は83°で、比較的しっかりした形で検出された。

炉 住居中央、わずかに北の位置に造られている。地床炉で形はだ円形である。規模は48×62cm深さ8cmほどである。主軸はN-27°-Wで、住居より18°西によっている。住居南側からも焼上が検出されたが、これは、本遺構が、焼失住居であることからきているものかもしれない。

遺物出土状態 遺物は少なく、実測が可能なものは4点、出土位置は、全体に広がっている。すべて床面直上である。焼失住居であり、床面全体に建物の建築材が焼失、炭化物になった状態で

検出された。分布図を見ると、中心に向かってそろっている傾向があり、葺きおろしの屋根であったとも思われる。58年度調査時の1号2号住居址が同じ頃のもので、1号は、やはり焼失住居であった。古い河川が、間を分けていたため、同一集落とは考えにくいが、注目したい。

出土遺物 失調可能なものは、図版にのせた4点である。内No.12の器台か台部分から考えて、弥生時代後期、樽B'類に分類されるのではないか。他3点、No.62壺か甕の底部、No.59、小壺の口縁No.28壺の口縁についても、ほぼ同じ頃のものであろう。

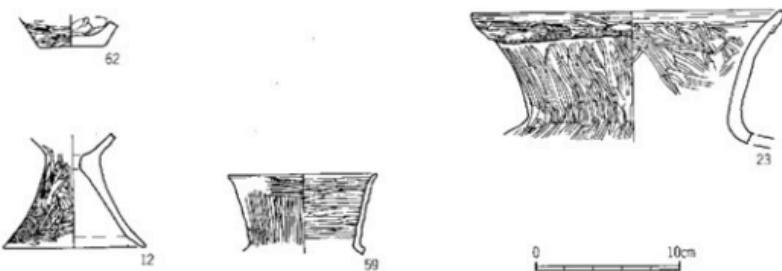


図8 28号住居址 出土遺物

古墳時代

第22号住居址

遺構 調査区南より48-12グリッドに位置する竪穴住居址。平面の形状は長方形を呈していて、北壁が他に比較するとやや短かい。また、東壁中央はH-27号住居址に切られていて検出できなかつた。寸法は長軸は6.02mで短軸は4.68mをはかり、面積は約27m²である。周溝については、南壁の一部で検出されて、幅10cm、深さ5cm程度である。さて、貯蔵穴（P_s）については、位置は南東隅にあり、長軸90cm、短軸74cmで、深さ34cm（床面から）をはかることができ、形は橢円を呈する。主軸方位については、N-33°-Wである。そして、上層は、基本的には2層に分けることができる。壁高については、確認された壁高は15cmをはかり、推定される壁高については不明となつてゐる。壁の傾きについては、平均にして78°をはかることができた。床面のようす、状況については、凹凸は少なく、ほぼ平坦となっているが、二ヶ所ほど、わずかにくぼんで見えるところがある。

炉 住居址中央のやや北の位置に焼土が検出された。炉と思われたが、窓みなどは検出されなかつた。大きさは80cm×50cmで、形は橢円を呈する。また、炉の長軸は住居主軸に直行している。

遺物出土状態 H-27との重複部分に多く遺物が検出された。

出土遺物 No.84高杯、No.62高杯、No.25高杯、No.8小壺、No.50壺が出土し、これらの遺物から、本住居址の時期は、相対編年の和泉期、それも石田川期に近い比較的古い方に属する。重複関係は、H-27号住居址に東壁中央を掘り取られている。

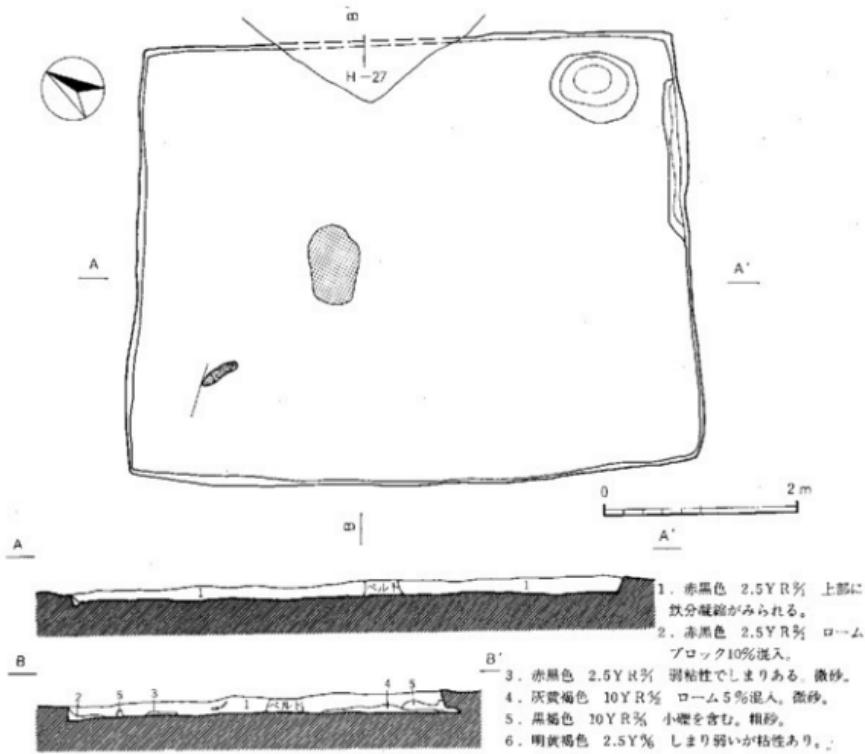


図9 22号住居址

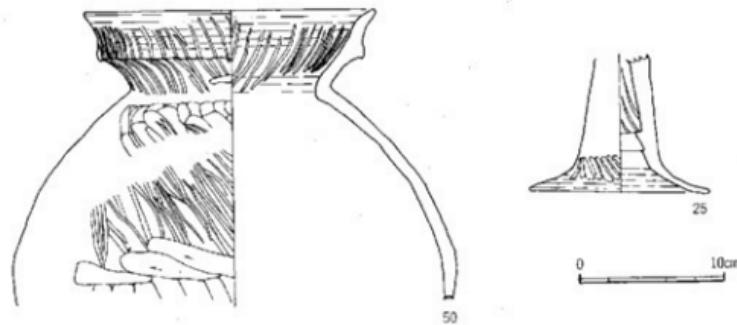


図10 22号住居址 出土遺物

第26号住居址

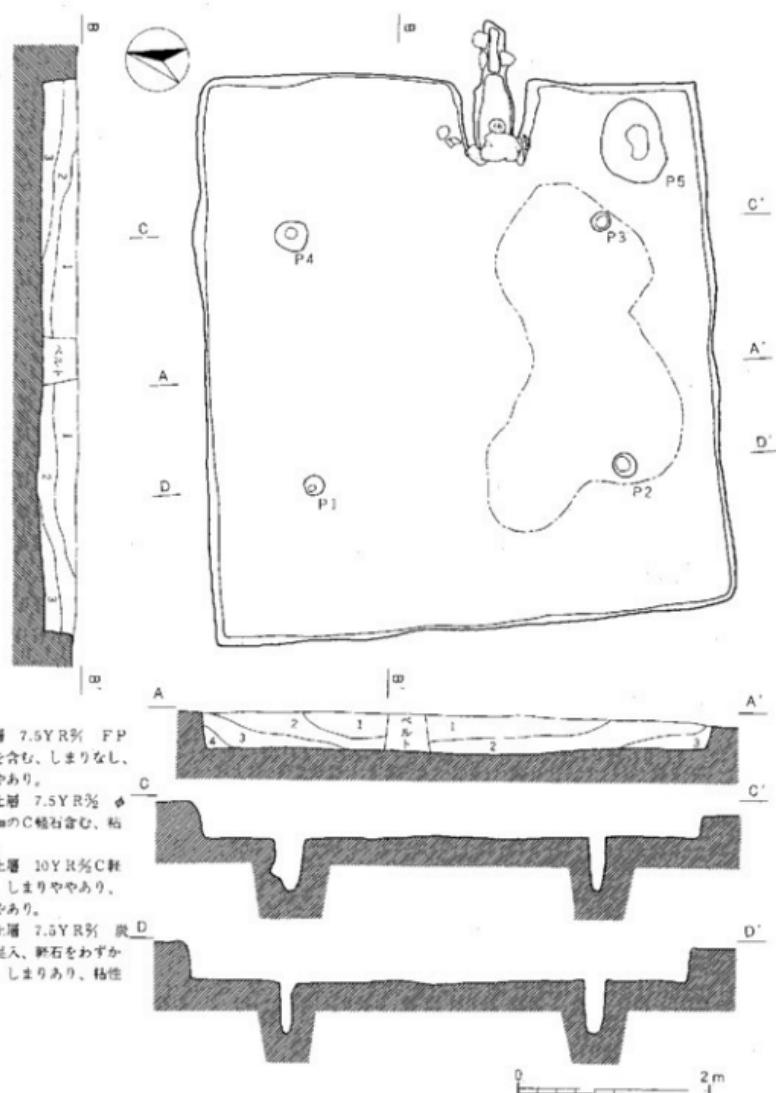


図11 26号住居址

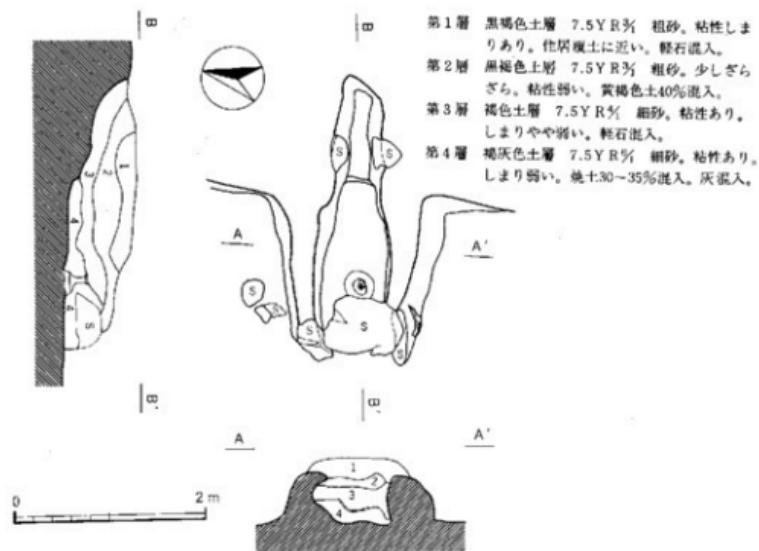


図12 26号住居址 かまど

遺構 本住居址は、43-12グリッドに位置する。平面形は東西に長い長方形で、かまどを東壁やや南寄りに持つ。規模は長軸5.92m、短軸5.5mであり、面積は30.84m²を測る。各辺とも直線的に構成され、整った形態を呈する。主軸方位はN-78°-Eを示している。遺存状況は極めて良好である。覆土は地断に示されるように3層から形成されている。確認面からの壁高は、平均36cmで壁の立ち上がり角度は、平均82°でシャープに立ち上がる。床面は平坦で、堅微面が住居中央から南側に広がる。ピットは5ヶ所確認された。主柱穴はP₁～P₄の4本で、柱穴間寸法はP₁-P₂が3.24m、P₂-P₃が2.54m、P₃-P₄が3.26m、P₁-P₁が2.68mである。P₅は貯蔵穴で長径88cm、短径64cm、深さ75cmの楕円形に掘り込まれている。

かまど 東壁の中央やや南寄りに位置し、主軸方位はN-79°-Eを指す。残存状況は極めて良く、抽石、天井石そして支脚として使用された高环も検出された。全長1m50cm、全幅92cmを測る。焚口部は石を鳥居状に組んであり、幅30cm、長さ40cm、燃焼部幅30cm、長さ55cm、煙道部幅25cm長さ55cmである。燃焼部、煙道部共に良く焼けており、高环を支脚として倒立させて使用している。煙道部は住居外に造り出しており、補強用の石も2個検出された。

遺物出土状態 本住居址から出土した遺物は、実測可能な16点以外すべて小破片であり、半数以上がかまど周辺に集中している。中央部は比較的少なく、南壁付近にも集中が見られる。1の器は、P₄近くの床直上に横転した状態で出土した。84の石製刺形模造品は、南壁際中央の床直上か

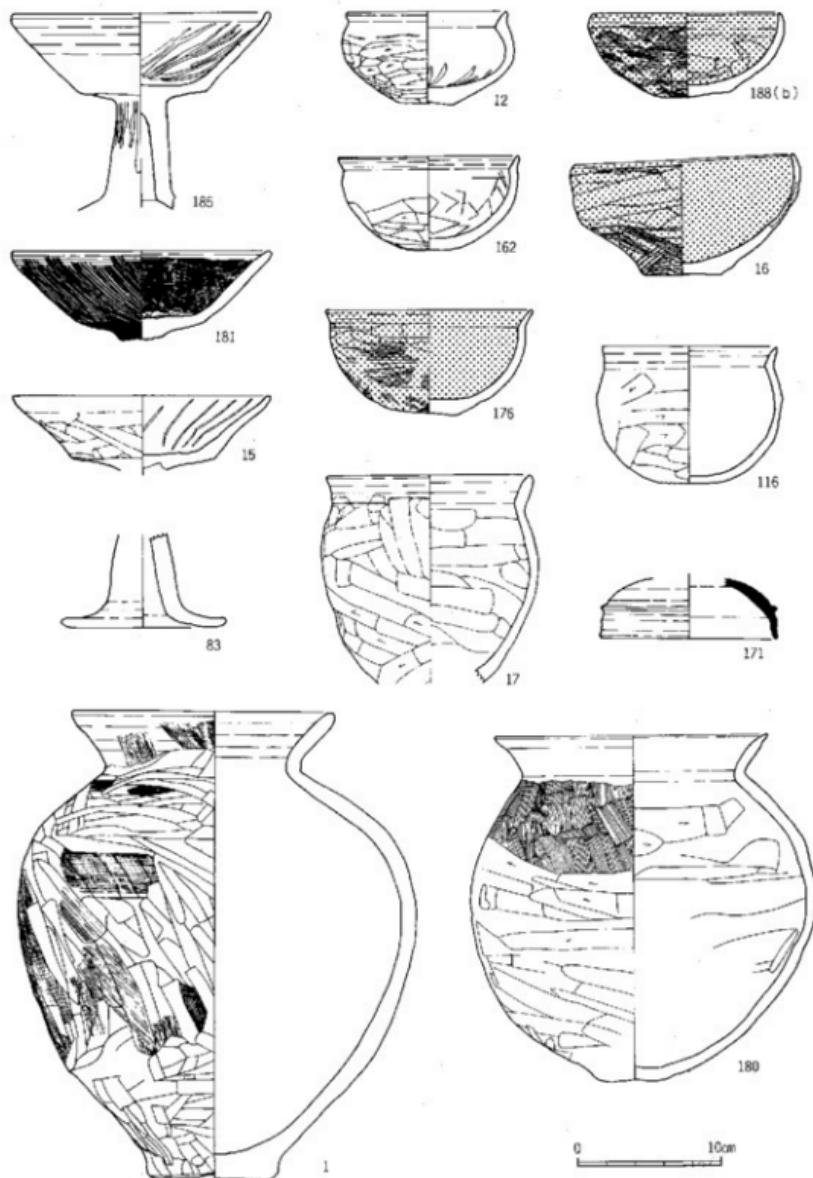


图13 26号住居址 出土遗物

ら出土している。171の須恵高
环蓋はP₂とP₃の間床上10cmか
ら出土している。その他の実
測可能な遺物はすべて床直上
から出土している。また縄文
の項で載せている157の石製尖
頭器はP₁とP₄の間床上30cmか
ら出土している。

出土遺物 本住居址からの出
土遺物総数は200点で、この他
こも石が3個出土している。

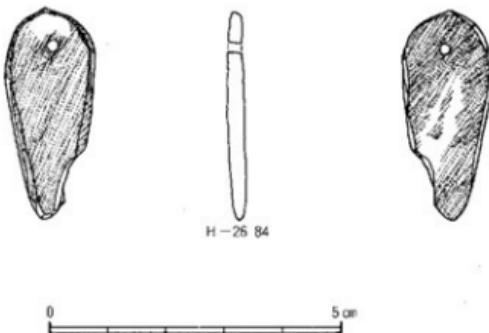


図14 26号住居址・出土遺物

実測可能遺物は、甕3個体、壺1個体、高环4個体、塊3個体、鉢1個体、环1個体、須恵器高
环蓋1個体、石製品2個体の16個体であった。床直上から出土している1の甕や180の壺といった
遺物を器形等から総括的に見ると和泉期の末期のものと位置づけられる。

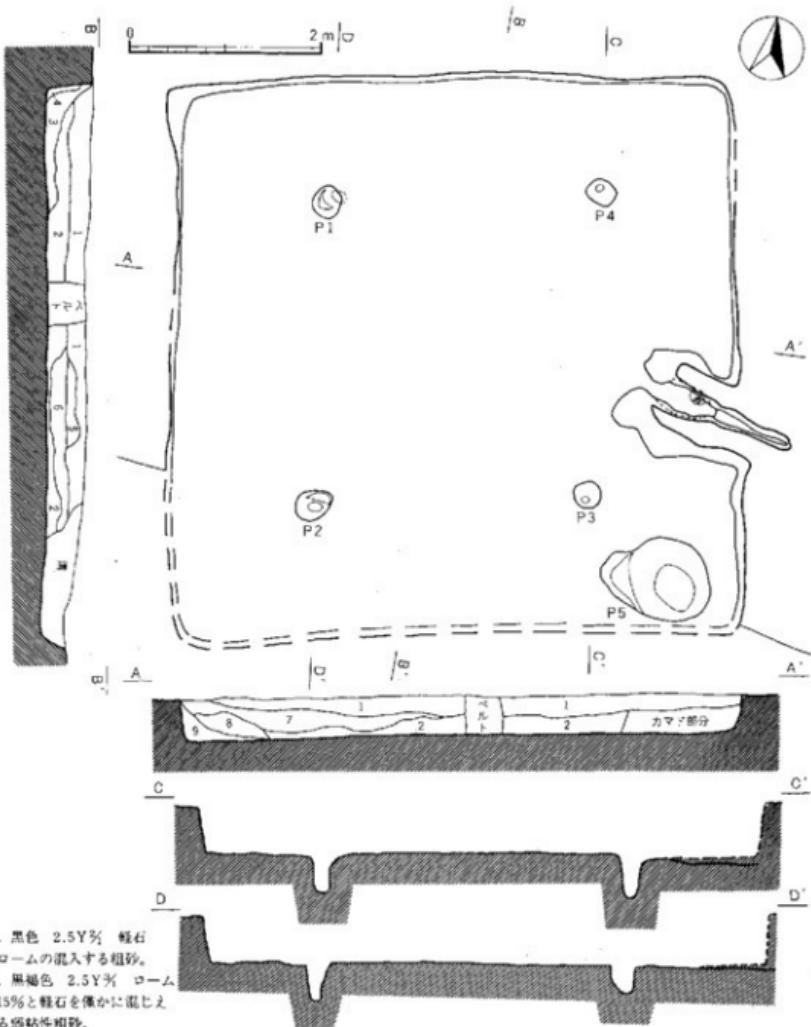
第28号住居址

遺構 遺跡地西端19-1グリッドに属する竪穴住居址である。ほぼ正方形と考えられるが、南壁
と南西隅を溝との重複により削りとられており、検出できなかった。寸法は、6.16×5.84mで、
面積は約34m²である。柱穴は4本を確認した。いずれも円形で30~40cmの深さをもっている。P-
1のみ東側に底部が入りこむ様子を見せている。柱穴間寸法はN2.64m S2.82m E3.24m W3.24
mである。周溝は検出されなかった。貯蔵穴は住居南東隅に検出、94×84cm・深さ54cmのだ円形
で、西側に深さ10cmほどのテラスが存在している。主軸方位はN-83°-Eである。覆土は、基本的
に3層である。覆土最上部から遺物が集中して出土している。壁高は確認50cmで、ほぼ造られた
頃の高さと思われる。平面傾斜81°で、しっかりした形で検出された。床面は平坦で踏みしめられ
ている。

かまど 東壁やや南より5:3の位置に造られている。主軸はN-104°-Eで住居より21°南へ向いて
いる。残存状態は比較的良好だが袖に使われていたと思われる石は残っていなかった。支脚とし
てNo542の高环を倒立させて使用していた。全長1m80cm全幅95cm、煙道を住居外に出している。

遺物出土状態 かまと上から、覆土遺物として、环類が多く出されている。No.373の环が、そこには
含まれる。他は床直上から貯蔵穴内で、かまと周辺に集まっていた。

出土遺物 环3点高环2点甕3点瓶2点が出土している。器形から和泉から鬼高峰期と考え、和泉
の末期に位置づけた。支脚に使用のNo542の高环やかまと右袖から出土のNo502の瓶には、和泉の
色彩が色濃く感じられる。No529の口縁は、5世紀前頃のものか。



1. 黒色 2.5Y分 軽石ロームの混入する粗砂。
2. 黒褐色 2.5Y分 ローム15%と軽石を僅かに混じえる弱粘性粗砂。
3. 黒色 2.5Y分 軽石を含み、小礫と砂屑の黒色土。ブロックN^o5を15~20%混入する粗砂。
4. 黑褐色 2.5Y分 20%のロームを混入する粗砂。
5. 黑褐色 10YR分 1cmの小礫を混入する粗砂。
6. 黑褐色 10YR分 黒色上ブロックN^o5を5%。ロームブロックを20%混入する弱粘性の粗砂。

7. 黒色 10YR分 黒色上ブロックN^o5を5%、ロームを20~25%混入の弱粘性でしまりある粗砂。
8. 暗褐色 10YR分 黒色土ブロック5%ロームブロック10%。F系と異なる黒い軽石混入の粗砂。
9. 黒色 2.5Y分 N^o5の黒色土を30%、ローム25%の弱粘性でしまりのある粗砂。

図15 29号住居址

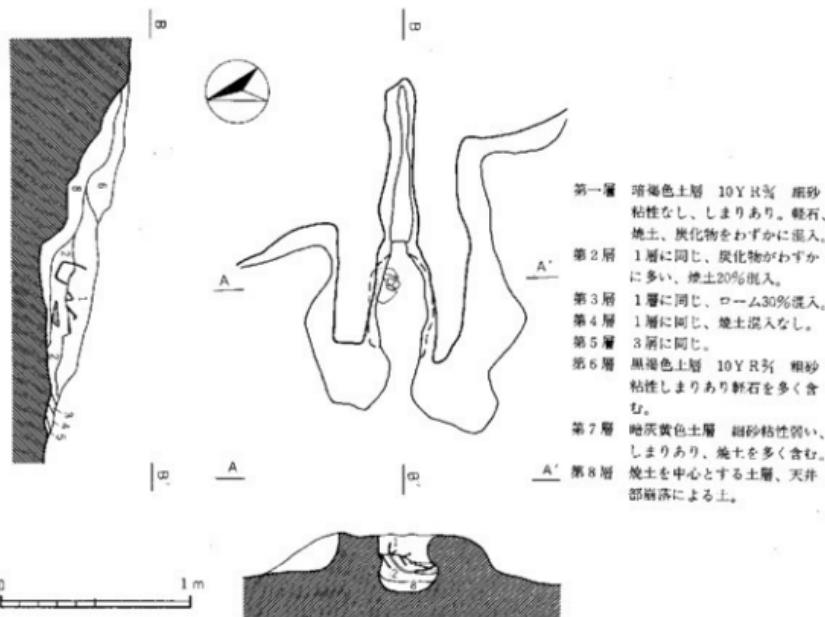


図16 29号住居址 かまど

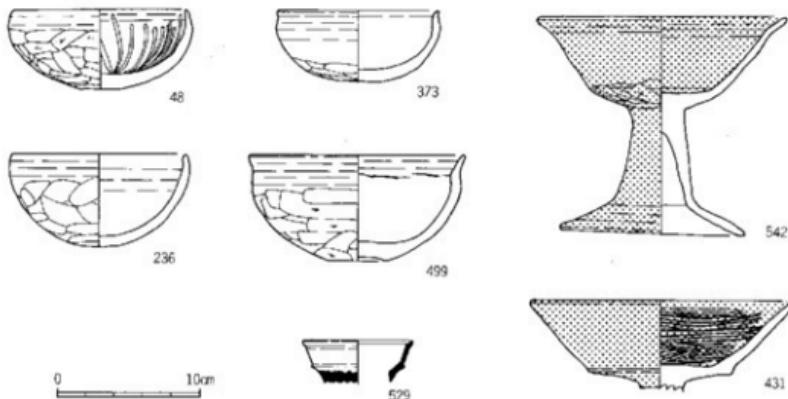


図17 29号住居址 出土遺物

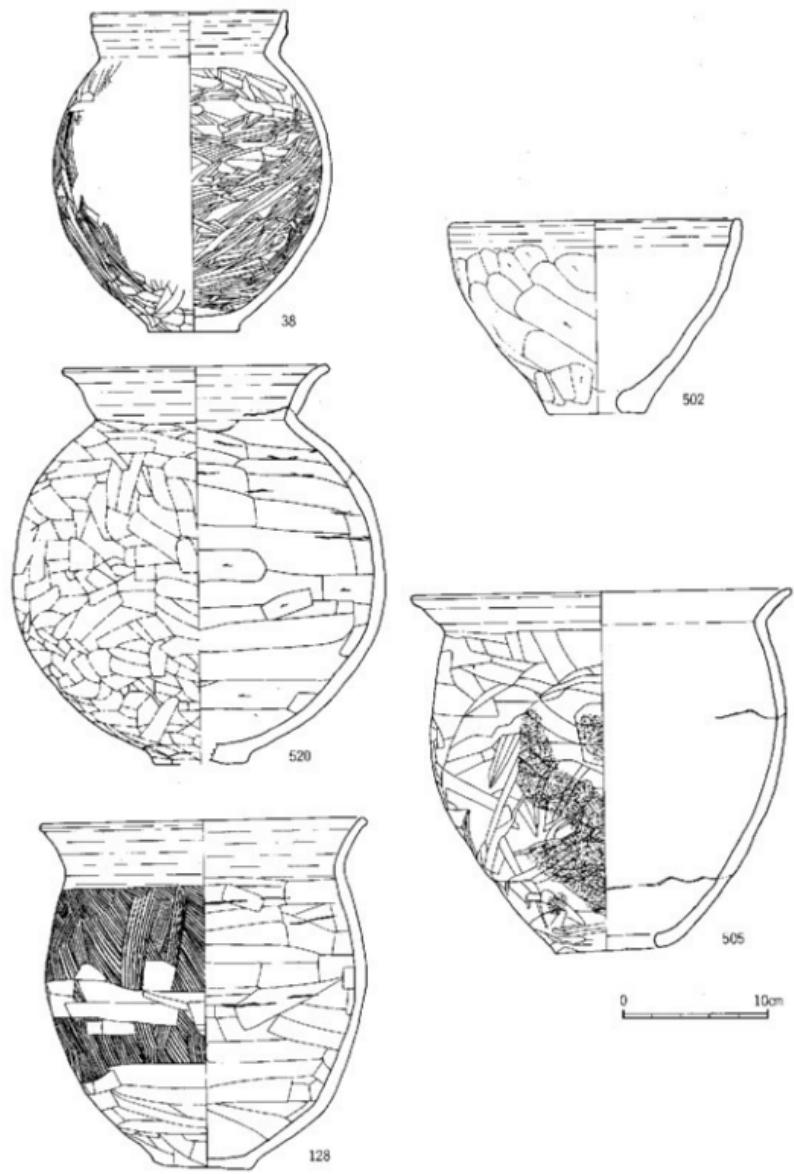
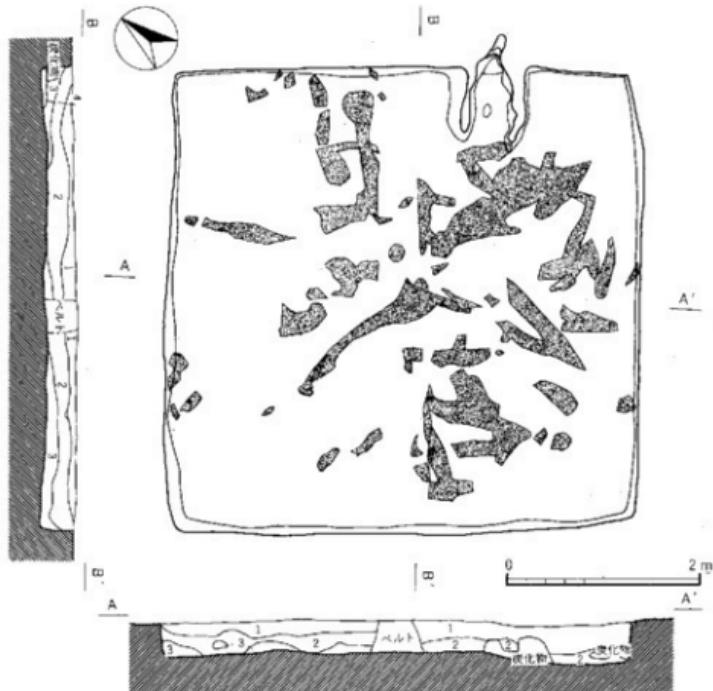


图18 29号住居址 出土遗物

第30号住居址



1. 黒褐色 10Y R 5% 砂石を多く含む。 含む砂質土。
 2. 黒褐色 10Y R 5% 砂石を含む。
 3. 黒色 10Y R 5% FとCの貝石を多く 含む粘質微砂。しまり弱い。
 4. 灰色 10Y R 5% 焼上、ロームを含む。

図19 30号住居址

遺構 調査区北部2-14グリッドに位置している。正方形で整った形をしている。長軸4.98m、短軸4.94mで面積は23.68m²である。周溝は検出されなかった。主軸方位はN-55°-Eである。七層は3層に分かれ二ツ岳系の軽石含む。確認壁高は30cm推定壁高50cm。壁の平均傾斜角83°でしっかりしている。床面はやや凸凹があり、焼失住居のため炭化物が広がって堆積していた。

かまど 東壁に5:2で南よりの位置に造られている。主軸は住居と同じ。煙道だけを住居外に造り出す。全長122cm全幅86cmで支脚と両袖が残る。煙道出口まで検出することができた。

遺物出土状況 住居址西側に集中して検出された。

出土遺物 75塊・150高环・177手づくね・8~22台付裏・212,213坪・67須恵蓋(床直)があり、いずれも5世紀第2四半期~第3四半期のもの。住居址の時期は和泉になる。これは遺物、住居形態から判定したもので、H-26・29に近い時期のものである。

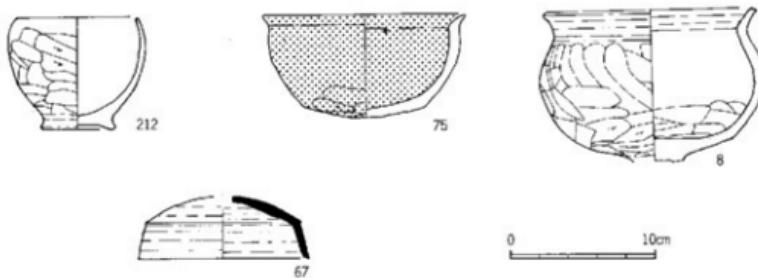


図20 30号住居址出土遺物

第34号住居址

造構 遺跡東端19-20グリッドに属する堅穴住居址である。真間期の37号住居址、国分期の42号住居址と重複して造られており、その中心を削られ、南壁中央を除いた壁近くのみが残っている状態であった。やや平行四辺形に近い形をしている。寸法は $7.74\text{m} \times 6.04\text{m}$ である。面積は約41m²と推定した。柱穴は存在が予想されたが、重複により掘りとられたものらしく検出できなかった。4本の存在を推定した。馬溝は検出されなかった。貯蔵穴は、住居南東隅に検出された。

100×76cm深さ46cmの方形だが、底部が北に向かって入りこみ、地下式土坑風になっていた。東西方向を主軸と考えると、主軸方位は、N-92°-Eである。土層は、壁の周囲のみであるが、4層を確認している。内側に住居が造られたため、堆積した後、内側に崩れた様子もある。確認壁高は55cmで、ほぼ、造られた当時の高さに近いものと思われる。平均傾斜は79°で、しっかりした形で検出された。床面は、重複が、床面下にまで達しており、東、北、西の外側を検出したのみである。外側が高くなる傾向が見られた。

炉 存在が予想されたが、重複のため掘りとられたものらしい。26号や29号と同じ和泉期であるがこちらの方が古く、58年調査の11.12.13.16号に近いもので、かまどの存在は考えられず、形跡も認められなかった。

遺物出土状態 床面が残っていた所から検出されたのみで、全体の様子は不明である。床直上の出土であった。

遺物 Na 1の高环とNa 2の环である。两者とも和泉期に属するものである。

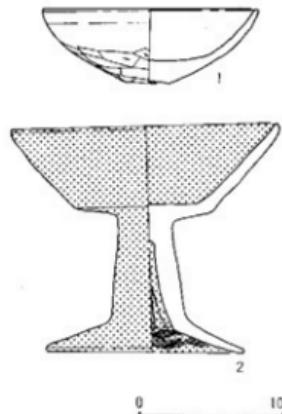
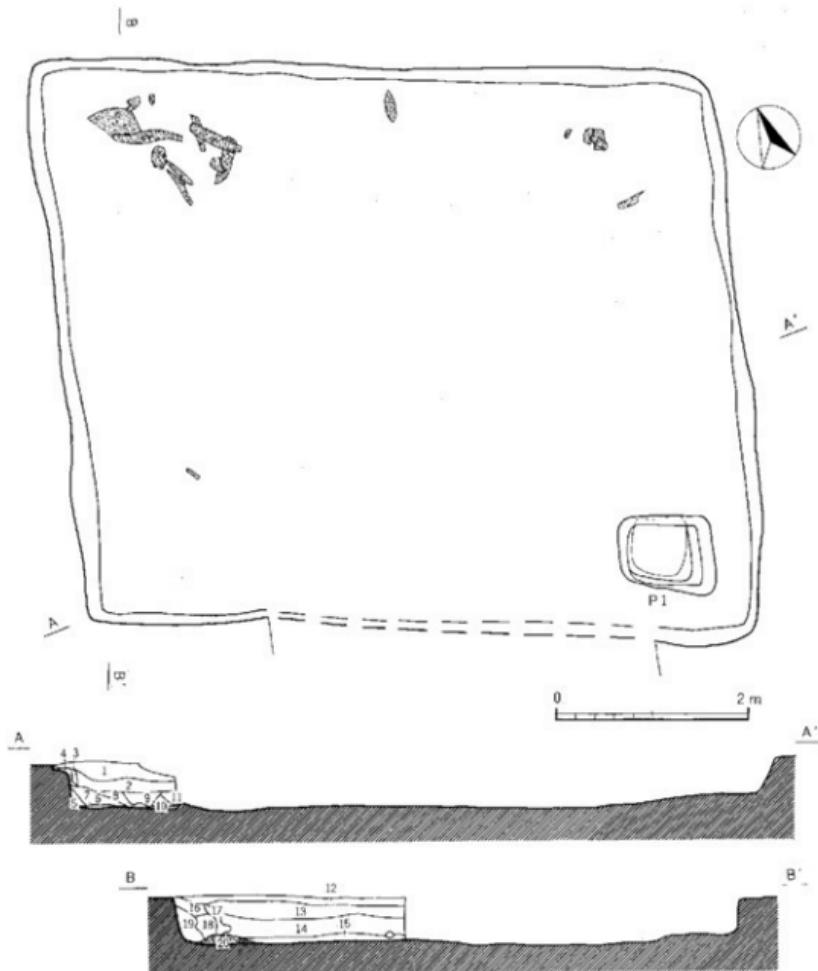


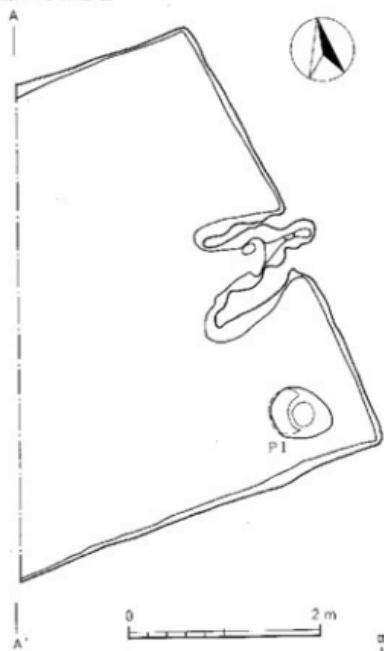
図21 34号住居址出土遺物



1. 暗褐色土層 10Y R % 砂質土 F P 10%。
 2. 黒褐色土層 10Y R % 砂質土 F P 7%。
 3. 塔褐色土層 10Y R % 黏性あり。
 4. 黄褐色土層 10Y R % 粘質土ローム混入。
 5. にぶい黄褐色土層 10Y R % 粘質土。
 6. 黑褐色土層 10Y R % 黏性あり。
 7. にぶい黄褐色土層 10Y R % 黏性つよい。
 8. 黄褐色土層 10Y R % 黏性強い。
 9. 黑褐色土層 10Y R % 黏性あり。
 10. 黑褐色土層 10Y R % 黏性あり。
 11. 黑褐色土層 10Y R % 10層と同質。
 12. オリーブ黒褐色土層 7.5 Y %。
 13. オリーブ黒褐色土層 5 Y % 粗砂。
 14. オリーブ黒褐色土層 5 Y % 黏性あり。
 15. 赤黒褐色土層 2.5 Y % 黏性あり。
 16. 黑褐色土層 2.5 Y % やや粘性あり。
 17. 黑褐色土層 2.5 Y % やや粘性あり。
 18. 黑褐色土層 2.5 Y % 黏性あり。
 19. 赤黒褐色土層 10R % 黏性あり。
 20. 焙化物。

図22 34号住居址とかまど

第31号住居址



第1層 黒褐色土層 2.5Y 3/6 細砂、
粘性なし、しまりあり。鉄石
塊土をわずかに含む。

第2層 褐色土層 7.5Y R 3/6 細砂、
粘性なし、しまりあり。焼土
灰を多く含む。

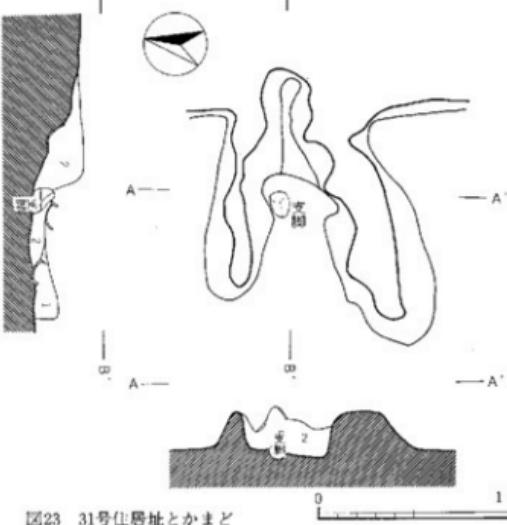
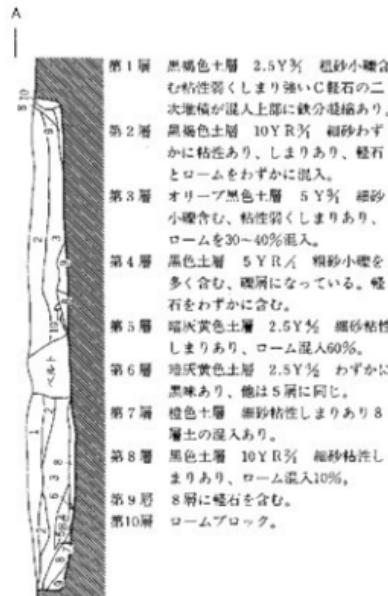


図23 31号住居址とかまど

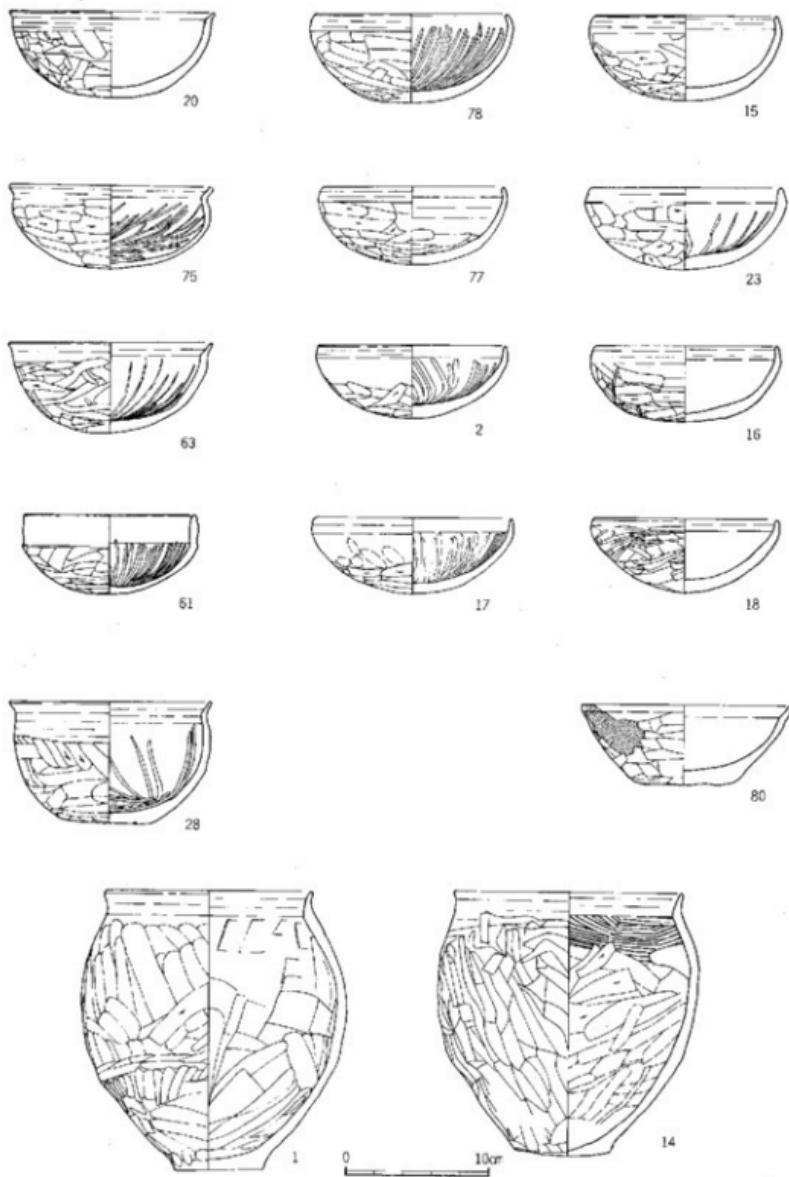


图24 31号住居址 出土遗物

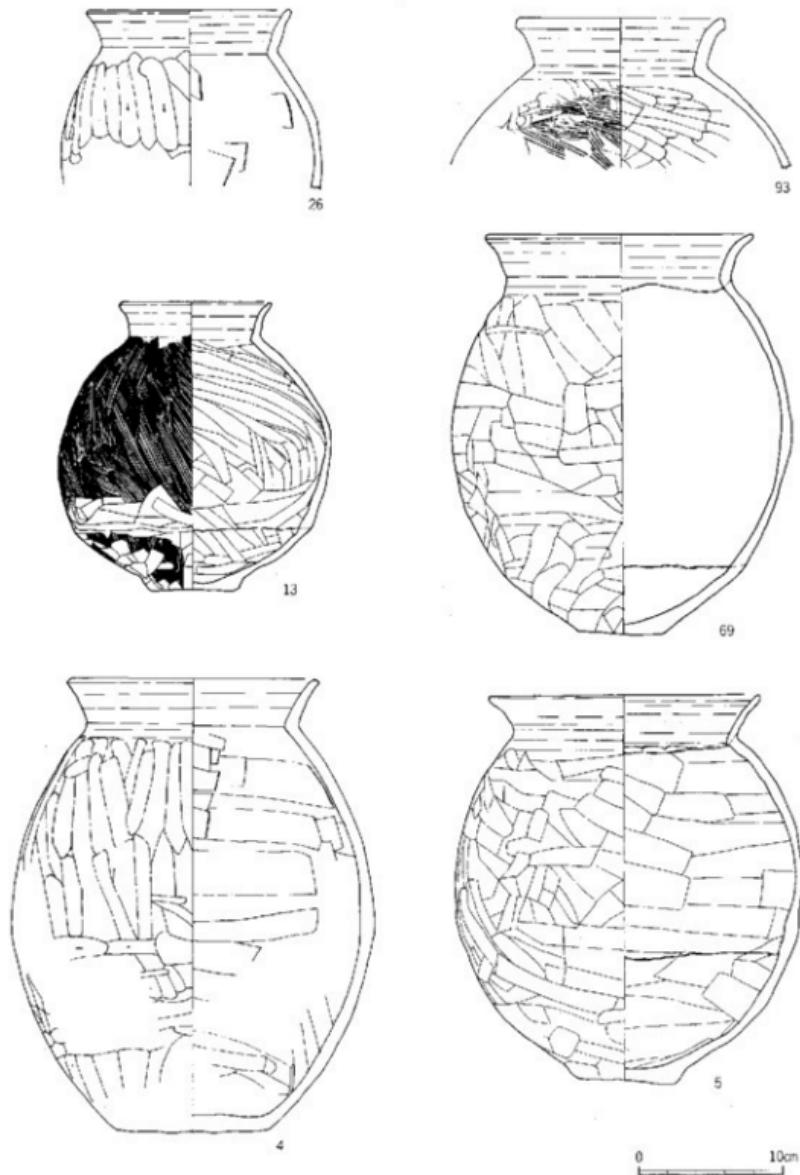


图25 31号住居址 出土遗物

遺構 遺跡北端4-13グリッドに存在する竪穴住居址である。よこ長の長方形と思われるが、西側が調査地区外にあり完掘できなかった。周溝は検出されなかつたが、南東隅に貯蔵穴を検出、66×52cm深さ58cm、西側に40cmのテラスが存在。主軸はN-80°-Eである。覆土は3層、壁高は50cmを確認、平均79°で、しっかりした形で検出。ほぼ造られた壇に近い。床面は平坦である。

かまど 東壁中央で住居主軸と同じ方向である。残存は悪く支脚が検出したくらい。全長1m45cm全幅1m20cmで煙道をほんのわずか住居外に造り出している。

遺物出土状況 かまと内外から环を中心にして多量に重なって出土している。写真参照。

出土遺物 塚5环9甕8が出ており、いずれも鬼高I式に含まれる器形であるが、No.1、13、80は東北の系統を引いているように思われる。

奈良・平安時代

第23号住居址

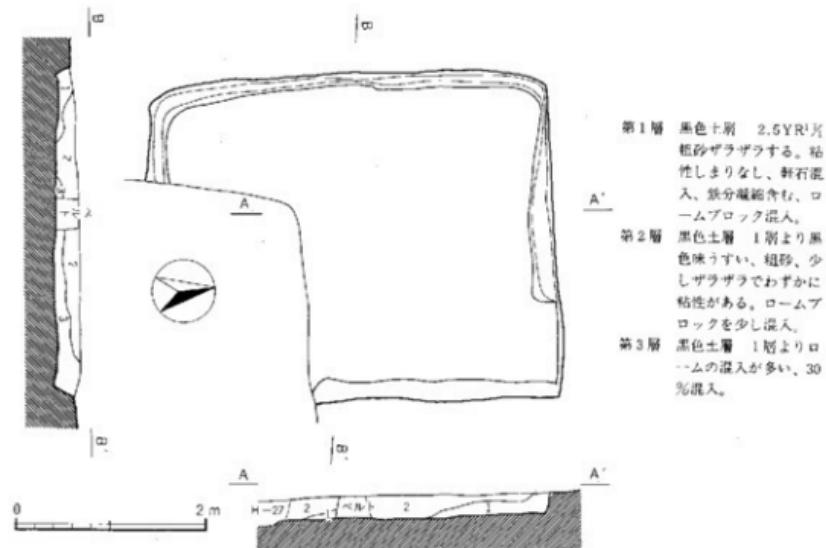


図26 23号住居址

遺構 調査区南部47-12グリッドに位置する。たて長の長方形と推定。長軸4.3m短軸3.48m、面積約14m²。周溝は北壁の一部を除き調査部分では全周。幅20cm深さ5cm。主軸方位はN-95°-E。土層は基本的に2層。確認壁高20cm推定壁高30cm。壁平均角81°。床面は平坦。

かまど H-27に掘り取られた部分に存在したと思われる。

出土遺物 3环(盤状)。遺物などから時期は真間期。H-27により切られていた。

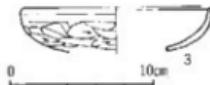


図27 23号住居址出土遺物

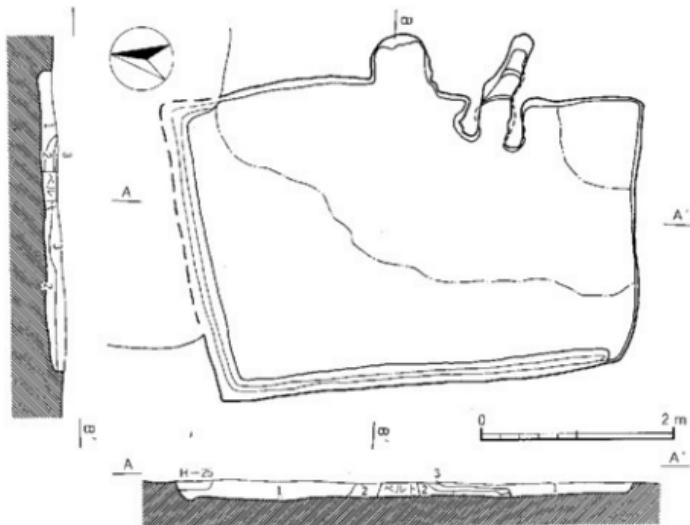
第24号住居址

造構 調査区南部46-13グリッドに位置。縦長で四辺の長さが異なる四辺形。北壁と北東隅をH-25に切られる。かまどは造りかえている。長軸5.02m、短軸3.34m面積14.71m²。周溝は北壁と西壁で検出。幅15cm深さ5cm。主軸方位はN-86°E。この付近の土壤の中には鉄分が多く含まれるが、流水による堆積か。確認壁高10cm推定壁高20cm。壁角度73°。床面は平坦。

かまど 東壁中央のかまどをやや南につけかえた。北は向きも住居と同じ。南は3:1で南より。主軸はN-109°Eである。南は全長106cm全幅62cmで燃焼部の一部と煙道部を住居外に造り出す。

遺物出土状態 住居址中央部分に遺物分布が集中している。

出土遺物 7・8須恵瓦(底部南多摩M-1号・8世紀第1四半期)。他に須恵。本住居址の時期は真間期。



第1層 黄灰色土層 2.5Y 4/6 粗砂しまり弱い。ロームブロック30%含む、鉄分混入10%混入。
第2層 黒褐色土層 2.5Y 3/6 粗砂粘性しまり弱い。ロームブロック5%鉄分混入10%混入。
第3層 黒褐色土層 2.5Y 4/6 粗砂粘性しまり弱い。鉄分混入50~60%混入。

図28 24号住居址

第25号住居址

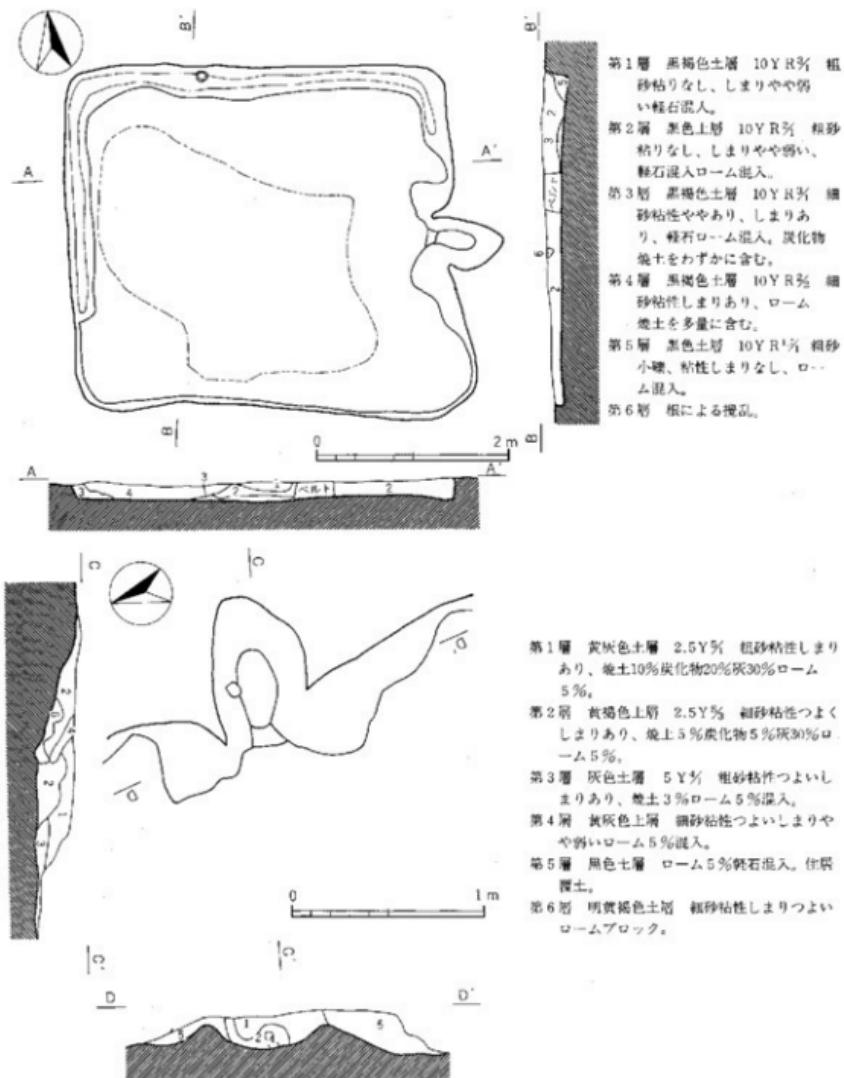


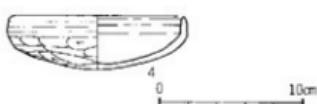
図29 25号住居址

遺構 調査区南部45-13グリッドに位置。長軸4.36m短軸3.70m面積13.56m²。周溝は北壁から西壁にかけて検出。幅20~25cm深さ2~3cm。主軸方位N-93°E。推定壁高30cm。床中央部堅織。

かまど 東壁中央に位置。主軸N-93°E。焼口部以外は住居外にある。煙道部は削平のためか検出されず。全長100cm、全幅120cm。支脚に用いられた石1個を検出。

遺物出土状態 住居址全体に少數分布。南壁中央付近に石数個検出。

出土遺物 4・13・14坪、2須恵器部が出土。時期は8世紀で、真間期に属する。本住居址はH-24を切って造られている。



第27号住居址

遺構 調査区南部13-47グリッドに位置する。平面の形状はたて長で西壁が短い。長軸4.34m短軸3.2m面積12.54m²。柱穴なし。周溝は南壁、西壁の一部を除くほかで検出。幅10~15cm深さ3~4cm。貯蔵穴なし、主軸方位N-100°E。土層は5層。確認壁高40cm推定壁高45cm、壁の平均傾斜角度は73°をはかり、しっかりしたようである。床面の状況は、平坦である。

かまど 東壁2:1の割合で南よりの位置に造り付けられている。主軸方位はN-96°Eで住居より5°北に向いている。両袖、天井ともほぼ残り、非常によい残存状態で、大部分を住居外に造り出している。また、煙道出口についてもほぼ使用状況のまま検出された。全長は145cm全幅は125cmである。また、構築材として石は特別に使っていなかったようである。支脚も検出されなかつた。

遺物出土状態 住居址全体に分布していた。

出土遺物 40、51、59鉢・3、5坪・6須恵蓋・10須恵環・28須恵蓋・63須恵環が出土している。住居址の時期は、7世紀末~8世紀で、相対編年の真間期に属する。これは、上記列挙した遺物などから判定された。また、重複関係では、H-22、H-23号住居址を切って造られている。

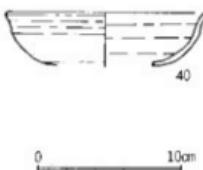
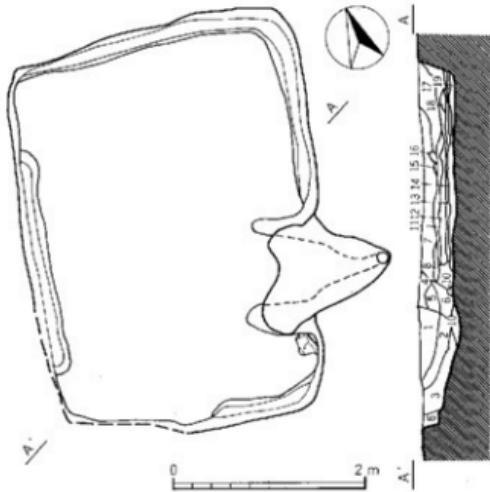


図31 27号住居址 出土遺物



20. 橙色土層 10Y R 5% 細砂白色粘土15%混入。
 21. 暗褐色土層 10Y R 5% かまど天井部でかい。
 22. 黑褐色土層 10Y R 5% 粗砂粘性なし軽石15%。
 23. 黑褐色土層 10Y R 5% 灰褐色土炭化物の混土層。
 24. 黑色土層 10Y R 5% 細砂粘性しまりやあり。

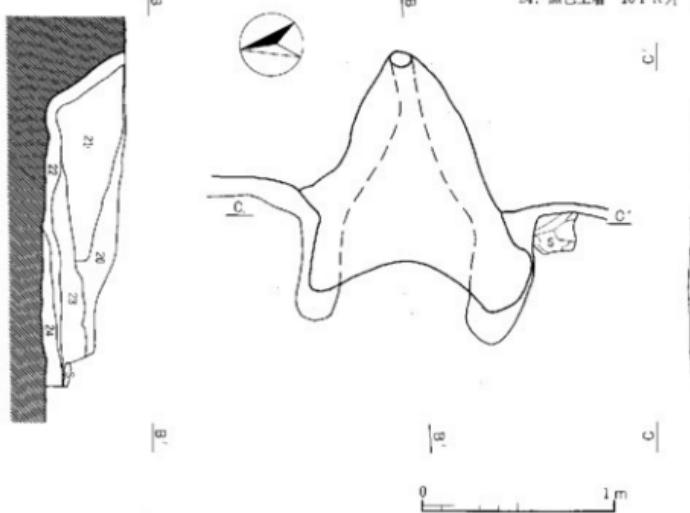


図32 27号住居址とかまど

第36号住居址

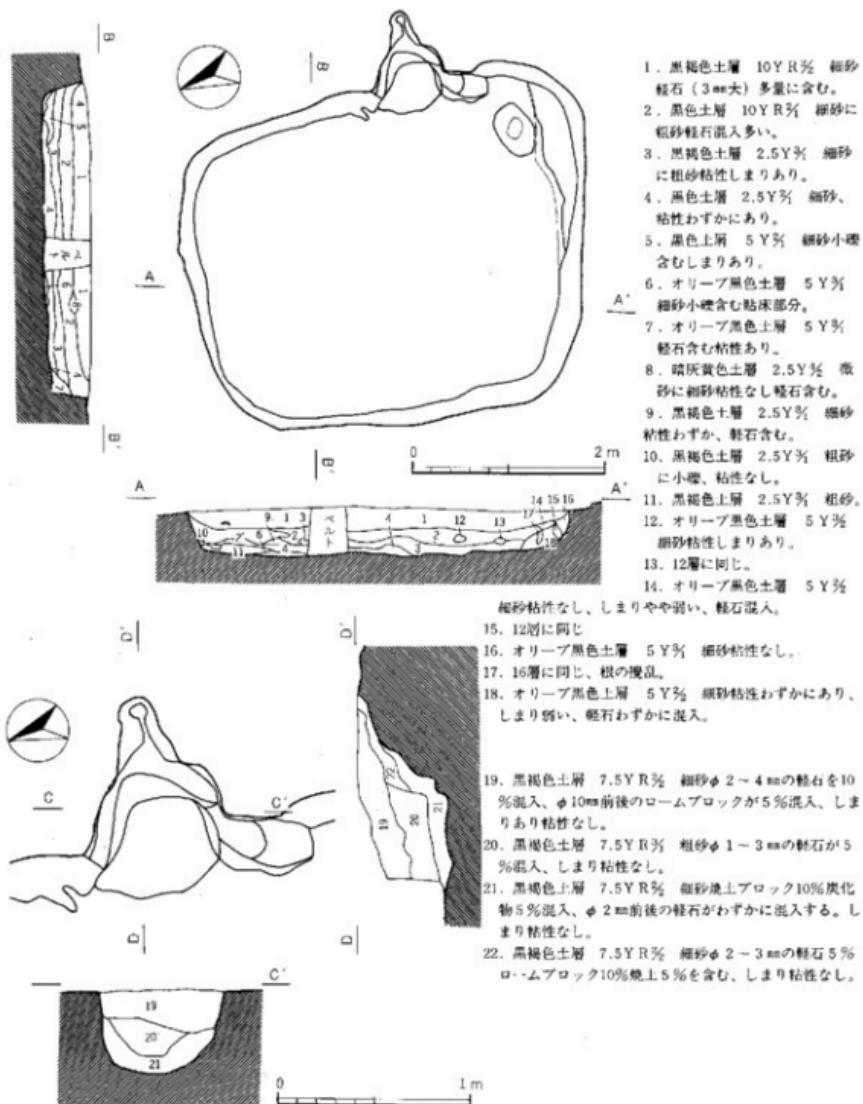


図33 36号住居址とかまど

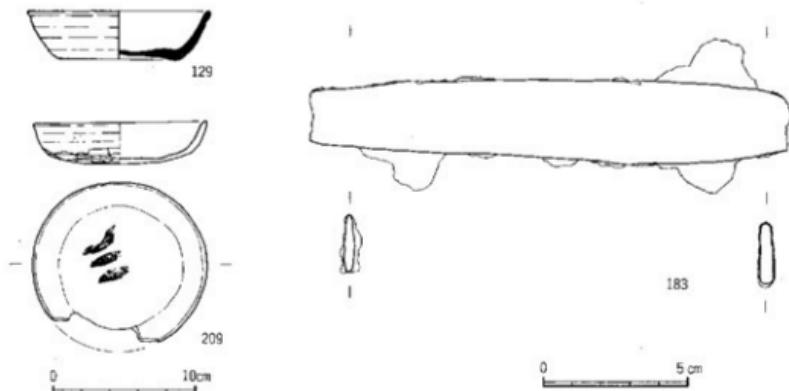


図34 36号住居址出土遺物

遺構 調査区中央17-19グリッドに位置。たて長の隅丸方形。やや不定形に近い。長軸4.32m、短軸3.72m面積13.51m²。柱穴なし。周溝なし。貯蔵穴は南東隅58cm×42cm深さ22cmでだ円形。主軸方位N-103°-E。上層の基本は4層。確認壁高50cm推定壁高50cm。平均傾斜角74°。貼床あり。
かまと 東壁の3:2でやや南よりに位置。主軸N-96°-E。袖を壁につけ大部分を外に造り出す。残存状態は比較的良好。支脚は検出されなかった。全長105cm全幅90cm。

遺物出土状態 かまと付近に密集。床上20~30cmで183刀子、129,209环・120須恵蓋など検出。

出土遺物 床直上で実測可能なものはない。上記のほかに202甕・100須恵高环などが出土。時期は7世紀末~8世紀。相対編年真間期に属す。

第37号住居址

遺構 遺跡東端18-19グリッドに34号42号住居址と重複して検出された竪穴住居址。たて長の長方形で、寸法は5.66m×4.52m、面積は約24m²と推定した。柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。主軸方位はN-100°-Eである。37号住居址とほぼ重なって42号住居址が造られており、床面上の土のみを検出。確認壁高は50cm、南側は地山でしっかりした形で検出。他は34号の覆土であり、崩れている所がある。床面は42号の床と交錯しているため、検出は困難であった。

かまと 東壁南3:2で南よりの位置に造られている。主軸はN-106°-Eで住居より6°南より。袖石が東壁につき、大部分を住居外に造り出している。全長1m34cm、全幅80cm、残存状態は比較的良好。

遺物出土状態 床面上のものだけで、覆土のものは、重複で存在しない。

遺物 須恵蓋2、环3、土師环2が出土、8世紀頃のものである。真間期と判定した。

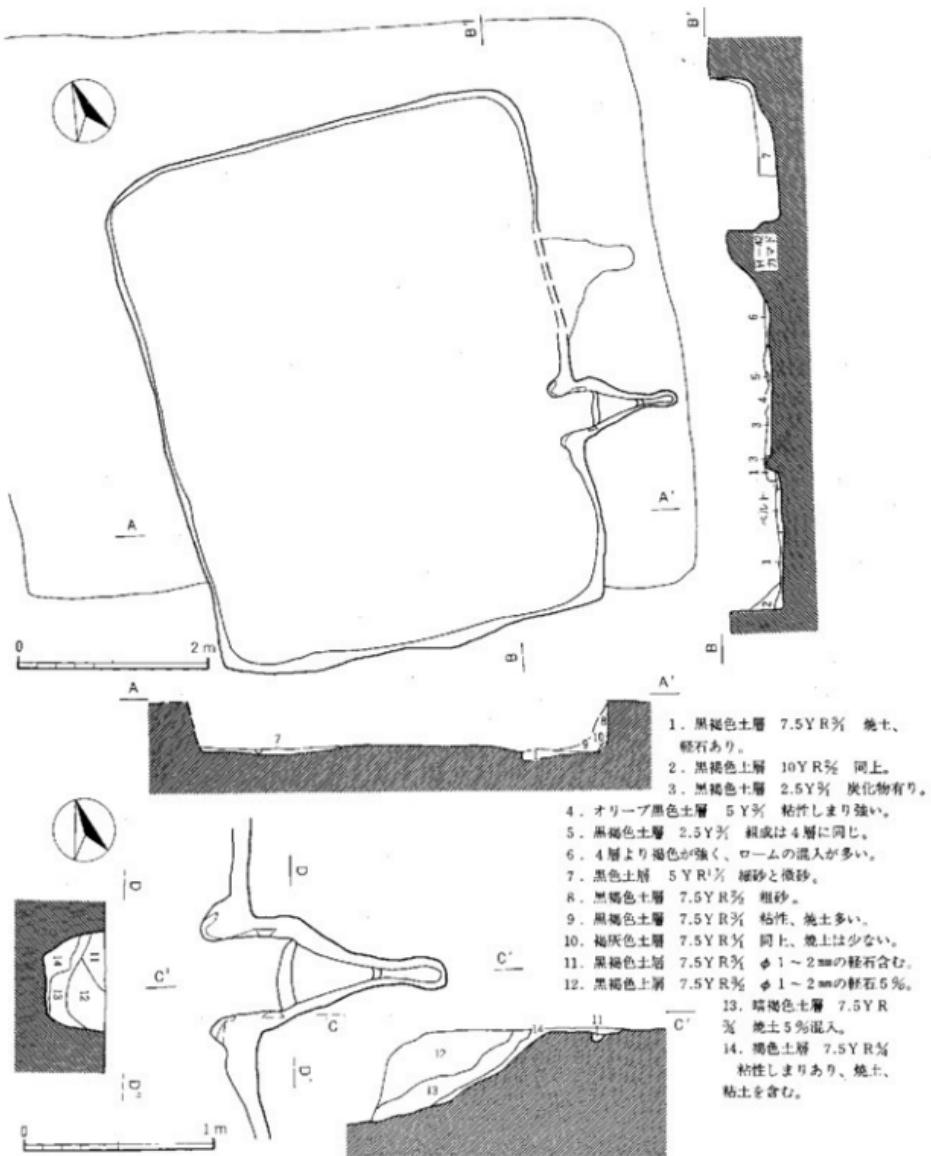


図35 37号住居址

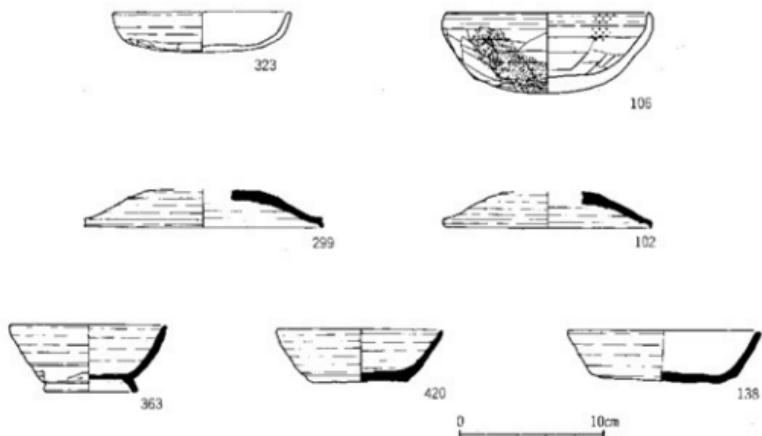


図36 37号住居址 出土遺物

第42号住居址

遺構 遺跡東端18-19グリッドに存在する竪穴住居址である。和泉期の34号住居址、真間期の37号住居址の重複の上に、更に重ねて造られている。土層から見ると、それぞれ、前の住居が土砂の堆積により完全に埋まってから、造られているようで、壁や床との間に覆土を残している。本住居址と直前の37号住居址との間では、床から壁にかけて薄く37号の覆土が残っている。37号の竪穴をほとんどそのまま使用した上に、西壁北半分を西に70cmほど張り出して造られていた。柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。寸法は、長軸5.88m 短軸4.98mで、面積は約24m²と推定した。主軸はN-104°-Eである。覆土は基本的には4層でレンズ状に堆積している様子が見られた。壁は確認壁高が50cmで、ほぼ造られた当時の高さに近いものと思われる。37号と同じく、地中で造られていない部分については、崩れ落ちている所が見られた。

かまど 東壁北より1:2の位置に造られている。かまど主軸は住居主軸と同一である。袖を壁につけ大部分を住居外に張り出している。石は使っていなかったようである。残存状態は良好である。全長1.2m、全幅1m、焚口部幅35cm、燃焼部幅30cmで、焚口から燃焼部の長さは75cm、煙道部は幅10cm、長さ40cmである。支脚は検出されなかった。

遺物出土状態 床面に近いところに各住居址の遺物が

混在して検出され、出土レベル、位置を考えて所属住居址を決定した。

遺物 実測できたものは、No10の鉢であり、8世紀末～9世紀にかけての圓分1式と判定した。

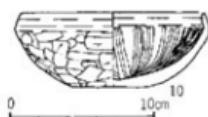
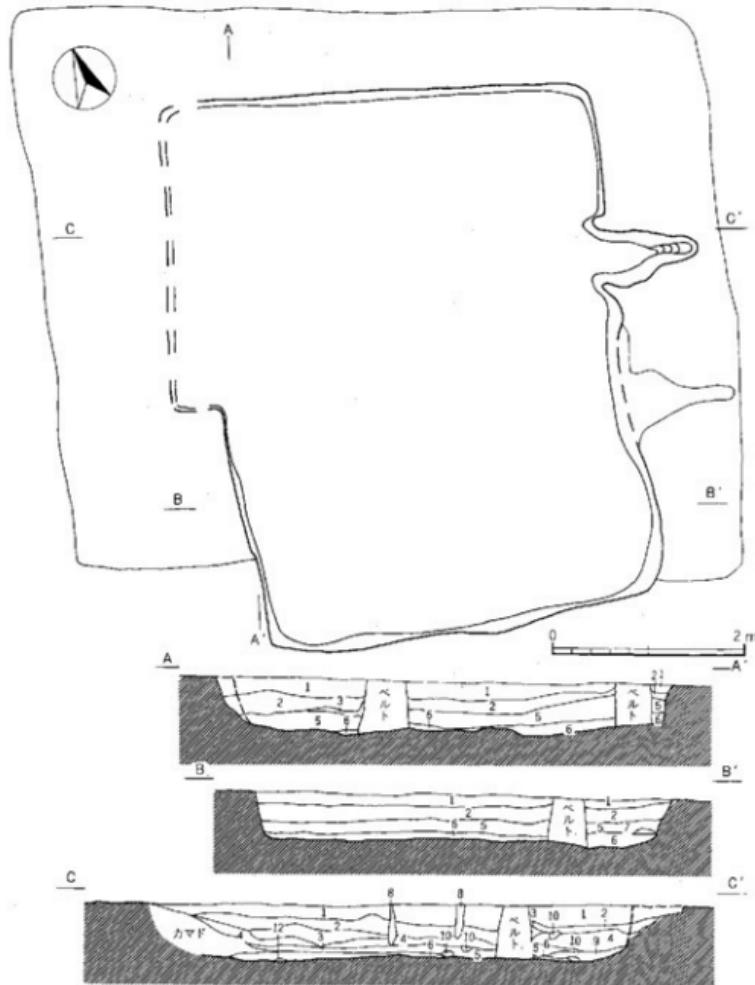
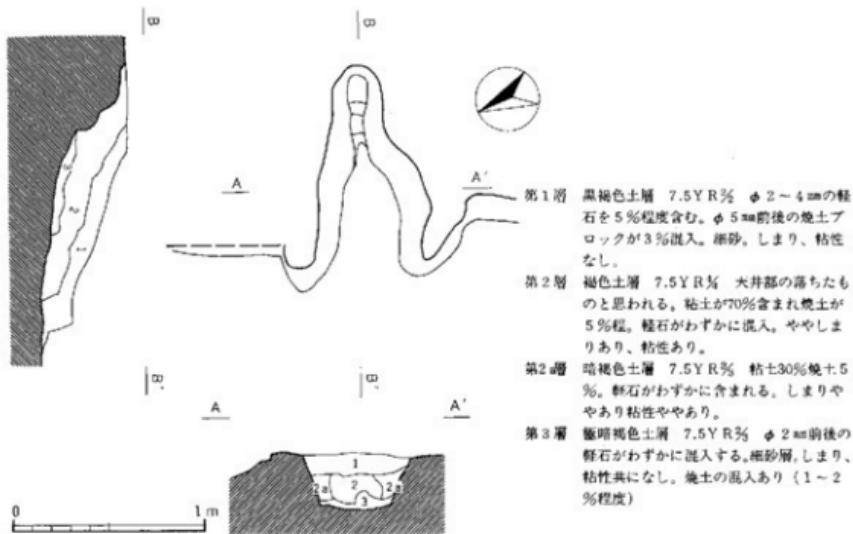


図37 42号住居址出土遺物

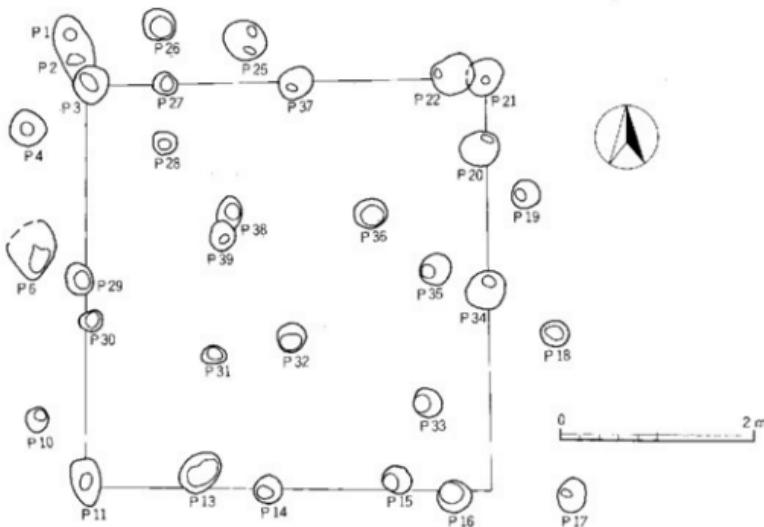


1. 黒色土層 7.5YR 4/6 軽石、灰、燒土の小さいブロック。小礫を含む。
 2. 黒色土層 2.5YR 4/6 粘性しまりあり。軽石を多量に混入。燒土を僅かに含む。炭化物も混入。
 3. 黒色土層 7.5YR 4/6 軽石を多く含む粘質細砂。燒土を含む。
 4. オリーブ黒色 5 YR 4/6 軽石を混入する粘性しまりのある細砂。
 5. 赤黒色土層 2.5Y R 4/6 軽石、燒土を含むしまりのある粘質細砂。
 6. 黒色土層 5 YR 4/6 軽石混入。ローム40%混入。燒土とロームが層状に構成されている。
 7. 黒色土層 5 YR 4/6 軽石とロームをわずかに混入する細砂と微砂、しまり弱い。
 8. 根による擾乱。
 9. オリーブ黒色土層 5 YR 4/6 軽石とロームを混入する粗砂。
 10. ロームブロック。

図38 42号住居址



掘立柱建物跡



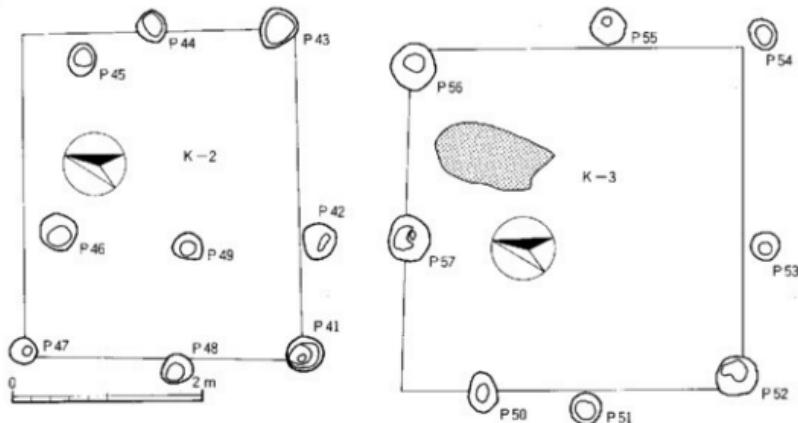


図41 2号・3号掘立柱建物跡

本遺跡内で、掘立柱建物跡は3棟確認された。1号掘立柱建物跡の近くは、柱穴が密集しており、建て替えが予想されたが、具体的な様子はつかめなかった。1号は、8本構成の内7本を確認、覆土中にすべて焼土を含んでいる。遺物から古墳時代のものと判定、2号は9本柱の倉庫らしく、遺物から真間期まで下りそうである。3号は、8本の住居らしく、北東部分に炉らしいものがあったが、この建物につくかどうかについては、確認できなかった。

その他の遺構

湯気遺跡には、これまであげた竪穴住居址、掘立柱建物跡のほかに、ピット、土坑、溝、井戸が検出されている。

ピットは、1号・2号掘立柱建物跡の付近に集中していた。柵列を予想させる短かい連続のピットが検出されたが、範囲がせまく、確認できなかった。

土坑は、溝にそう形で検出された。覆土は、溝と同じで、縄文の遺物、石が入りこんでいる様子や、砂が多量に入りこんでいることから、流水による流れこみと考えられる。

溝は、遺跡地中央を北西から南東にかけて通っているもの他に、遺跡地東を北から南へ横切るもののが、東へ入れた小トレンチによって確認されている。東側の河川に平行して流れていたもので、すでに河岸部分に入っていることから、河川の変流のあとかもしれない。また西側にも、南北にはしる溝が検出された。深さ30~40cmほどの浅いもので、比較的新しいものようであった。

井戸は、遺跡やや北に検出された。自然石が大量に入っており、使用中止後、廃棄に際し、投げ入れられたものと考えた。

まとめ

遺構について

この遺跡の遺構でまず考えなくてはならない点は、26号と29号の住居址である。出土遺物の形態、共伴の須恵器の編年から考えて、和泉期の末期に位置づけたものであるが、かまどが石などを使い非常にしっかりと造られている。これは、この時期になると、どの住居もこのようにしっかりとしたかまどを造るようになるのか、あるいは、この2軒が比較的大型であり、特殊な祭祀のための石製模造品が出土していることを考えあわせて、特殊な例なのか、もう少し事例が増えることで明解される点であろう。58年度調査の7号住居址は、鬼高I式土器を伴出しながらも、かまどがない点も考えあわせなくてはならないだろう。7号住居址は、小規模な住居であるという点を考慮しても、かまどの発生を考える上で、須恵器の共伴とあわせて注意したい。

2点目は、弥生時代28号住居址における、焼失住居という点、ベッド状遺構を持つという点である。弥生時代の住居址に焼失住居が多いということは、今までいわれていることではあるが、58年とあわせ、3軒の検出住居中2軒という数が多いように思われる。58年度調査の弥生時代の1号2号は、河川をはさんで東にある点、集落構成についても考えあわせなくてはならないだろう。ベッド状遺構については、遺構内における使われ方や、ベッド状遺構を持つ住居址の性格についても、これまで述べられてきているものだが、数少ない資料であり、結論を引き出すことはできない。しかし、この住居址では、中央が生活空間で作業の場、周囲が寝所、物を置く所と考えておきたい。南壁中央部内側は入り口部分にあてられるだろう。

3点目は、遺跡東端における、竪穴住居址3軒の重複である。これは、検出状況の中で、37号と42号住居址は、同じ竪穴部分を重複して使用しており、地山まで掘り出すことなく、前の住居址の覆土を掘るだけで壁面を造っており、覆土と壁面の土の差は、ほとんど感じられないほどであった。かまどは、そのような土であるため、粘土を充分使用して、しっかりと造られていた。

遺構の広がりを4点目として考えてみると、南北の道路部分は、東の川へ落ちこむ台地の東側のへりにあたっており、集落の東側の住居址が姿を表した形となっている。

時代的には、弥生、古墳、奈良・平安と異った時代のものが、混在しており、調査区西側に集落が同じく重なって存在しているものと考えられた。

遺跡地西は、現在、住宅地と桑畑となっているが、南東傾斜、川にのぞむ位置などを考えあわせると、集落の立地には、最適の地であったことが言える。

遺物について

遺物についてまず触れてはならない点は、26号住居址と29号住居址の遺物である。和泉式の様相と鬼高I式の様相があり、住居形態とも考えあわせ判断にまよったところではあるが、出土位置を考えあわせ、和泉式としたものである。29号住居址出土No.529の耳口縁は複型あるいは小型縁のものと見られ、5世紀後半から6世紀に位置づけられよう。TK208か。26号住居址からは、No.84剣形石製模造品が床面直上より出土している。この住居の性格を考える上で落せい遺物といえよう。同じ26号住居址出土No.157尖頭器については、縄文時代の項で述べた。

以上、26、29号住居址は、赤城南面の和泉式土器の編年を考えいく上で欠くことのできない資料となろう。

次に、26号住居址出土No.16の鉢、31号住居址出土のNo.1壺、No.13壺、No.80の杯の形態に注目したい。No.1壺、No.13壺は圓版で見ていただくと判るように底部と体部を分離して造り、接合痕をはっきり残しその上下で形が変っている器形である。これは、鬼高期の住居址出土^(注2)遺物の中で時々見つかるものであるが、これは福島県舞台遺跡出土土器を標式土器とする舞台式土器ではないかと考えている。接合痕を境に形が大きく変るこの2点を、これから検討の資料として提示したい。

また、No.80の杯は、仙台市南小泉遺跡出土遺物を標式土器とする南小泉式土器に同形のものが^(注3)あり、同じく東北系と思われるNo.16の鉢とあわせ、東北地方との交流を考える資料となるのではないか。いずれも、鬼高併行のもので、舞台式は6世紀中葉から後半にかけての土器群と考えられている。

なお、30号住居址出土のNo.212の遺物は、和泉式土器群では考えられない器形と思われる所以今後類例をさがしていきたい。また同じ、30号住居址からは、手づくねも出土しており、この住居を考える上で、資料の1つとなろう。

参考文献

「陶邑」中村浩

「須恵器大成」田辺昭三

「弥生時代集落構造の一考察」—ベッド状遺構をもつ住居址を中心として— 黒野正也

小神明遺跡群 I・II・III発掘調査報告書（前橋市教育委員会）

芳賀東部団地遺跡発掘調査報告書第1巻（前橋市教育委員会）

(注1) 河野 真知郎 「初期農耕集落の解明 —ベッド状遺構の内検討—」1975

(注2) 玉川 一郎 「舞台遺跡」

(注3) 結城慎一・佐藤洋 「南小泉遺跡」仙台市教育委員会

九料遺跡

本遺跡は、勝沢町字九料に所在する。付図2の九料遺跡（北側）の遺構分布図の東側の3号住居址から15号住居址は、昭和58年度調査部分であるが、同一遺跡で、同一の集落を構成することから、今年度の分布図にのせたものである。今年度は、竪穴住居址40、掘立柱建物跡1、井戸2などを検出した。縄文時代4軒、古墳時代34軒、奈良平安時代2軒という内訳になり、掘立柱建物跡は、古墳時代に属する。調査地区北に江戸時代後期の墓があり、これについても調査を行った。古墳時代は各住居とも、非常に残存状態が良く、鬼高I式の遺物資料として、良好なものを記録にのこすことができた。基本層序は、昭和58年度調査「小神明遺跡群II発掘調査報告書」の項を参照してもらいたい。

縄文時代 第61号住居址

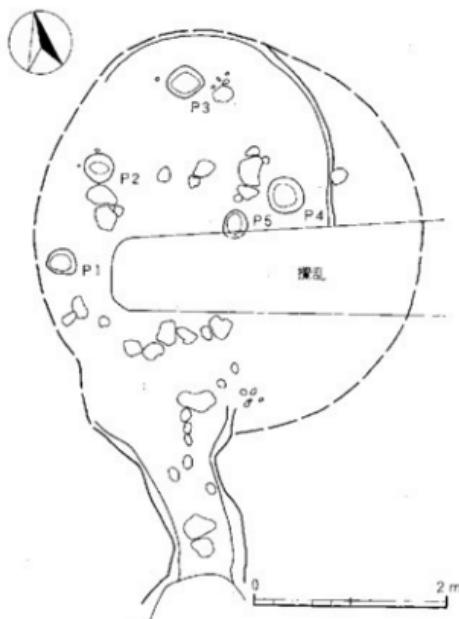


図42 61号住居址

遺構 調査区中央やや北②-(一) グリッドに位置する柄鏡形敷石住居址。柱穴は、不規則に5本確認。土層は床面直上まで耕作土が入る。確認壁高10cm推定壁高不明。壁は入り口付近と北壁で10cm確認。床面は一部攪乱。平らな石が敷いてあったと思われるが、大部分は抜かれている。

炉 予想される位置はかま掘りによる攪乱を受けている。

遺物出土状態 破片が数点検出されたのみ。本住居址の時期は縄文時代後期のものと考えられる。

第66号住居址

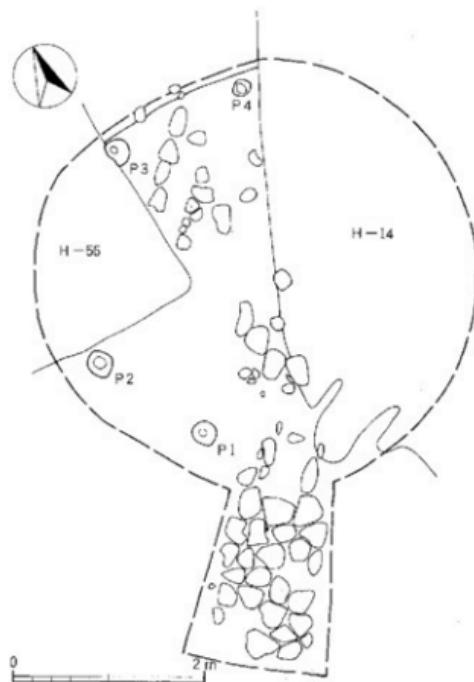


図43 66号住居址

遺構 調査区中央東側G-5グリッドに位置する柄鏡形敷石住居址。柱穴4本確認。上層は1層耕作の攪乱が床面まで入る。確認壁高10cm推定壁高不明。北壁の一部で壁確認。床面には平らな石が敷きつめてある。入り口部北に平らな石を立てて方型ピットが造られる。埋蔵施設か。

炉 検出できなかった。

遺物出土状態 住居址全体に50点の遺物が散らばっていた。

出土遺物 破片のみ。時期は縄文時代。東をH-14に、西をH-56に掘りとられている。

古墳時代
第47号住居址

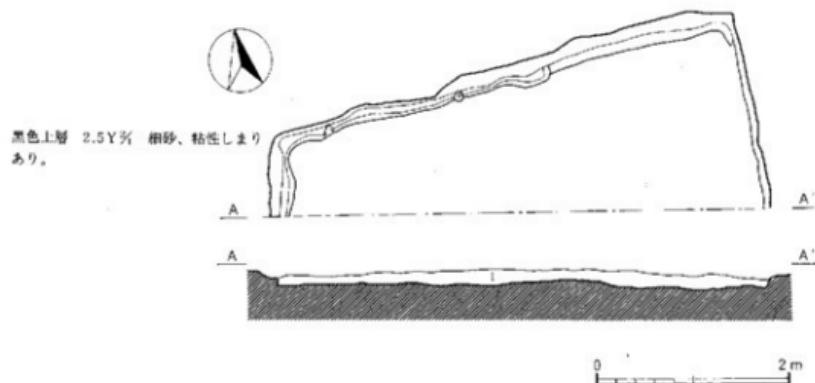


図44 47号住居址

遺構 調査区北東部⑤-4グリッドに位置。平面形状は△が調査地外のため不明だが方形と推定される。柱穴数4本と推定される。土層は1層検出したにとどまる。壁はロームを切り確認壁高20cm、推定壁高30~40cm。周溝は北壁中央から西壁に検出。床面は平坦。
かまど 東かまとと推定したにとどまる。

遺物出土状態 住居址全体に分布。

出土遺物 床面上直上は44杯。床上10cmは15・31・2・10・16杯が検出された。以上の遺物などがから本住居址の時期は相対編年の鬼高I式に属する。

第3号住居址

遺構 遺跡中央S-5グリッドに位置。長方形と思われるが、調査区外の部分が半分以上を占め、規模等については、確認不可。周溝、柱穴、貯蔵穴についても検出されていない。土層は基本的に5層。壁は58年度の北壁に統一、今年度、西壁と南西コーナーを検出した。80°平均でしっかりしている。床面は平坦だが全体的にやわらかい。貼床はなし。

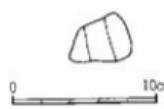
かまど 調査部分では検出されていない。

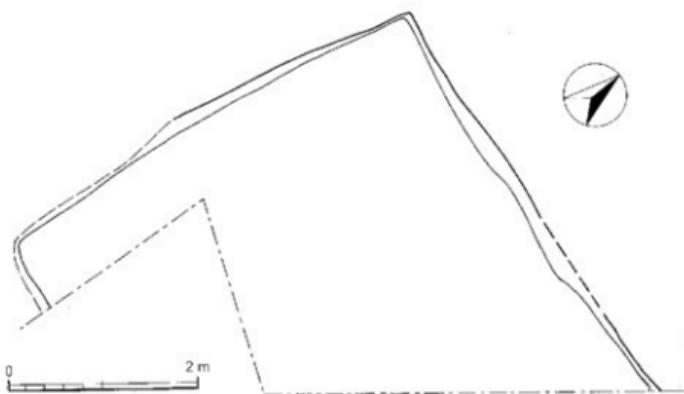
遺物出土状態 床面上直上から、甕、壺の口縁が出土したほか、覆土最上部から、硬玉大珠が出土している。

出土遺物 硬玉大珠は縄文時代の物、他は鬼高I式の土器である。 図46 3号住居址出土遺物



図45 47号住居址出土遺物





第45号住居址

遺構 調査区北部⑤-1グリッドに位置。正方形。長軸3.7m短軸3.68m面積13,495m²。柱穴は確認2本推定4本。周溝は幅10~15cm、深さ4~5cmで検出。貯蔵穴は長径68cm短径60cm、深さ54cmの楕円形。主軸方位N 104°E、推定壁高30~40cm。壁平均角66°。床面は平坦である。

かまど 東壁の3:2で南よりの位置にある。主軸方位N 105°E。右袖・煙道は良く残り、左袖は1/3程こわれていた。支脚と思われる石を検出。全長130cm全幅83cm。

出土遺物 150碗・149瓶・70・5环・29小甌。鬼高I式。土坑が住居を切っている。

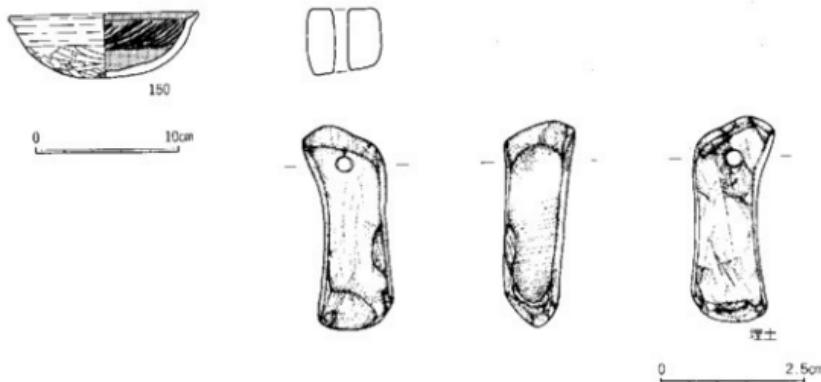


図48 45号住居址出土遺物

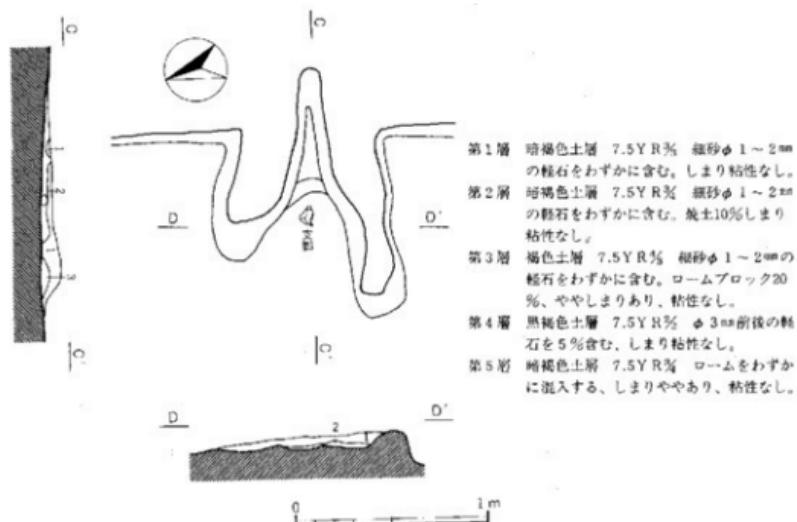
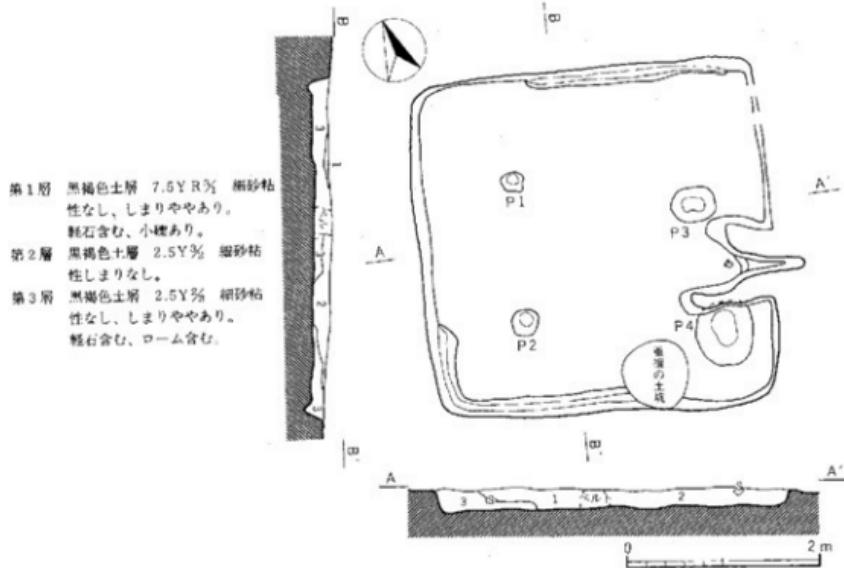


図49 45号住居址とかまど

第48号住居址

遺構 本住居址は、0-(−1)グリッドに位置する。平面形は横長の長方形で、かまどを北壁東寄りに持つ。規模は長袖9.88m、短袖7.52mであり、面積は約72m²を測る。南西隅は土坑と重複し、切りとられているが、各辺とも直線的に構成されている。南壁やや東寄りに張り出しピットを行する。主軸方位はN-7°-Wを指す。遺存状況は土塙に切られている部分を除いては、良好である。確認面からの壁高は、平均30cmで、壁の立ち上がり角度は73°である。床面は平坦で中央から南側張り出しピットにかけて、堅緻面が広がる。また東側中央に焼土が検出され、床面まで達していなかった。柱穴は8本検出され、P₁が貯蔵穴である。

かまど 北壁5:2で東寄りに位置し、主軸方位はN 22° Eで住居主軸より約30°東へ傾いている。残存状態は比較的良好く、両袖とともに検出できたが、焚口部天井石は、袖石より落ちて検出された。尚、このかまど燃焼部床面は、住居床面より約10cm高くなっていた。

遺物出土状態 出上遺物は小破片が多く、かまど周辺と張り出しピット付近に、集中がみられる。実測可能な遺物の中に、床面直上の遺物が6個体と少ない。

出土遺物 本住居址からの出土遺物は2476点と、非常に多い。実測個体数は、土師器壺9、塊4高壺5、甕3、須恵器小形壺1、鉄製品1の23個体である。器形から鬼高I式と判定した。

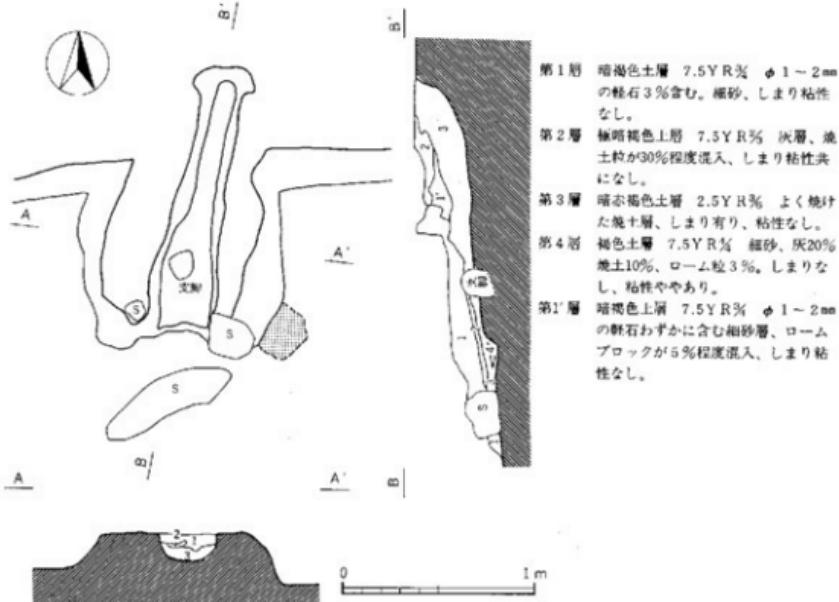
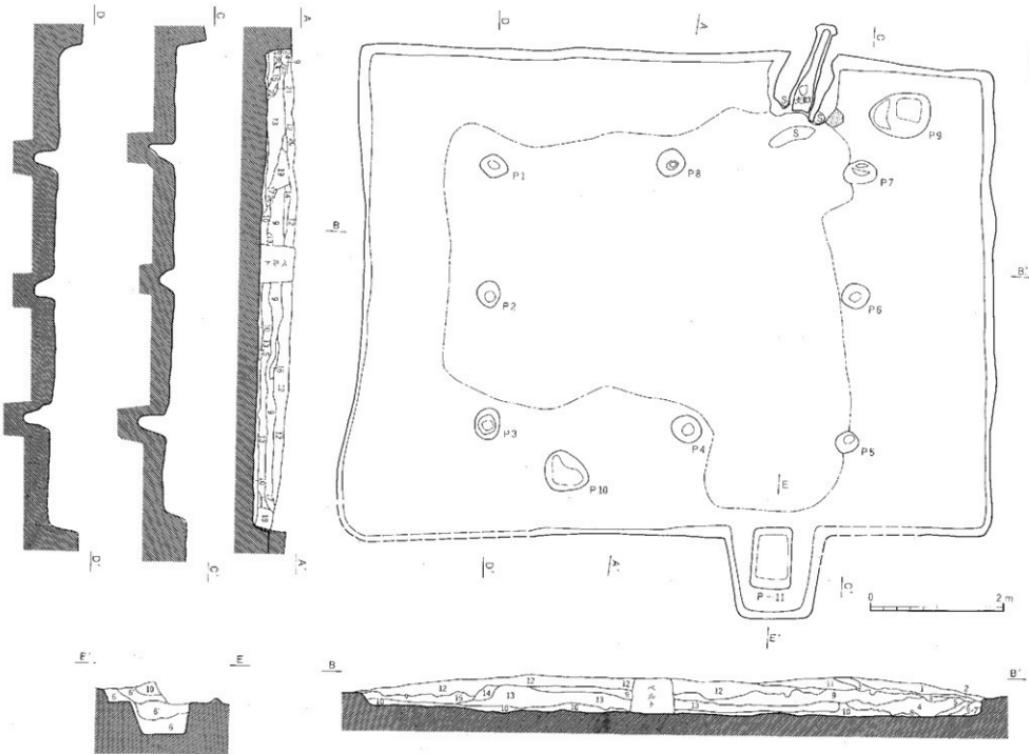


図50 48号住居址



1. 暗褐色土層 7.5Y R 5% しまりのない砂質土石粒5%含む。
 2. 黄褐色土層 7.5Y R 5% 粘りしまりのない砂質土、FA 1%
 3. 黒褐色土層 7.5Y R 5% 粘くしまりのある粘性土、砂粒5%。
 4. 暗褐色土層 7.5Y R 5% しまりのある砂質土、石粒5%。
 5. 暗褐色土層 7.5Y R 5% しまりのない砂質土、粘土わずか。
 6. 黑褐色土層 7.5Y R 5% しまりのない砂質土、FP 7%含む。
 7. 黑褐色土層 7.5Y R 5% しまりのない砂質土、FA ブロックあり。
 8. 暗褐色土層 10Y R 5% しまりのない砂質土。
 9. 黑褐色土層 7.5Y R 5% しまりのない砂質土、FA ブロック含む。
 10. 黑褐色土層 7.5Y R 5% しまり粘性のある砂質土、FP 1%含む。
 11. 暗褐色土層 7.5Y R 5% しまりのない砂質土、FP 2%含む。
 12. 黑褐色土層 7.5Y R 5% しまりなく粘性のある土。
 13. 棕褐色土層 7.5Y R 5% しまり粘性のあり、無石10%。
 14. 棕褐色土層 7.5Y R 5% しまりのない砂質土、FP 3%。
 15. 黑褐色土層 10Y R 5% しまりのない砂質土、FP 15%。
 16. 暗褐色土層 10Y R 5% しまり粘性のない砂質土。
 17. 棕褐色土層 10Y R 5% やや粘性のある砂質土、DA ブロック深入、FP 7%。
 18. 黑褐色土層 10Y R 5% しまり粘性なし、石粒3%含む。
 19. 棕褐色土層 10Y R 5% しまりのない砂質土、石粒含む。
 20. 黑褐色土層 10Y R 5% しまり粘性のない砂質土。
 21. 黑褐色土層 10Y R 5% しまり粘性のない砂質土。
 22. 暗褐色土層 10Y R 5% しまり粘性のない砂質土。
 23. 黑褐色土層 10Y R 5% しまり粘性の砂質土、砂土と灰を含む。
 24. にふい黄褐色土層 10Y R 5% 粘性しまりつよい。
 25. 黑褐色土層 7.5Y R 5% 粘性しまりなし、砂質 FP 15%含む。
 26. 暗褐色土層 10Y R 5% 固くしまった粘性土、FP 7%。
- 6... 6層よりやや茶色味があり、ローム10%混入。

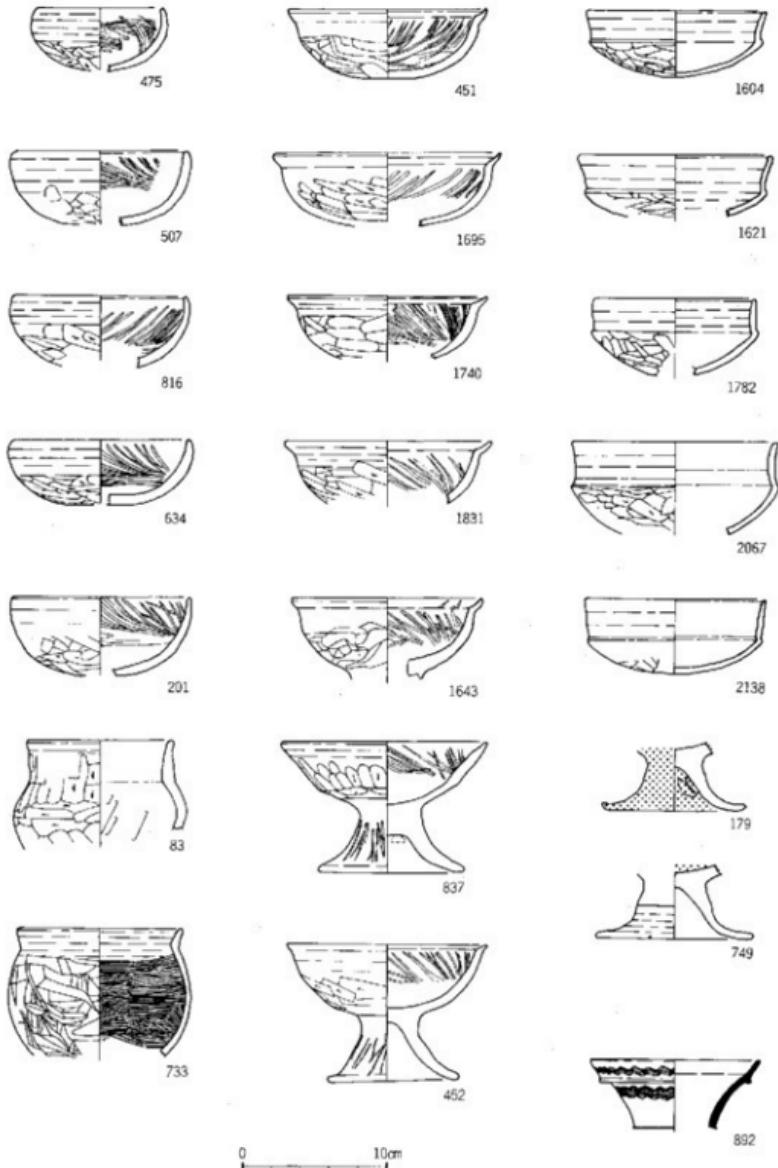


图52 48号住居址 出土遗物

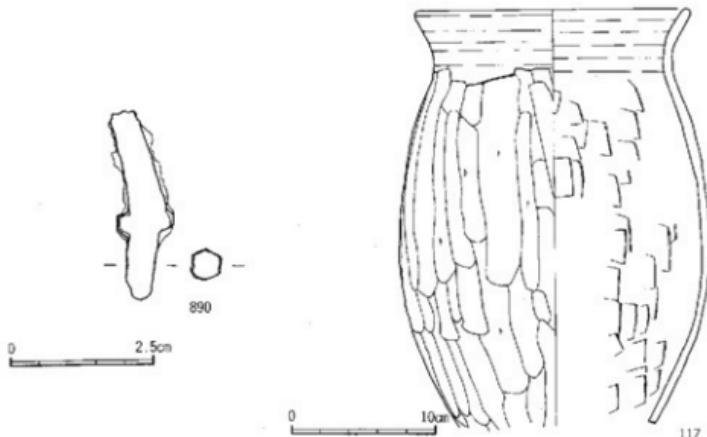


図53 48号住居址 出土遺物

第49号住居址

造構 遺跡北端⑨-(-3)グリッドに存在する竪穴住居址。耕作による削平をうけ、残存が悪い。規模はかまどを東壁中央において推定したもの。貯蔵穴が南東隅に $64 \times 66\text{cm}$ 、深さ30cmの円形で検出された。土層は耕作土が入りこんでいる状態。床面もでこぼこである。

かまど 東壁調査地区外にかかる部分で検出したため、完全な調査はできなかつた。

出土遺物 环2点、鬼高I式である。

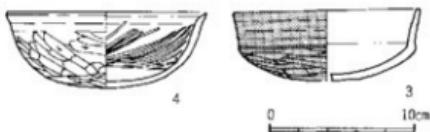


図54 49号住居址 出土遺物

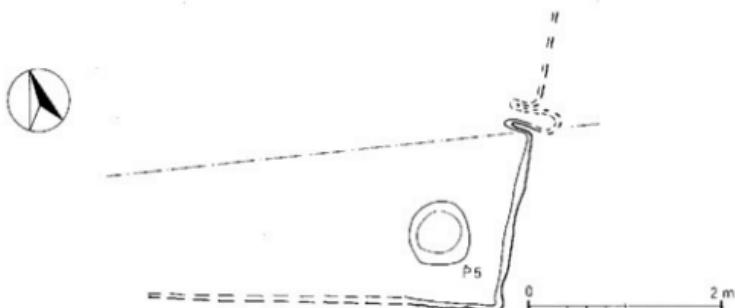


図55 49号住居址

第52号住居址

遺構 遺跡北A-5グリッドに存在する竪穴住居址、ほぼ正方形に近いと推定したが、北東と南東のコーナーが、調査地区境にあるため、規模等確定できない。南壁中央が、9号住居址を切っているはずであるが、確認できなかった。柱穴3本を確認、主軸は、ほぼN-79°-Eと推定した。覆土は2層であるが、中央から南東にかけて、工事の攪乱がはいっている。確認壁高は37cm、推定壁高は50cm、平均73°でしっかりしている。平坦でふみしめられた床面をもつ。

かまど 東壁で南によった位置で検出された。煙道が住居外に張り出しているだけのようである。住居主軸より南に向いている様子を、確認したにとどまる。

遺物出土状態 床直上、かまどの内部から遺物が出土している。北壁近くからNa93紡錘車が出土。

出土遺物 No126瓶の他环2、甕2、高环2が出土。鬼高I式に含まれる。

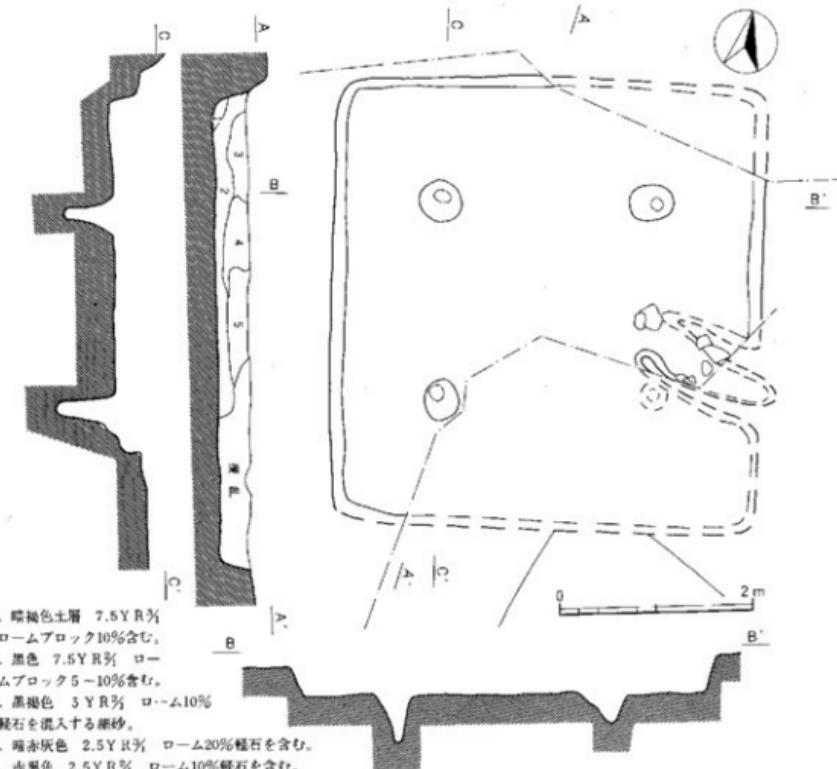


図56 52号住居址

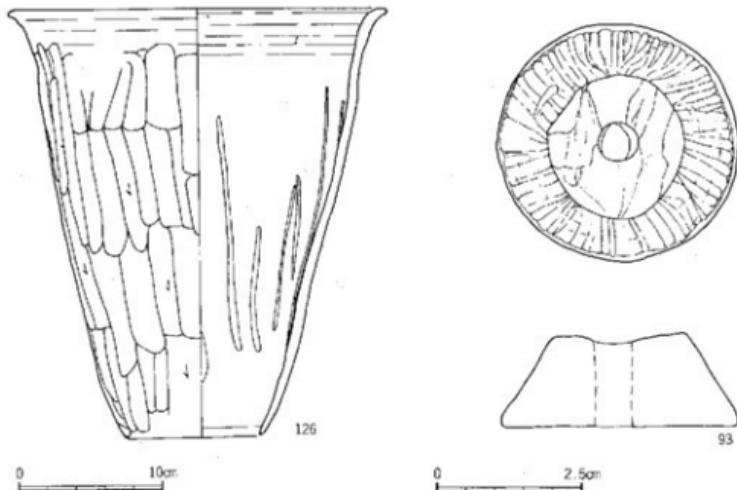


図57 52号住居址 出土遺物

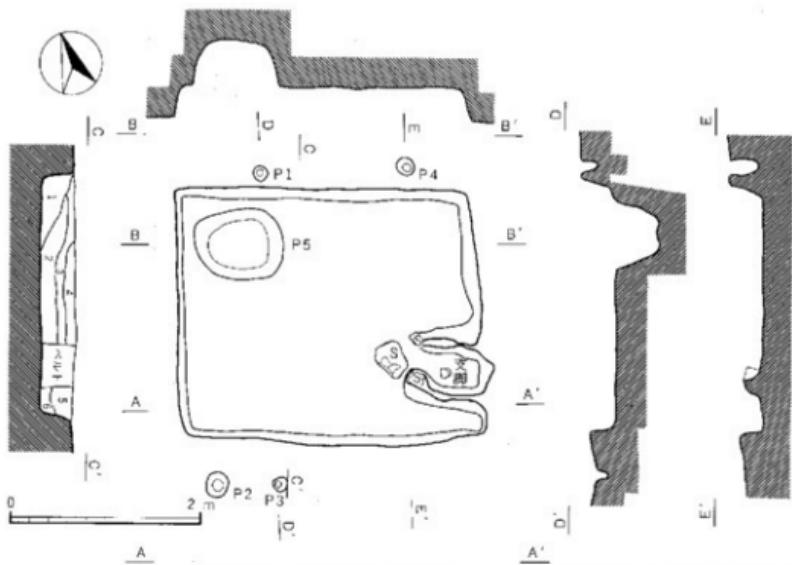
第53号住居址

遺構 本住居址は、D-3グリッドに位置する。平面形は東西に長い長方形で、かまどは東壁の南寄りに設置される。規模は長軸3.3m、短軸2.7mであり、面積は8.26m²を測る。主軸方位は、N-110°-Eを指す。遺存状況は良好である。確認面からの壁高は平均40cmで、壁の立ち上がり角度は平均80°でしっかりした形で検出された。床面は平坦で住居址全体に堅繊面が広がる。柱穴は住居外にP₁～P₃の3本が確認された。北面隅には貯蔵穴が梢円形を意識して掘り込まれている。本住居址は同時期のものにくらべ規模が小さく、西に隣接する同時期の54号住居址との関係で54号住居址の廻屋の役割を果していたのではないかと考えられる。

かまど 東壁南寄りに位置する。主軸方位はN-122°-Eで、住居主軸より12°南に傾く。残存状態は比較的良好で、左右両袖石と落ちてはいたが天井石、支脚も検出された。全長90cm、全幅100cmを測る。焚口部、燃焼部共に良く焼けていた。煙道部は削平されて検出できなかった。

遺物出土状態 かまどの周りと貯蔵穴付近に遺物の集中が見られる。1の壺は16片が接合されたものであり、かまど右袖と南壁の間の床面上直上に横倒しになっているところへ、上から圧力が加わって破壊された様相を呈していた。3の壺は南壁際中央の床面上直上より出土した。

出土遺物 本住居址からの出土遺物は56点と少なく、実測可能個体数は土師器壺1個体、瓶1個体の2個体で器形等から本住居址の遺物を総括的に見ると、鬼高I式といえる。



- A'
1. 黒色土層 10Y R 5% 細砂粘性しまりあり軽石混入ローム10%混入。
 2. 黒色土層 10Y R 5% 同上ローム20%。
 3. 黒色土層 10Y R 5% 同上ローム5%。
 4. 黒色土層 5Y R 5% 同上。
 5. 黑褐色土層 10Y R 5% 粘性ありしまり弱い、ローム5%軽石混入。
 6. 黒色土層 7.5Y R 5% 同上。

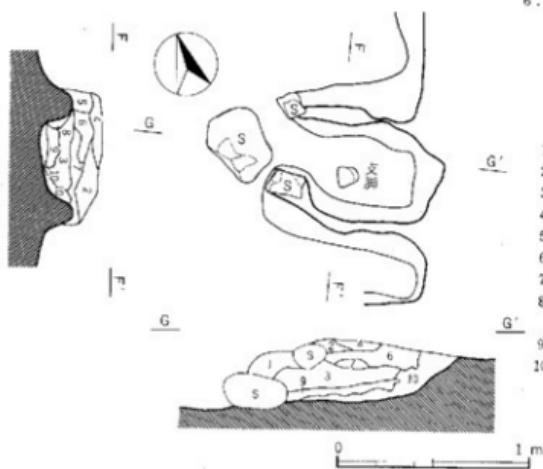


図58 53号住居址とかまど

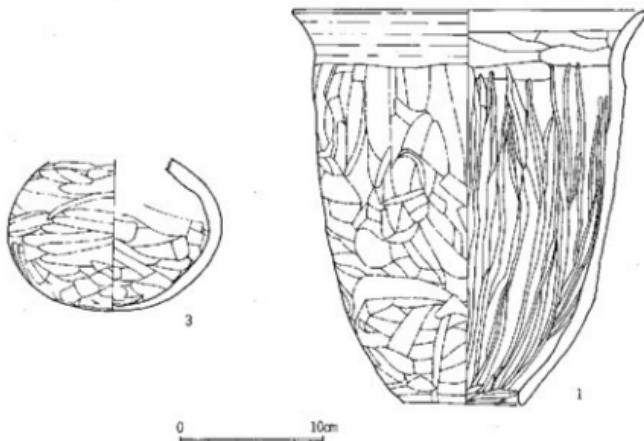


図59 53号住居址 出土遺物

第54号住居址

遺構 本住居址は、F-0 グリッドに位置する。平面形は平行四辺形に近い形で、6基の土坑と2号井戸に切られている。かまどは検出されなかった。規模は長軸7.4m、短軸6.6mであり、面積は約42m²を測る。主軸方位はN-76°-Eを指す。確認面からの壁高は平均20cmで、壁の立ち上がり角度は平均81°であった。床面は平坦であるが、南東側がやや高まっている。床面直上にFAの純層が見られる。

かまど 規模が比較的大きく、時代からもかまどの存在が考えられたが、存在した形跡は認められず、東隣の53号住居址が竈屋として機能していたのではないかと考えられる。

遺物出土状態 遺物は住居址全体に分布し、他の住居のような集中性は認められなかった。92の壺は住居北東隅床面直上から、131の壺は北壁際中央から出土した。

出土遺物 遺物総数は171点、実測可能遺物は壺と壺の2個体で、器形から鬼高I式といえる。

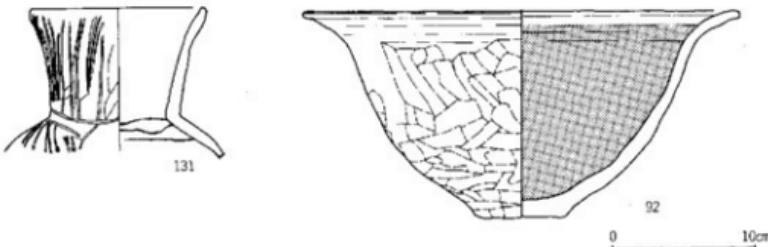


図60 54号住居址 出土遺物

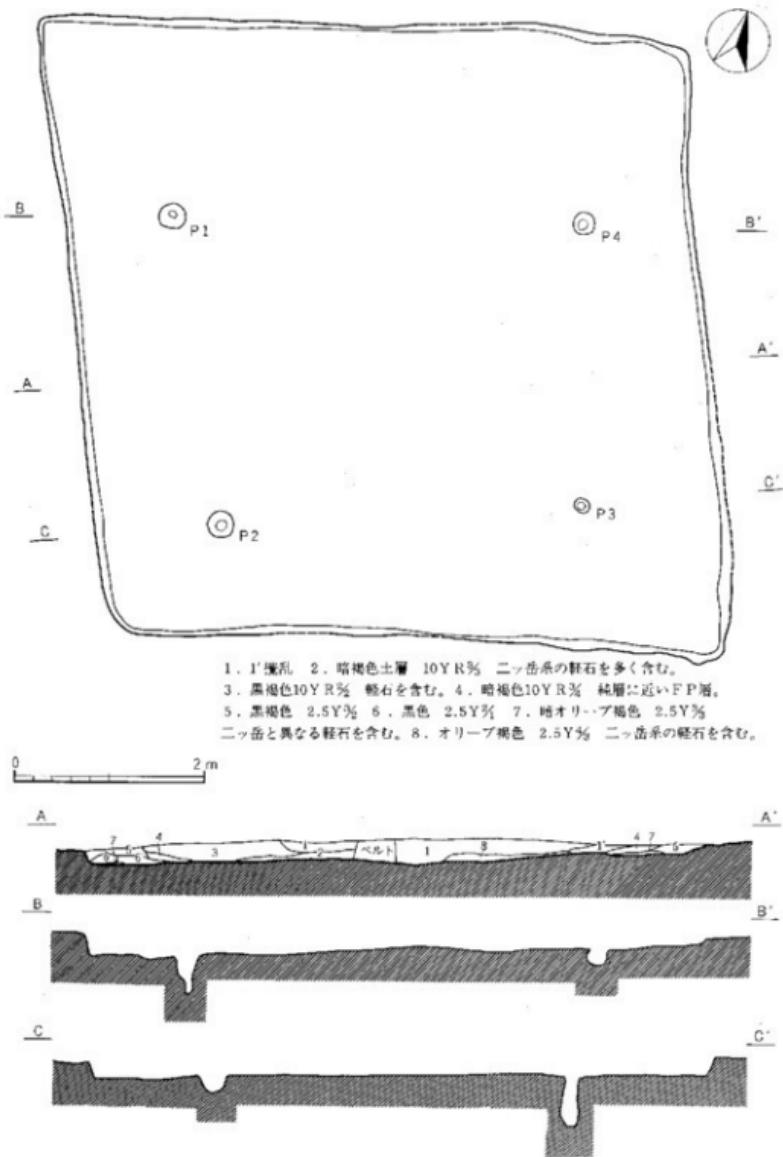


図61 54号住居址

第58号住居址

遺構 本住居址は、L—4 グリッドに位置する。平面形は正方形だが、南壁がやや短かく、かまどを東壁中央やや南寄りに持つ、規模は長軸5.66m、短軸5.58mであり、面積は29.34m²を測る。主軸方位はN-91°-Eを指す。遺存状況は極めて良好である。覆土は6層で最上部にF A層が見られる。確認面からの壁高は70cmで、壁の立ち上がり角度は77°である。床面は平坦で中央からかまどにかけて堅緻面が広がる。柱穴は4本確認され、南東隅から方形の貯蔵穴が検出された。

かまど 東壁に9:5でやや南寄りに位置する。主軸方位はN-97°-Eで住居址より6°南に傾く、残存状態は極めて良く、袖石、天井石、支脚の他焼成部から煙道にかけての天井も残って検出された。全長1m60cm、幅90cmで煙道をわずかに住居外に張り出している。

遺物出土状態 かまと貯蔵穴付近に遺物の集中が見られ、特に貯蔵穴の中からは、683と696の壺、695の瓶、684の杯の4個体が重なり合う状態で出土した。その他床面直上からは、411、410の甕、413の瓶、644の壺、302の杯の5点が出土した。

出土遺物 本住居址からの出土遺物は713点と多く、実測個体数は土師器杯が6個体、壺が1個体、瓶2個体、壺1個体、壺2個体、甕3個体の15個体であり、鬼高Iに含まれる。695の瓶だけは、和泉期の様相を呈するが、出土状態から本住居址のものと思われる。

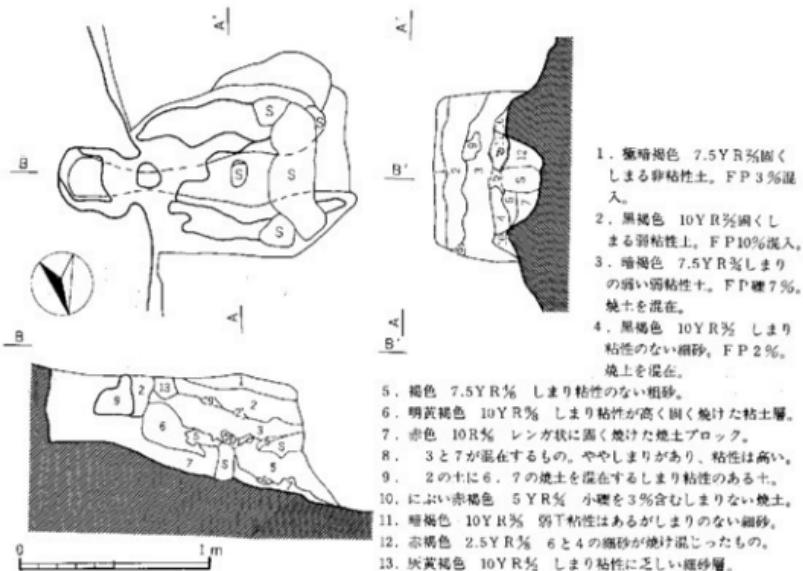


図62 58号住居址：かまと

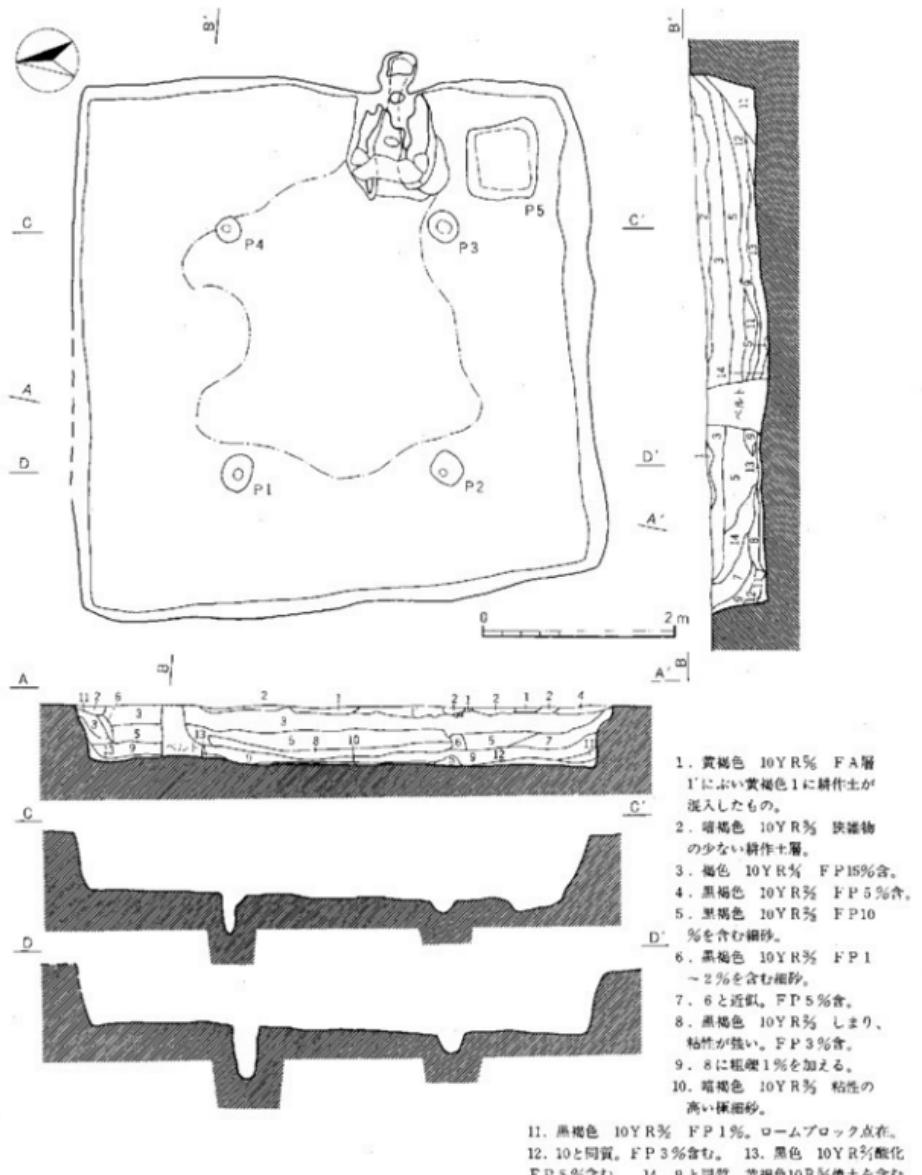


図63 58号住居址

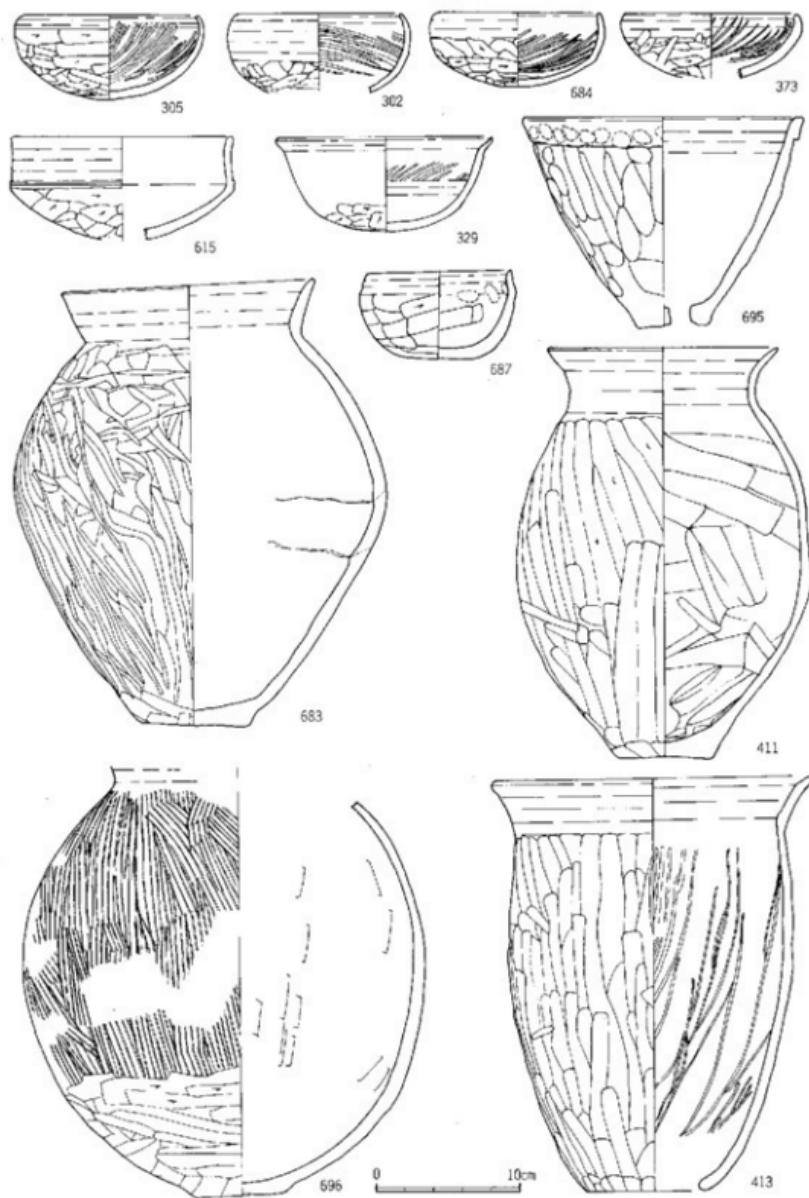


图64 58号住居址 出土遗物

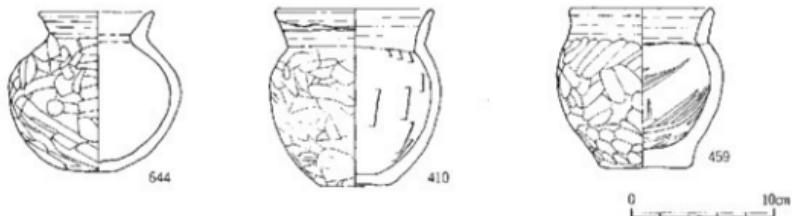


図65 58号住居址 出土遺物

第59号住居址

造構 本住居址は、M-1 グリッドに位置する。平面形はやや横長であるが正方形に近い形になっている。かまどを東壁中央やや南寄りに持つ。規模は東西軸6.04m、南北軸5.7mであり、面積は32.4m²を測る。主軸方位はN-89°-Eを指す。遺存状況は極めて良好である。確認面からの壁高は平均60cm、壁の立ち上がり角度は平均83°で、しっかりした形で検出された。床面は、平坦であ

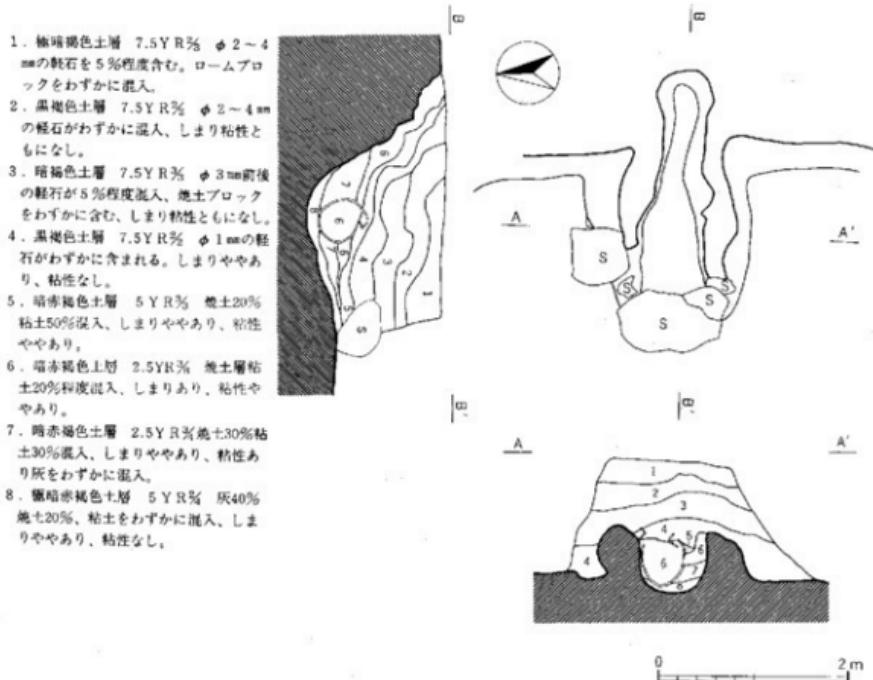
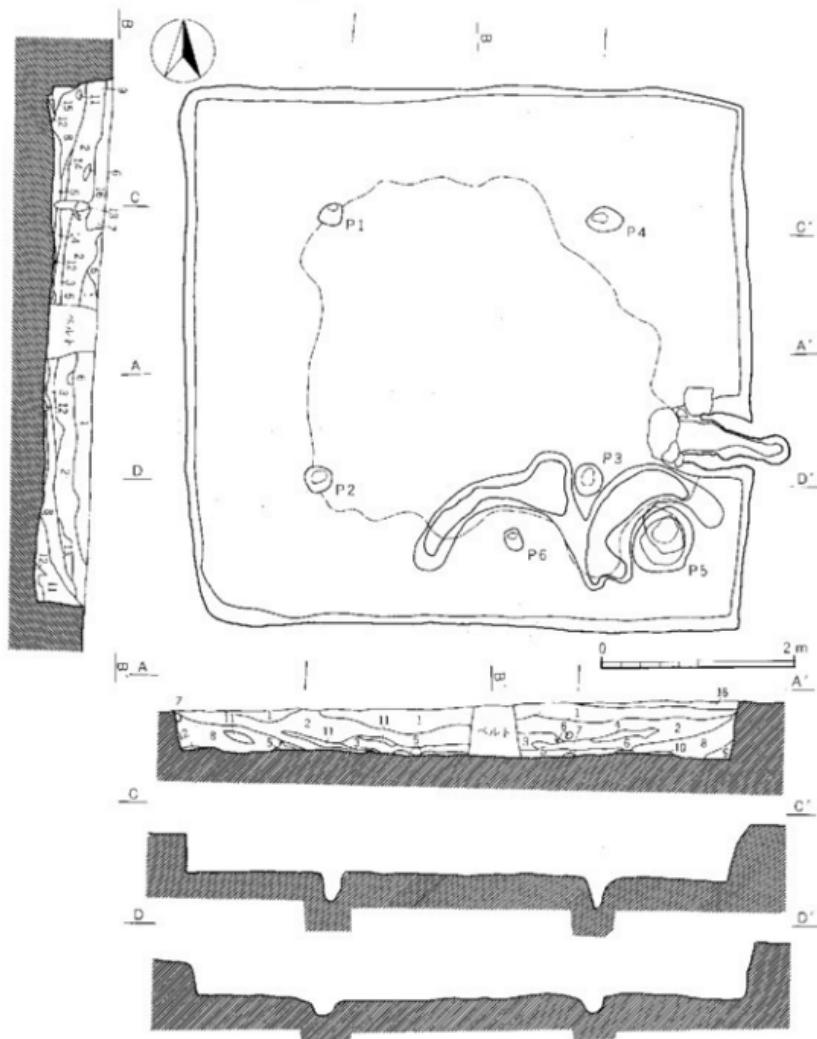


図66 59号住居址 かまど



1. 褐色 10Y R% しまり粘性のない細砂。FA 優れり。
2. 黒褐色 10Y R% 固くしまり粘性のある土。FP 10% 含む。
3. 黒褐色 10Y R% 固くしまり粘性もある。FP 5% 含む。
4. 暗褐色 7.5Y R% しまり弱いが粘性あり。砂土。FP 3% 含む。
5. 黒褐色 10Y R% しまり粘性高い。FP 1%、小螺を含む。
6. 黄褐色 10Y R% FA ブロック層
7. 明黄褐色 10Y R% ロームブロック層。
8. 黑褐色 10Y R% しまり粘性あり。FP 1% 小螺 7% 含む。
9. 黑褐色 10Y R% しまり弱いが粘性高い。小螺 3% 含む。
10. 暗褐色 10Y R% しまり粘性高い。小螺 1% 含む。
11. 黑色 2.5Y % しまり粘性あり。FP 5% 含む。
12. 黄褐色 10Y R% ソフトローム層。
13. 黑褐色 10Y R% しまりなく粘性弱い。FP 1% 含む。
14. 黑褐色 10Y R% 13と同質。候生物の少ない細砂。
15. 黄褐色 10Y R% ローム層。
16. 暗褐色 10Y R% 候生物減少の細砂。耕作上層。

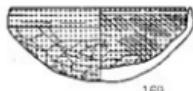
図67 59号住居址

るが、南へいくにつれて低くなっている。南壁際中央に、入り口施設と思われる馬蹄形状の盛り上がりとピットが確認された。中央からかまとP_oにかけて堅敏面が広がる。

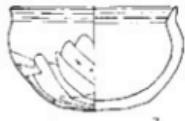
かまと 東壁、9:5でやや南寄りに位置する。土軸方位はN-97°-Eで、住居主軸より8°南に傾く。残存状態は良好で、左右の軸石、床に落ちているが天井石も確認された。ただ支脚は検出されなかった。全長1m48cm、全幅85cmで、燃焼部、煙道部共に良く焼けている。

遺物出土状態 住居中央からかまとにかけて遺物の集中が見られる。特に注意を惹くのは、かまと内から447の甕が燃焼部におさまる形で出土しており、かまとの使用状況を思わせる。

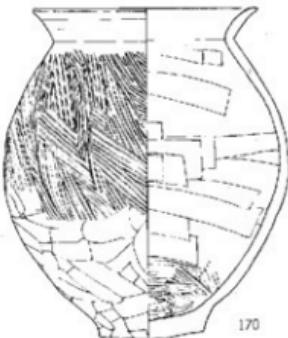
出土遺物 本住居址の出土遺物は509点で、実測可能個体数は、壺1個体、壇1個体、甕3個体である。出土遺物は鬼高I式に比定できる。



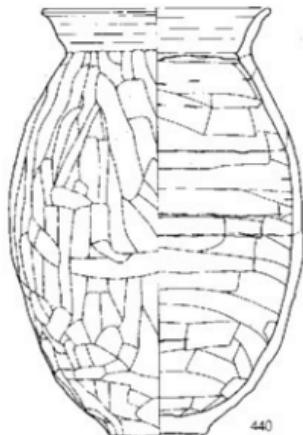
169



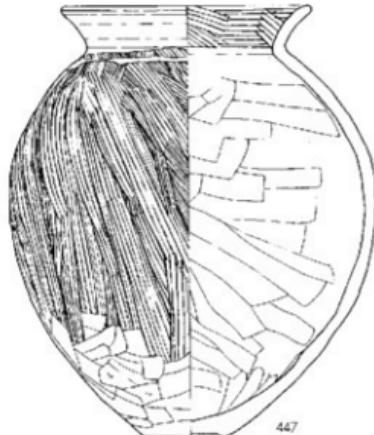
7



170



440



447



図68 59号住居址 出土遺物

第60号住居址

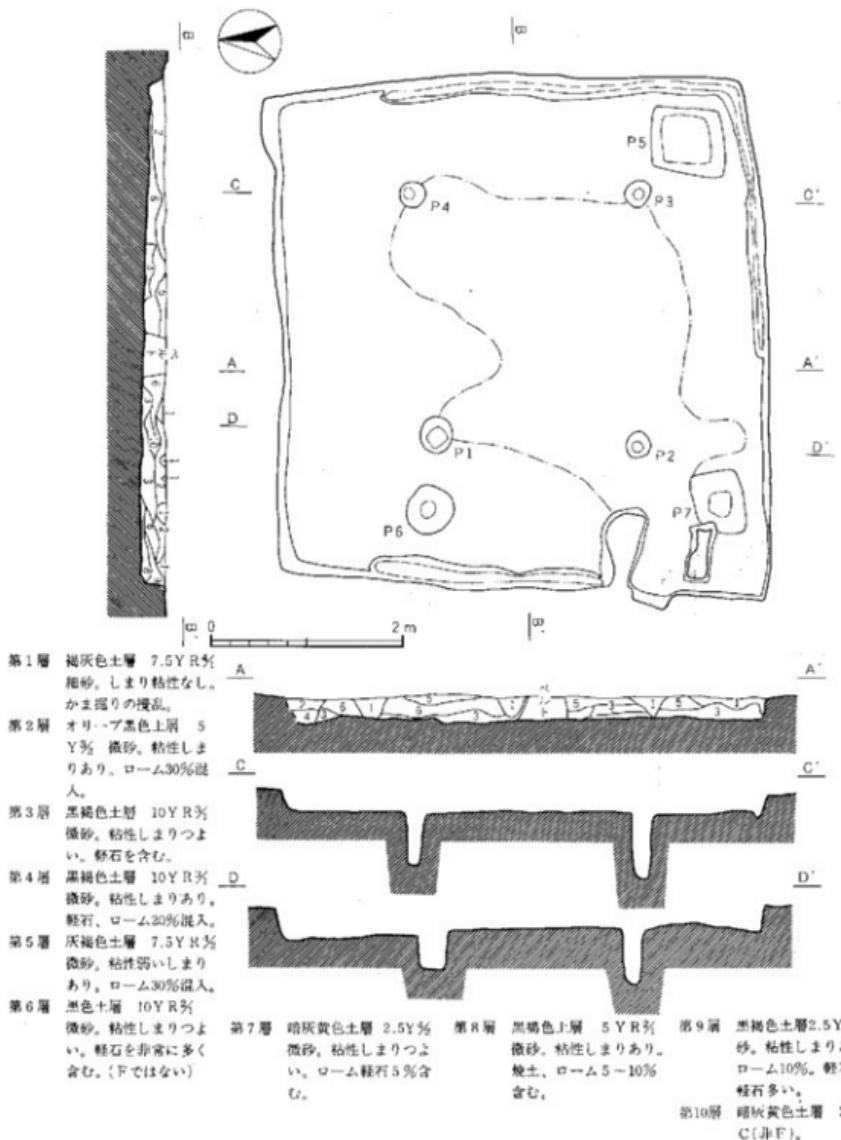


図69 60号住居址

遺構 本住居址は、N-(+1)グリッドに位置する。平面形はやや横長の長方形である。規模は長軸5.58m、短軸5.2mであり、面積25.79m²を測る。主軸方位はN-90°-Wを指す。確認面からの壁高は30cmを測る。床面は南側がやや高くなっている。中央からかまとにかけて堅壁面が広がる。

かまと 西壁に2:1で南寄りに位置する。主軸方位はN-75°-Wで住居主軸より15°北へ向いている。残在状態は悪く、右袖は検出できたが、左袖の壁際、煙道部が削平されている。

遺物出土状態

かまとと南壁付近に遺物の集中が見られる。136の妻はかまと前の床面直上から出土している。

出土遺物 総数259点で遺物から鬼高I式といえる。

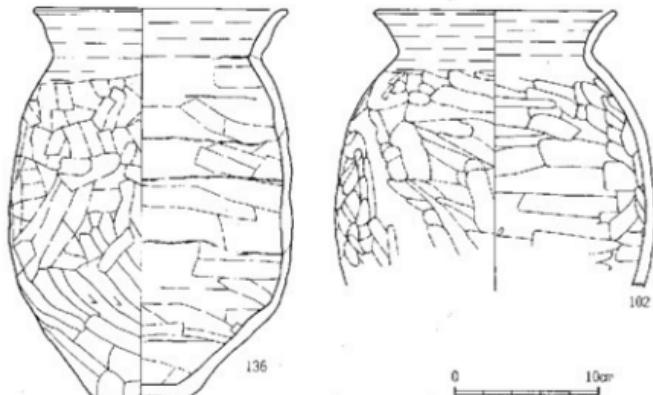
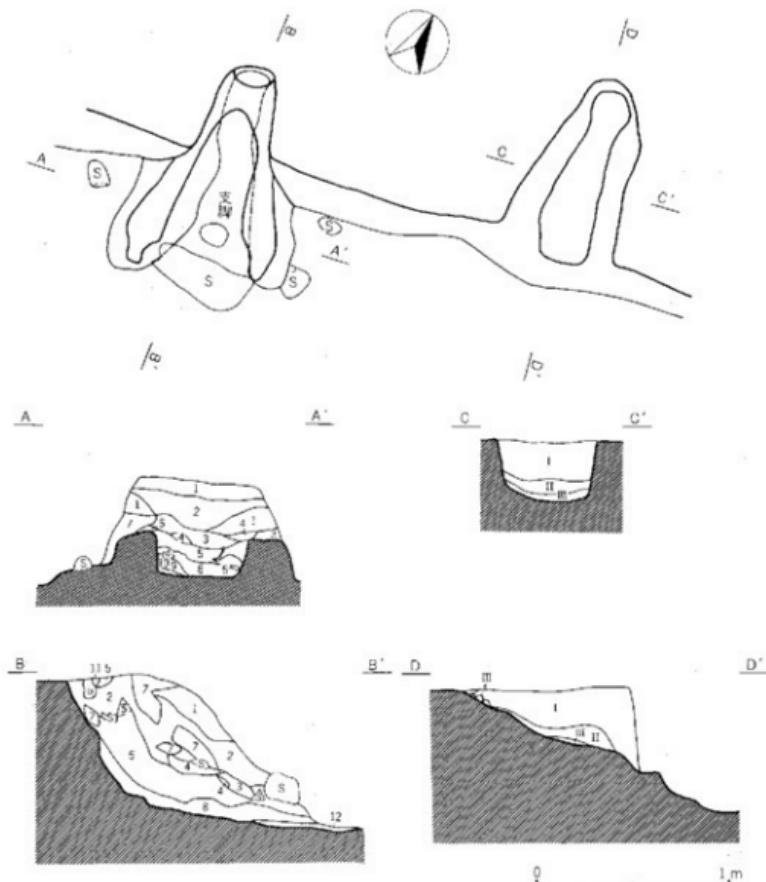


図70 60号住居址 出土遺物

第56号住居址

遺構 遺跡地中央F-3グリッドに存在する大型の堅穴住居址。ほぼ正方形に近いが、やや横長であり、南壁中央やや東に張り出しピットを持つ。規模は9.0×8.7m、面積は75m²で、同時代の堅穴住居址の2倍の大きさがある。柱穴は8本を検出。四隅の4本が支柱穴で、間の4本は補助柱穴と考えられるものである。柱穴間寸法は、P₁-P₂ 2.2m、P₂-P₃ 2.3m、P₃-P₄ 2.0m、P₁-P₅ 2.8m、P₅-P₆ 2.4m、P₆-P₇ 2.1m、P₇-P₈ 2.8m、P₈-P₁ 2.6mである。周溝は検出されなかった。貯蔵穴は、南壁中央に張り出しピットの形で検出された。方形で84×54cm、深さ70cmである。底は86×40cmで北側に地下式土坑の形で広がっている。このピットについては、当初入り口施設ではないかと考え調査を実施したが、ピットの形状、覆土とその堆積状態、48号住居址の張り出しピットの比較、他遺跡の例などを考えあわせて、貯蔵穴と判断したものである。主軸方位はN-10°-Wである。覆土は基本的には5層に分けられ、最上部にFA層が存在する。確認壁高は70cmであるが、推定では80cmほどあったものと思われる。平均75°の傾斜でしっかりした形で検出できた。床面には凹凸がある。張り出しピットの内側に、入り口施設と思われる馬蹄形状の盛り上がりとピットを検出した。これにより張り出しピットは貯蔵穴であるという判断に確実性が加わった。住居南東隅は、縄文の柄鏡形敷石住居址66号を切っている。66号は東側を14号住居

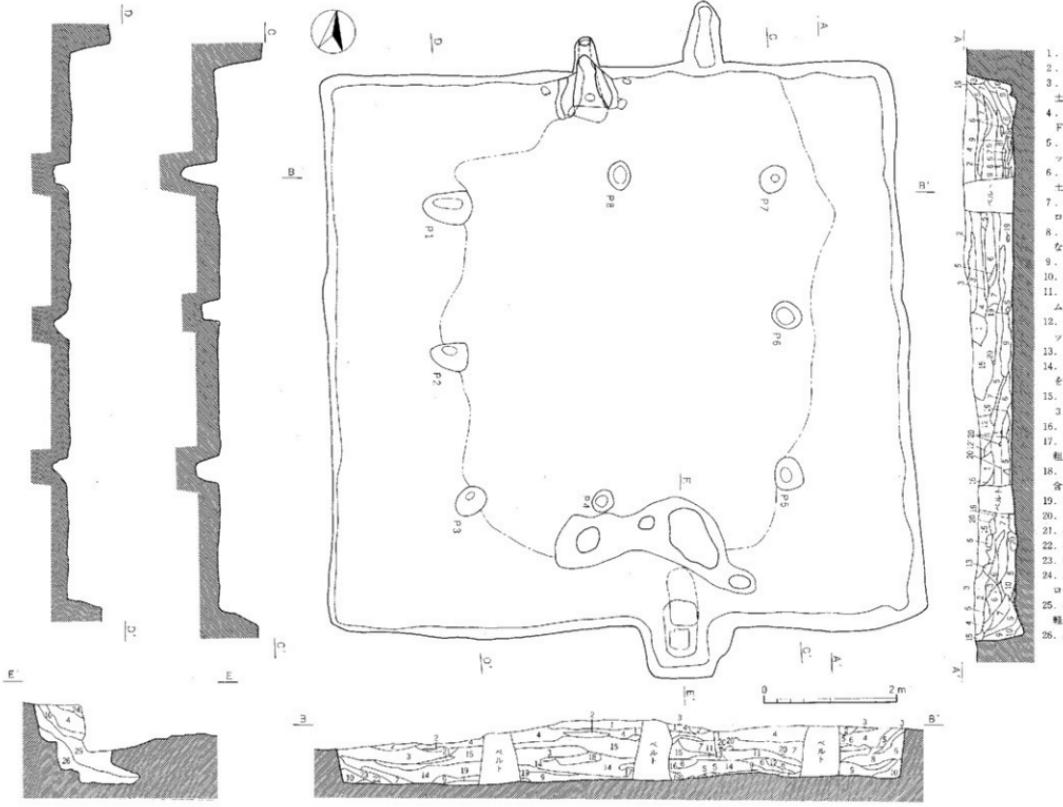


第1層 によい褐色土層 7.5Y R% しまり粘性の高い粘質土 F P 1%、焼上含む。
第2層 極褐色土層 10Y R% しまりややあるが粘性なし、φ 5mm前後の F P 3%含む。
第3層 暗褐色土層 10Y R% 第2層と同質だが粘性ややあり。
第4層 褐色土層 7.5Y R% しまり粘性の高い粘質土。
第5層 明赤褐色土層 2.5Y R% 固く焼けてしまった焼土塊。
第6層 棕色土層 5 Y R% 固く焼けてしま

った焼土塊（白色土が焼けたもの）。
第6層 極褐色土層 10Y R% しまり粘性の高い粘質土、4と近似。
第7層 黒褐色土層 10Y R% しまり粘性のない粘質土、φ 3mmの石粒。F P 含む。
第8層 灰色土層 10Y R% 比重の軽い灰屑（わら灰状）
第9層 暗赤褐色土層 5 Y R% しまり粘性の高い粘質土に5と8が混在する。
第10層 によい赤褐色土層 5 Y R% しまり粘性ともによりよりも高い土。

第11層 によい赤褐色土層 5 Y R% しまり粘性の少ない緻密な砂質土。
第12層 明暗灰色土層 7.5Y R% 粘質の高い緻密な黑色灰層。
東面のかまど
第1層 極褐色土層 7.5Y R% 粘性しまともにある密な土。
第II層 極褐色土層 10Y R% 固く焼けてしまつた焼土。
第III層 黑褐色土層 10Y R% 粘性あるが少し弱い粘質土。

図71 56号住居址 カマド



1. 黄色 7.5YR 5% しまり粘性なく小礫3%含む。
2. 明赤褐色 10YR 5% FA ブロック
3. 黒褐色 10YR 5% しまり粘性とともにある衝撃な土。FP 3%含む。
4. 黒褐色 10YR 5% しまり粘性がややある砂質土。FP 5%含む。ムーブロックを含む。
5. 琉璃色 10YR 5% しまり粘性あり。ロームブロックを含む。
6. 黒褐色 10YR 5% しまり弱いが粘性のある砂質土。小礫を3%含む。
7. 電気色 10YR 5% しまり弱いが粘性はある。ロームブロックを10%含む。
8. におい黄褐色 10YR 5% しまり粘性のある衝撃な土。
9. 底質褐色 10YR 5% 粘性のある砂質土。
10. 黒色 10YR 5% しまり粘性高い。ドリ5%含む。
11. におい黄褐色 10YR 5% しまり弱い。ロームブロックを点在する。
12. 黒褐色 10YR 5% しまり粘性なく、ロームブロック、小礫7%を含む。
13. 電気色 10YR 5% しまり粘性高い。脈状。
14. 黑褐色 10YR 5% しまり弱いFP 10%小礫を含む。
15. 黑褐色 10YR 5% しまり粘性高くドリ15%小礫3%をロームブロックを含む。
16. 砂質色 10YR 5% しまりのある砂質土。
17. 黒褐色 7.5YR 5% しまり弱いが粘性は高い。粗礫1%含む。
18. 黑褐色 7.5YR 5% しまり粘性強い。小礫3%含む。
19. 刻剥褐色 10YR 5% ソフトローム層。
20. 刻剥褐色 10YR 5% ロームブロック。
21. 黑褐色 10YR 5% しまり粘性の弱い砂質土。
22. 黑褐色 10YR 5% 粘性あるがしまりの弱い砂質土。
23. 黑褐色 10YR 5% 22よりも粘性が高い。
24. 底質褐色 10YR 5% 粘性でしまりのある細砂。ローム30%を含む。
25. 黄色 10YR 5% 粘性でしまりのある細砂。輪柱多く含む。
26. 黑褐色 10YR 5% 粘性でしまりのある細砂。

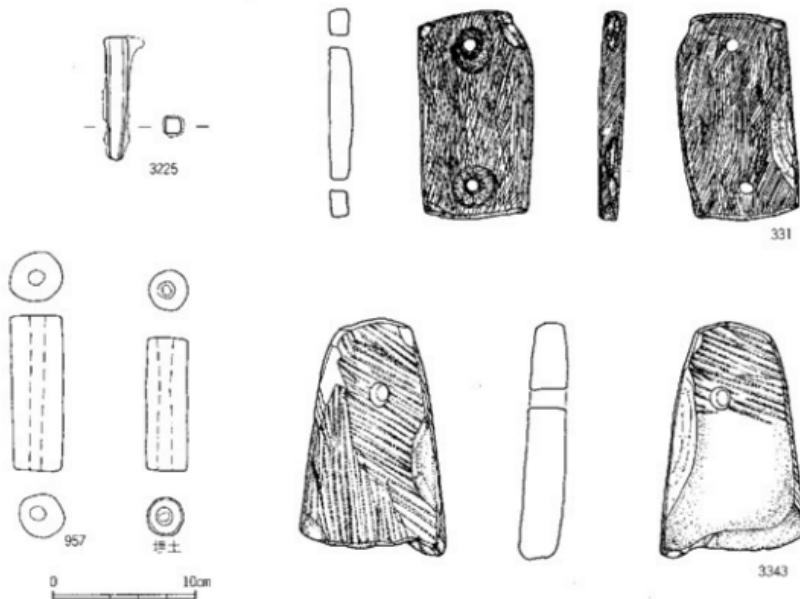


図72 56号住居址 出土遺物



図73 56号住居址 出土遺物

址にも切られており、その際掘り出されたと思われる石が、56号住居址南側に入っていた。

かまど 北壁に2基検出した。東側は廃棄されたもので、主軸は住居と同じ。2:1で東よりである。西側はN-13°-Wで4:5で西よりの位置に造られている。西側は人井部は落ちていたが煙道部は残っていた。西側かまどは全長1.25m、全幅0.95mであり、煙道を住居外に張り出している。

遺物出土状態 住居内で、合計3434点の遺物と119点の石が出上している。床面直上から最上部まではばまんべんなく出土している。20cm以下で塊8、环9、高环1、管玉1、クルミ3、石製模造品2が出土、20cm~40cmで塊5、环10、高环3、クルミ1、40~60cmで塊2、环8、須恵环蓋1、須恵甕1、60cm以上で塊2、环1、釘1、石鐵1、白磁1が出土している。これらの出土状況と器形を考えあわせると、この住居内の土器のみで、下層にいくにつれて古いものがはいっているという様子が見られる。なお、甕、甌といった日常の炊事に使われたと思われる遺物は、見つかっていない。

出土遺物 遺物は白磁を除きすべて鬼高I式の時期に含まれる。

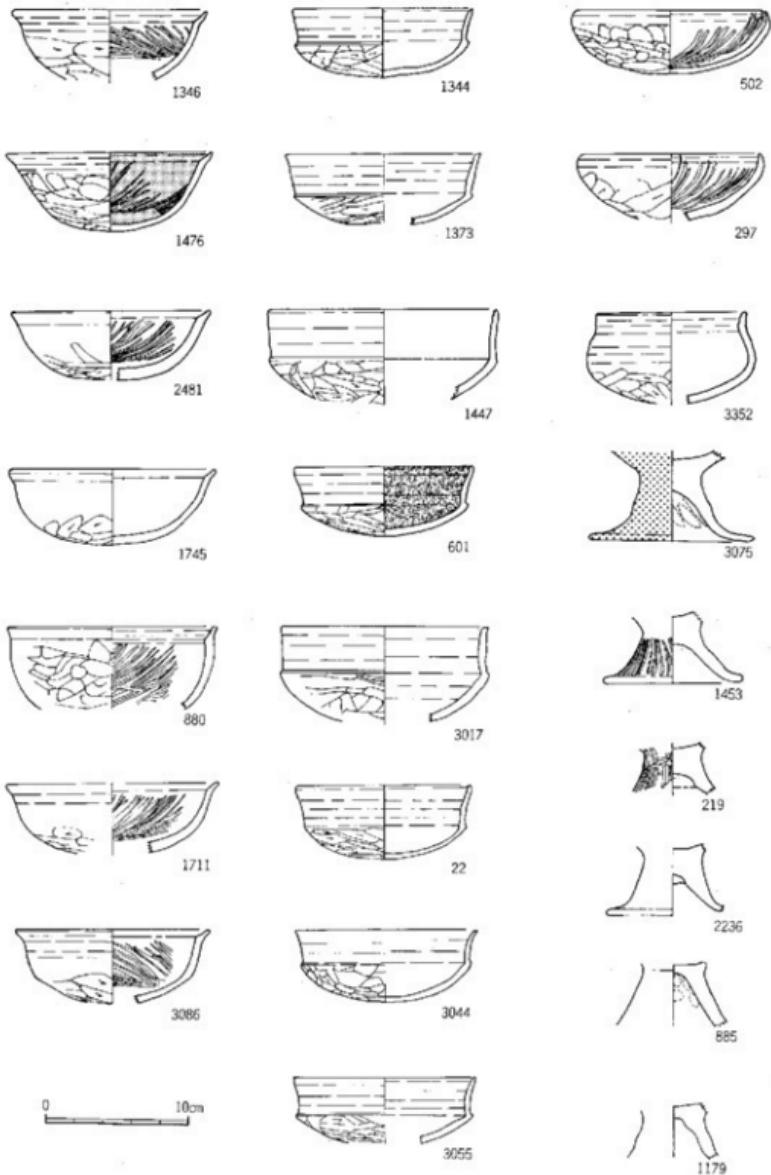


图74 56号住居址 出土遗物

第10号住居址

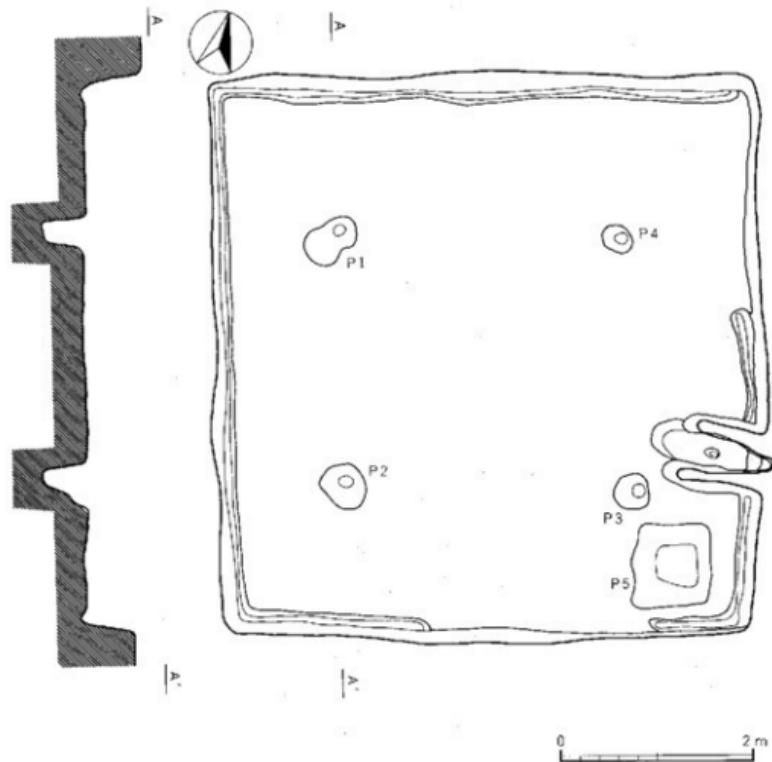


図75 10号住居址

遺構 遺跡中央Q-4 グリッドに存在する竪穴住居址である。方形でややたて長である。かまどを含めた発掘は58年に掘り、今年度残りを掘ったものである。寸法は 6.0×5.8 mで約33m²である。柱穴4本を確認、N2.9m S3.08m E2.66m W2.64m。周溝は、南壁中央と東壁北を除き深さ2~5cm、巾10~16cmで全周、かまどの下にもまわっている。主軸N 78°-Eである。壁高は確認は50cm、推定は60cmである。平均傾斜74°で、しっかりした形である。床は全体に平坦で中央は軽く踏みしめられている。

遺物出土状態 床面直上で、焼4、須恵器1、环2が出土している。

出土遺物 58年度を含め、鬼高I式である。

第14号住居址

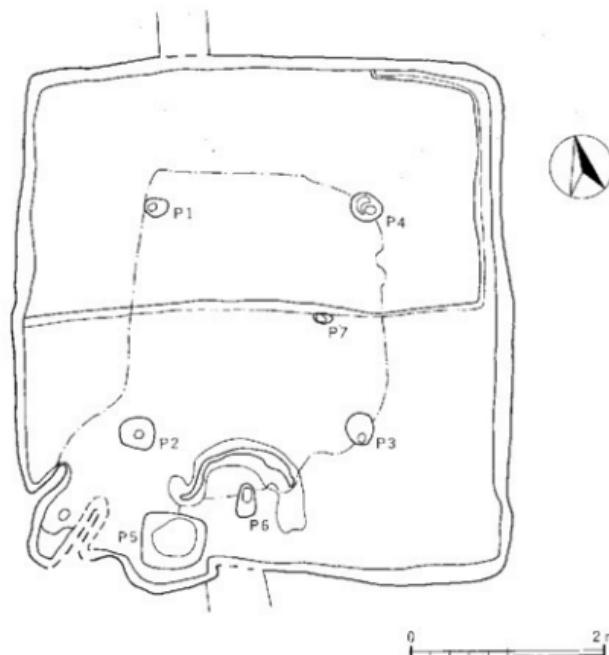


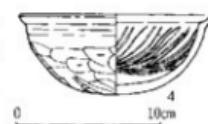
図76 14号住居址

遺構 遺跡北ドー5グリッドに存在する竪穴住居址である。ややたて長の長方形で、南壁西に張り出しひびがある。南西隅で66号住居址を切っている。58年度の調査で西側などは未標にしてあり、今回完掘したものである。寸法は5.5×5.2mで面積は約27m²である。他の内容は58年度の報告を参照していただきたい。

かまど 住居址南西隅のコーナーに南北向き、N-132°-Wで造られて図77 14号住居址出土遺物である。左袖は調査区境の部分にはいっているため完掘できなかつたが、比較的の残りは良く、支脚も検出できた。この取りつけ位置は、東西に8号、56号という住居址の間に造られたという立地に関係しているのではないかと思われる。

遺物出土状態 床直上から焼1、环1が出土している。

出土遺物 鬼高I式に含まれる。



奈良・平安時代

第44号住居址

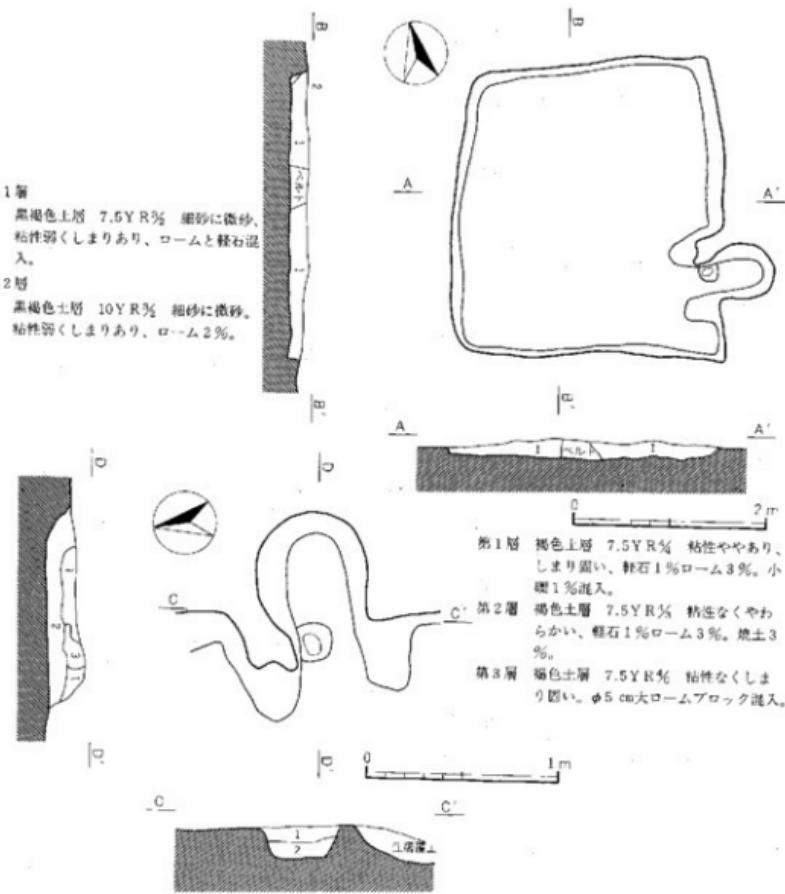


図78

造構 調査区北部⑥-(-1)グリッドに位置。長軸3.22m 短軸2.88m 面積8.285m²。主軸方位N-98°-E。確認壁高10cm推定壁高20cm。壁角度63°。貼床有り、南西側がやや低い。

かまど 東壁に5:2で南よりの位置。主軸方位N-85°-E。補石の痕跡あり。

出土遺物 14鉢・17环。土師質須恵出土。9世紀国分期と考えられる。

第46号住居址

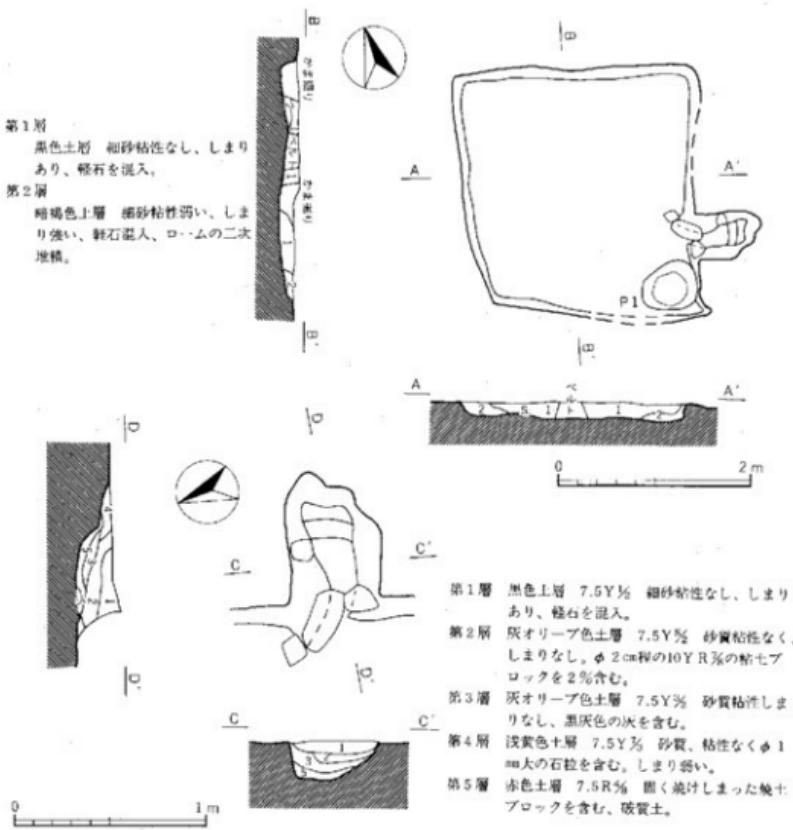


図79 46号住居址

造構 調査区北部隅8-2グリッドに位置。四辺の長さが異なる四辺形。長軸2.74m短軸2.74m面積6.338m²。貯藏穴は住居址南東隅に検出62×50cm深さ19cm椭円形。主軸方位N-109°E。確認壁高10~15cm推定壁高30cm。平均傾斜59°でゆるやかに立ち上がる。床面は平坦。

かまと 東壁2:1で南よりに位置。主軸N-104°E。袖石あり。焚口部は石で鳥居状に組む。支脚と思われる石も検出。袖以外を住居外に張り出している。全長104cm全幅50cm

遺物出土状態 かまと付近に集中して鉢・壺など出土。

出土遺物 19・21・23鉢、426壺（土師）。時期は9世紀区分期頃のもの。

中・近世

墓

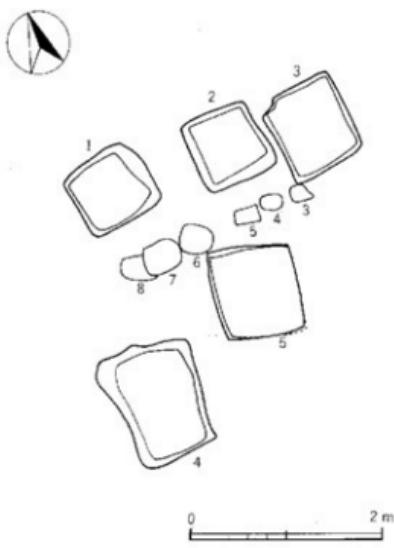


図80 墓

6. 妙栄信女 ⑩和五戊子天 正月十五日 (1768年)

7. 寂冬岸勇哲禪定門 延享三天 十月十九日 (1746年)

8. 欣妙妙徳信女 宽政七乙卯天 六月十日 (1795年)

墓石の下からは、墓坑が5基検出された。いずれも方形で、ロームの堅い地山をまっすぐに掘りぬいていた。中からは、歯、骨の他、副葬品として納められた漆椀、煙管、柄鏡の他、棺を止めたと思われる釘が出土。古錢は、寛永通宝が圧倒的に多く17枚、内1枚は寛保元年(1741年)大坂高津(母錢)のもの、もう1枚は正徳四年(1714年)日光御用錢銅である。他は宋錢3枚で、元祐通寶(年代不明)元符通寶(銅)宋哲宗元祐元年(1098年)、天聖元寶(銅)宋仁宗 天聖元年(1023年)である。

出土した古錢や骨の数から考えると、1つの墓坑に1遺体ではなく、4号には2遺体5号には3遺体がほうむられていることが判明している。

非常に現代に近い時代の発掘であるため、考古学のみならず、民俗学との関係での資料になるものと思われる。

遺跡北、C-(4)グリッドに江戸時代の墓石が8基見つかった。

土地改良事業地内で、すでに子孫が土地を離れているため移転することになり、その下を発掘調査した。

墓石の戒名は以下の通り、○印は推定したものである。元はたて書き。

1. 月一日 天女靈

2. 寅岳正寛禪定門 享保十^⑩庚戌天
八月五日 (1730年)

3. 宝應三癸酉天 言桂道實信士靈位
十二月二九日 (1753年)

4. 岸女淑信女不生位 ⑩曆十庚^⑩
天 正月十日 (1760年)

5. ⑩水^⑩朱禪林道定信士位 三
月七日 (1775年)

掘立柱建物跡

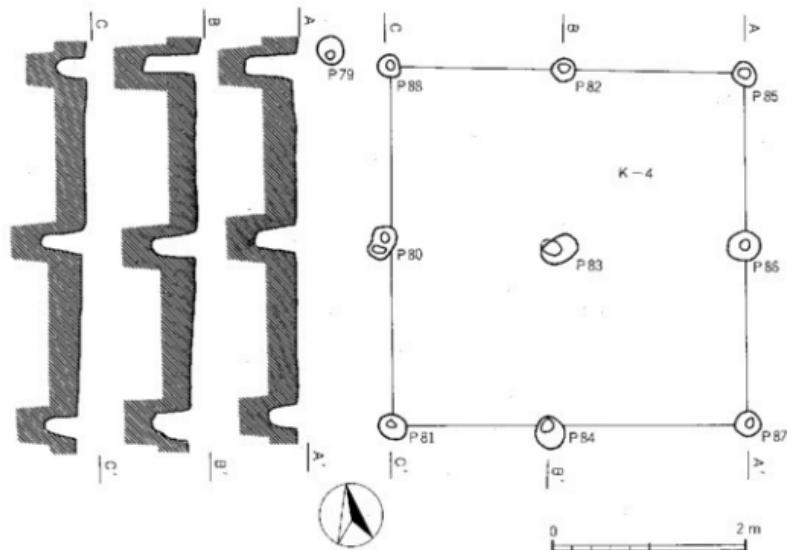


図81 4号掘立柱建物跡

遺跡地中央やや北にある。全体として、ほぼ正方形であり、9本柱であることから、鬼高集落に伴う倉庫と考えられる遺構である。主軸はN-95°-Eであり 3.74×3.68 mの規模である。柱穴間寸法は1.64~2.1mまで広さがあるが、1.8mが5ヶ所になっている。

その他の遺構

竪穴住居跡と掘立柱建物跡、墓の他に、本遺跡では、土坑、井戸、ピット、集石遺構、溝が検出されている。

土坑の内、墓に近いものは、墓坑と思われ、覆土中にカルシウムの堆積が見られた。

井戸は、54号住居址を切って1基、遺跡地面にもう1基検出された。54号を切ったものは、多量の石が投げこまれており、廃棄されたものであった。もう1基は、ややせまいが、完掘した後水がしみだしてきた。

溝は、昭和58年度調査区で検出されたものの続きで、その北側が検出された。B軽石を多く含んだ新しいものであるが、管下が出上している。

まとめ

遺構について

この遺跡でまず取り上げなくてはならない住居址は、48号住居址と56号住居址の大型住居址2軒である。いずれも平均的な広さの2倍の面積を持ち、8本柱で張り出しピットを持っている。規模から考えて集落の首長の住居と考えられるものである。48号住居址からは瓶が1点出土しているが、それのみで、他は环・塊・高杯という出土遺物の内容構成にも、そのことが表わされているようである。遺物の形式を見ると鬼高I式に含まれるが、詳細に見ると、48号が先行し、その後56号に移行していると判断できる。

この張り出しピットは、14号住居址を含め、3軒の住居址に見られるが、これは、千葉・東京では、大型住居址のみならず普通の住居址でも検出されているものである。千葉上ノ台、八王子中田、伊勢崎東流通団地、富岡郷土、赤城寺内等の発掘事例や担当者の意見を見ると、県内のものではなく南関東、中部の系統であるようと思われる。出土遺物の分析を通して、その系譜がたどれるのではないかと考えるものである。

本文中でのべたように、この張り出しピットは、入り口施設ではなく、貯藏穴であることは、14号住居址や56号住居址の例を引くまでもなく明らかである。市内では、まだこの小神明の地のここ九料遺跡のみで見つかっているだけである。

また、本遺跡からは、58年度調査部分とあわせて、柄鏡形敷石住居址が3軒見つかっている。これは、九料遺跡（南側）から見つかった縄文時代の竪穴住居址とは時代が異なり、また3軒という出土の多さは、竪穴住居址の検出の数とくらべてみた時、異常な多さとなる。

のことについても、今後検討していかなくてはならないだろう。

この遺跡の古墳時代の竪穴住居址は、34軒であり、これをすべて鬼高I式の土器を伴うものとしてまとめてしまうと、集落としては不自然な大きさと数である。

そこで、遺物を詳細に検討し、利根川章彦氏の「児玉地方の土師器編年」を指評として分類してみると、次のように分けられた。

| | | | |
|------|-----|--------------|--------------------------------|
| 第1段階 | 鬼高I | | 7号 |
| 第2段階 | " |II期 | 4号 5号 6号 47号 |
| 第3段階 | " |II~III期 | 48号 |
| 第4段階 | " | III期 | 45号 49号 53号 54号 58号 59号 60号 3号 |
| 第5段階 | " | III~IV期 | 10号 56号 |
| 第6段階 | " | IV期 | 14号 |

この分類を集落配置で検討してみると、第4段階の住居址が、この遺跡（九料遺跡北側）の中心をしめ、なおかつ、西へむかって半円形をえがいて立っていることに気づく。その中心の空間地には据立柱建物跡があり、ここが集落の広場として機能していたと考えられるのではないだろ

うか。

また、九料遺跡南側における集落のまとまりについては、整理が進んでいる段階で、器形による区分はできないが、地形や配置から考えると、2つの集落構成が考えられる。詳しい内容については整理がすんだ段階で明らかにしていきたい。

遺物について

遺物出土状況で、48号住居址と56号住居址が注目に値する様相を示している。覆土中、上部まで遺物が、含まれている。遺物分布は、普通、平面分布と垂直分布で、その接合状態を関係づけて、その住居の生活空間などを考えるものであるが、この場合は、遺物の詳細な偏年による区別で、住居内に土が堆積していく様子が、覆土の土層からと、遺物の偏年からも把みとれる材料を提示できるのではないかと思う。

遺物については、60号住居址出土のN183の甕が、九料遺跡の頃で取りあげた。東北系統の舞台式と見られる器形を示していることにも注意をはらっておきたい。

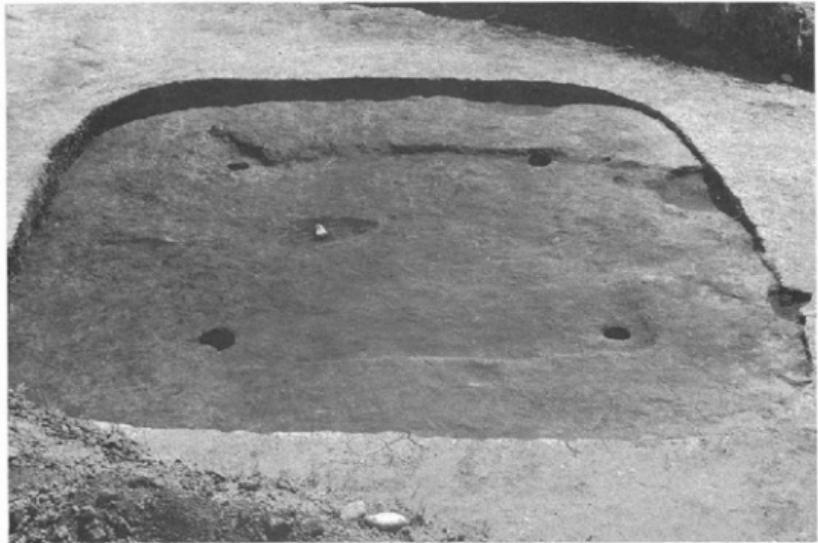
56号住居址からは、クルミの実の炭化したものが出土した。当時の食生活を再現する上で、財料の1つとなろう。56号は、他に管土、石製構造品が出土しており、他の住居とは、きわだった特徴を示している。

56号住居址から出土の甕No696は、貯蔵穴内から出土しており、その様子から、まちがいなく住居につくものであるが、器形から、折り返しがあり、比較的まっすぐつまり、底部の穴も小さいなど、和泉の特徴をもっており、他の遺物と異なる。ただ、同じ貯蔵穴内から出土したNo.683の甕も、和泉の器形に近いことから、鬼高Iの早い時期には、共伴する例の1つと思われる。

3号住居址から出土した硬玉大珠は、いうまでもなく、縄文時代を代表する垂飾である。原石は新潟県糸魚川流域で採集されるのみで、交易によってもたらされたものと思われる。平均10mmほどが普通の大きさである。県内では水上、原町、塙田、富岡で出土している。

参考文献

- 「はなひらく縄文化」栃木県立博物館 第7回企画展パンフレット
- 「古銭と紙幣」矢部倉吉 1984
- 「季刊考古学」13号 都立一橋高校地点発掘調査報告
- 「縄文化の研究」住居
- 「千葉 上ノ台遺跡発掘調査報告書」
- 「八王子 中田遺跡発掘調査報告書」
- 「伊勢崎東流通田地遺跡発掘調査報告書」
- 「富岡 郷土遺跡発掘調査報告書」



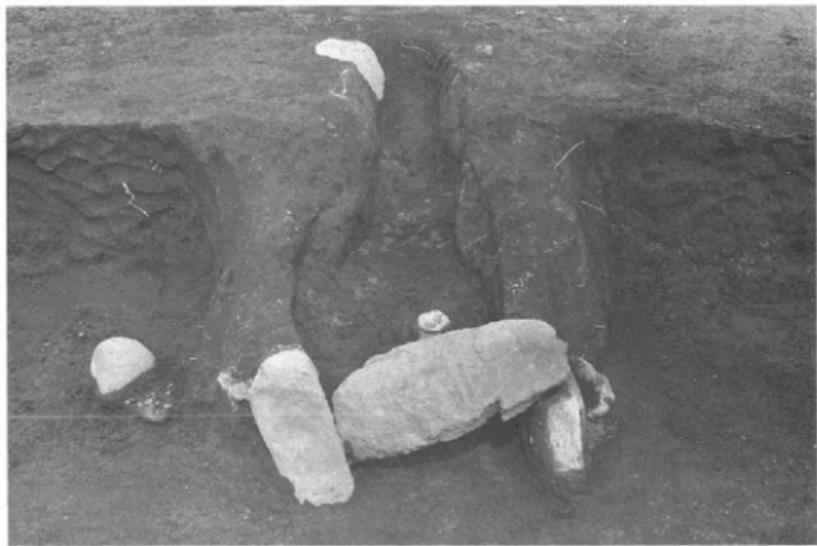
28号住居址



28号住居址炭化物出土状况



26号住居址



26号住居址かまど



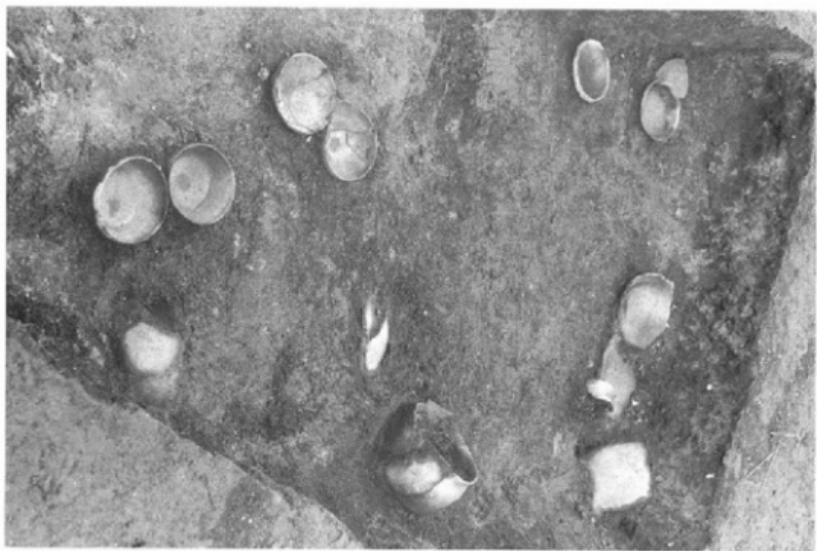
29号住居址



34号住居址出土No.1 青环



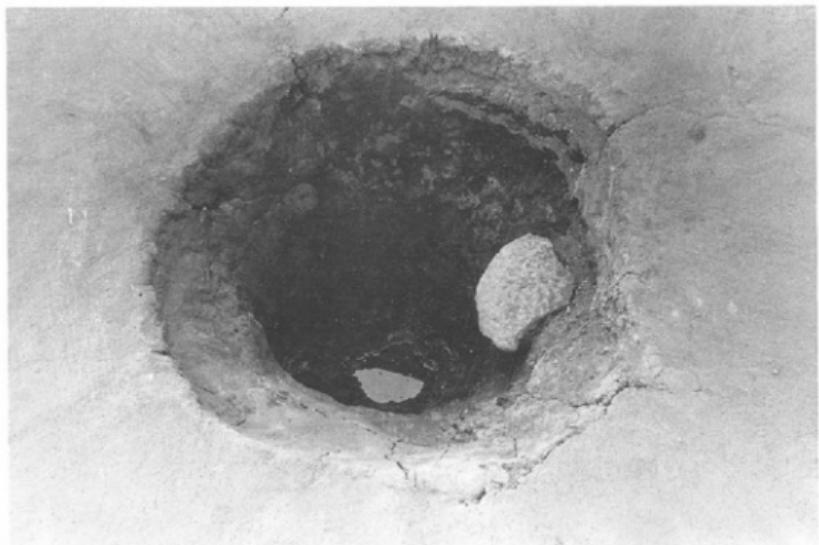
31号住居址遺物出土状況



31号住居址遺物出土状況



36号住居址



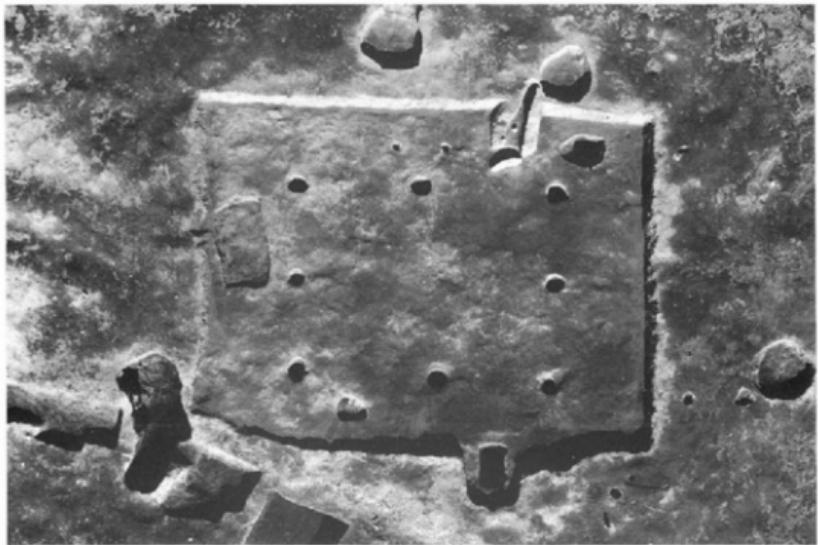
1号井戸



九料遺跡全景



66号住居址



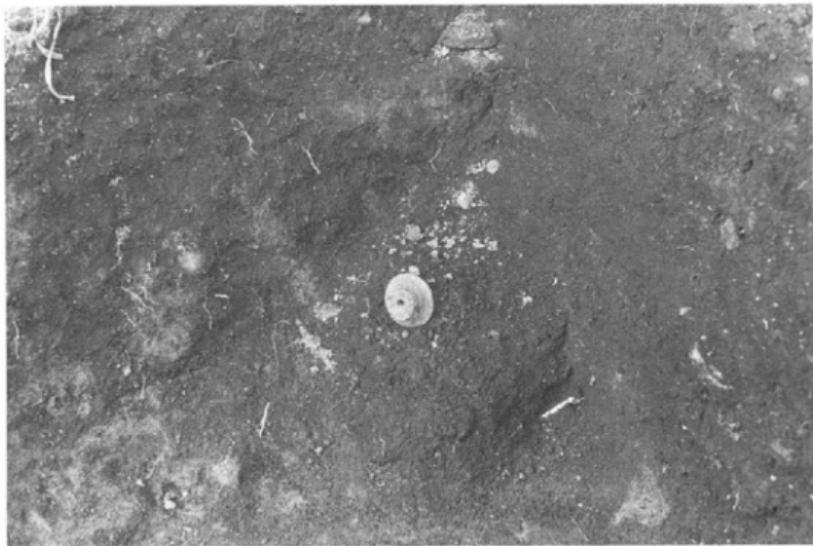
48号住居址



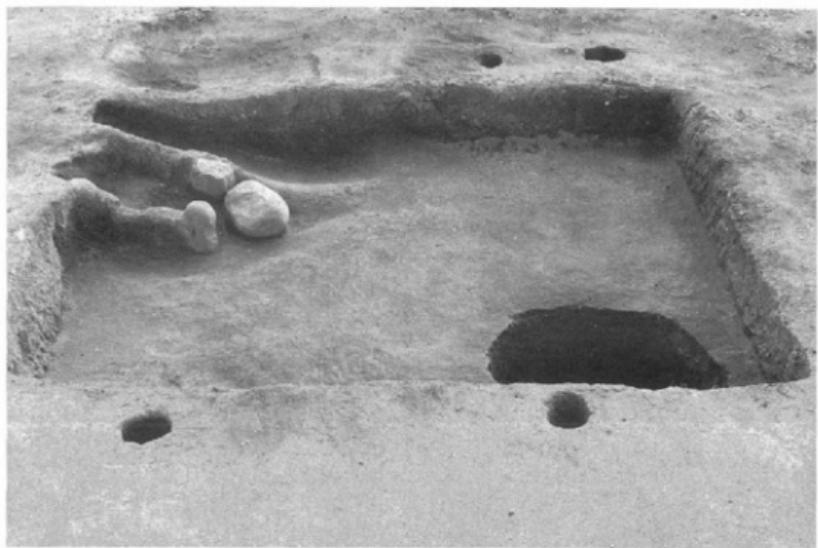
48号住居址かまと



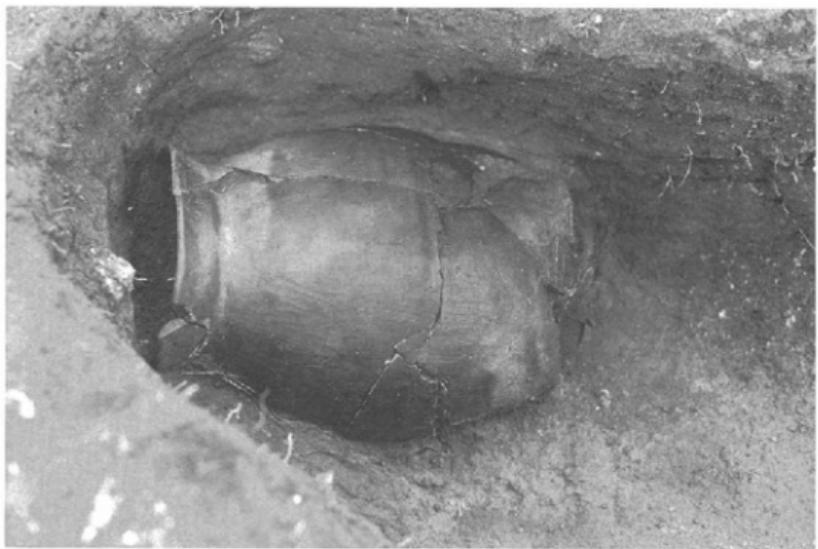
48号住居址張り出しピット



52号住居址出土No.93紡錘車



53号住居址



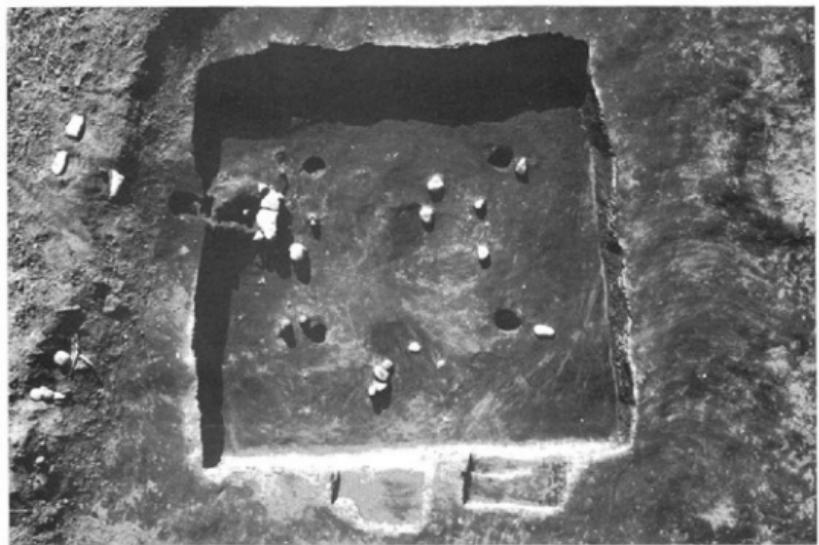
53号住居址出土No.3 瓷



53号住居址No.1 甌



53号住居址No.2 增



58号住居址



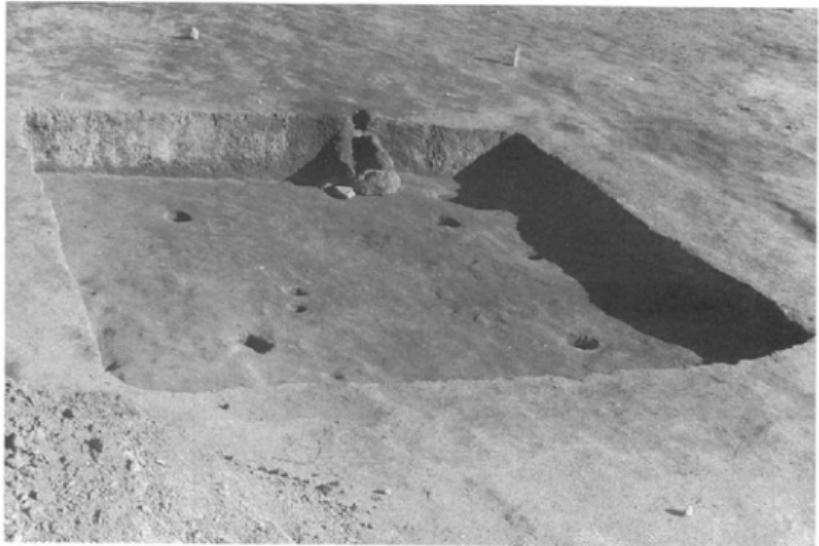
58号住居址かまど



58号住居址出土No.695瓶



58号住居址出土No.683罐



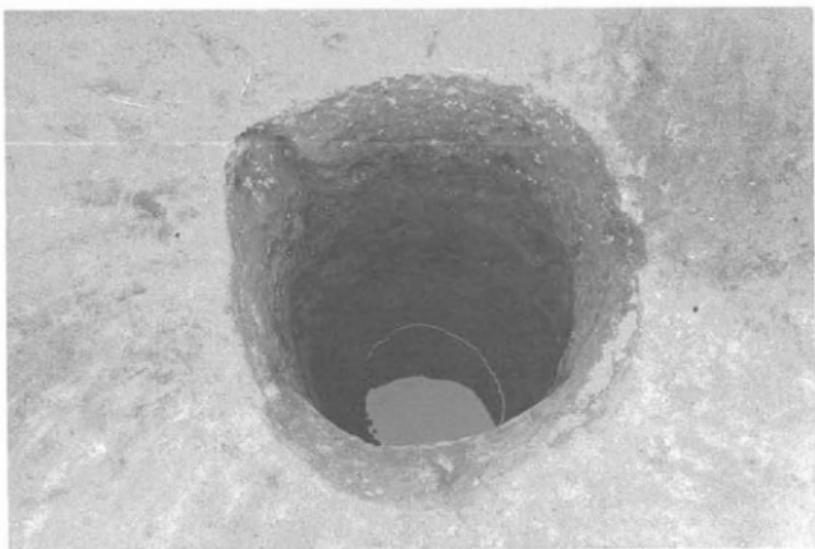
59号住居址



59号住居址かまど



59号住居址出土No.447號



3号井戸



56号住居址西側かまど



56号住居址張り出しピット



67号住居址



69号住居址



70号住居址



72号住居址



74号住居址



75号住居址



76号住居址



79号住居址



80号住居址



81号住居址



85号住居址



86号住居址



88号住居址



80号住居址遺物出土狀況



71号住居址



73号住居址



82号住居址



83号住居址



84号住居址



86号住居址



88号住居址



89号住居址



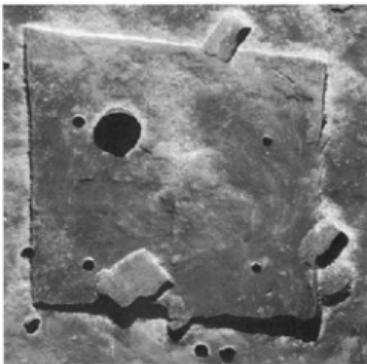
航空写真撮影風景



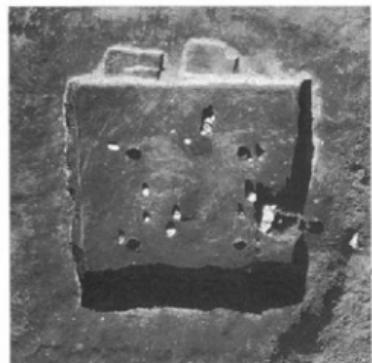
作業風景



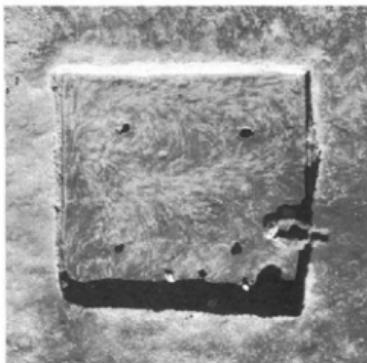
61号住居址



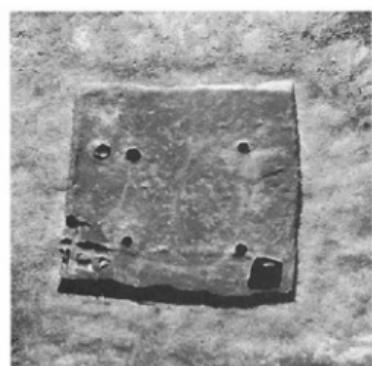
54号住居址



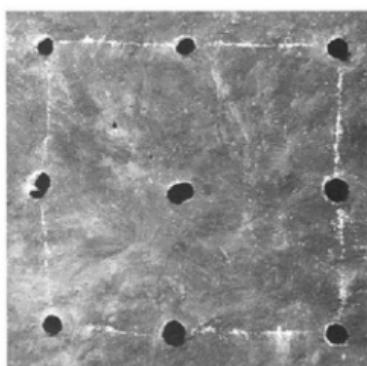
58号住居址



59号住居址



60号住居址



4号掘立柱建物跡



現地説明会



作業風景



墓



記念写真

60C-1
小神明遺跡IV 湯氣遺跡、九料遺跡

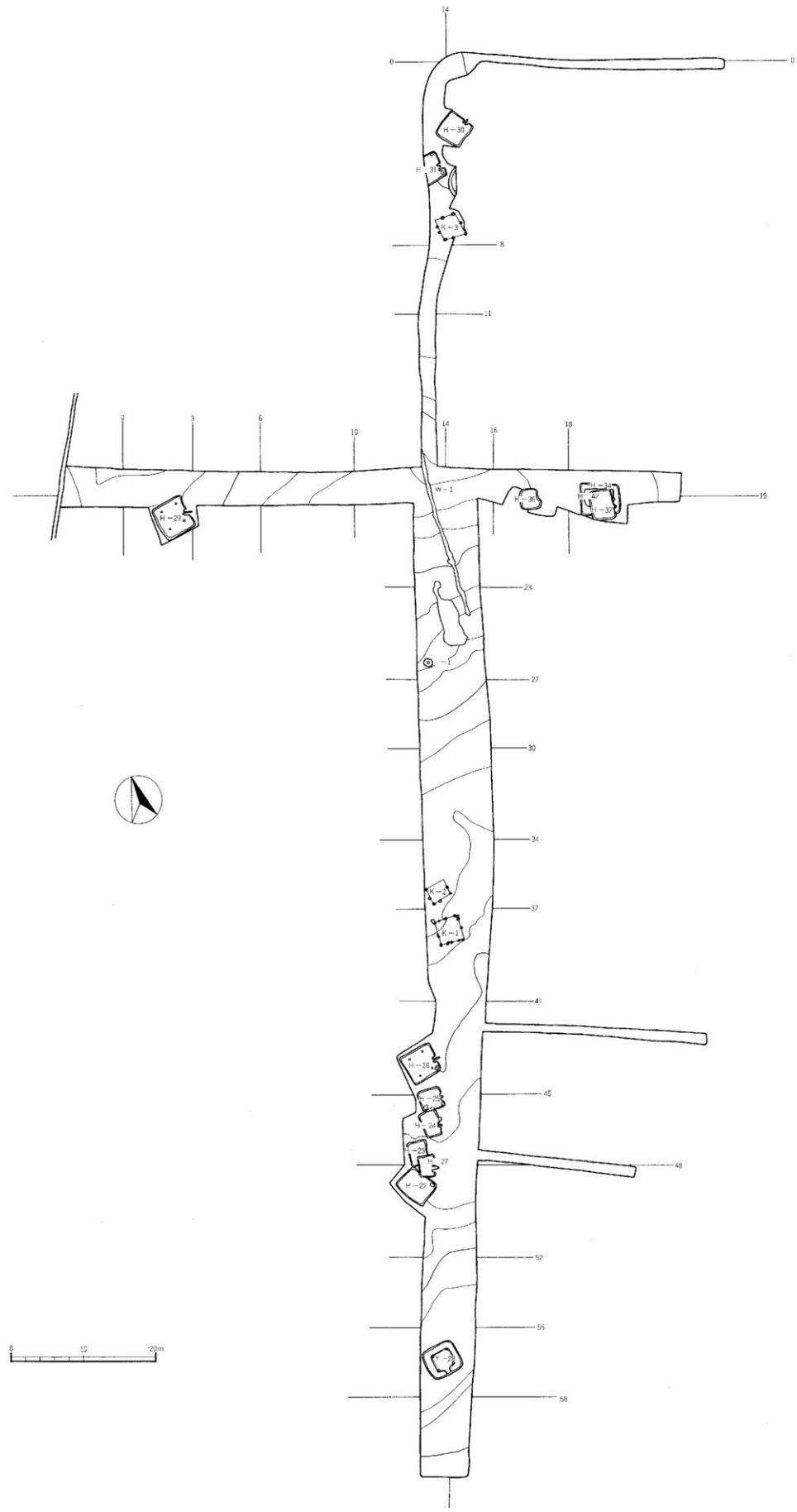
昭和61年3月20日 印刷

昭和61年3月31日 発行

編集・発行 前橋市教育委員会
前橋市大手町二丁目12番1号

印 刷 株式会社 報 通
前 橋 市 箱 田 町 361-3





付図1 通気道跡

